

2008年度 活動事例一覧(応募受付順)

No.	活動名称	応募者名称	都道府県	掲載頁
1	この町で普段の暮らしを続けたいな	縁側プロジェクト	愛媛県	4
2	地域へのかかわり方を見直そう!! 職員・入居者としてではなく“地域住民”として	有限会社 プランニングフォー 認知症高齢者グループホーム「古都の家 学園前」	奈良県	5
3	学幸へ行く会 幸齢者いきいき体操クラブ ~住み慣れた地域で、我が家で安心して暮らすには~	社会福祉法人 勝曼会 あすみの丘在宅介護支援センター	千葉県	6
4	外国籍の子と認知高齢者とのアートコミュニケーションの取り組み	多文化共生施設 DOREMI みらい	岐阜県	7
5	アニマルセラピー活動	NPO リトルハンド	和歌山県	8
6	認知症の老人と共に生きる「後世への最大遺物」 - 幼老共生社会の復権・復活を目指して -	世代間交流まちづくり「回想法」校舎の無い学校	徳島県	9
7	居場所づくり - 長洲カフェの試み	誰でも安心して暮らせる地域福祉の会	千葉県	10
8	安心を築く力 + 子どもの感性 = 将来につながる力	うえずき松寿苑デイサービスセンター	京都府	11
9	認知症を理解してもらい、地域で生き生き生活	医療法人 千輝会 グループホーム神田イン国分	大阪府	12
10	顔の見える関係づくり・歩いていけるところに茶話会を	澗の会	東京都	13
11	認知症教育を通じた人づくり・町づくり	鹿児島純心女子大学 やさしさの網の目推進委員会	鹿児島県	14
12	創作劇「地域で支えよう! 本当に知っていますか、認知症のこと」とシンポジウム	神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科	兵庫県	15
13	仲間と共に、若年認知症をイキイキと!	若年認知症グループ どんどん	神奈川県	16
14	東五のひろば	青梅市東青梅五丁目	東京都	17
15	認知症のことを相談できる場所を知ってもらおう!! <地域交流学習会 - 在宅介護支援センターと地域住民とのネットワーク作り - >	社会福祉法人 白寿会 玉出地域在宅サービスステーション	大阪府	18
16	シルバー110番 地域認知症無料相談所	社会福祉法人 未生会 グループホームちくりんえん	京都府	19
17	先生の異業種体験から生徒の職場体験と共に育つ地域福祉活動	グループホームはるすのお家・阪南	大阪府	20
18	社会福祉法人がすすめるまちづくり~認知症の理解者を増やそう~	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島	福島県	21
19	「地域と認知症の人」から「地域の中の認知症の人」へ向けて	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島 ライフ吉井田小規模多機能型居宅介護事業所	福島県	22
20	これからの地域を支える近隣型助けあい活動	おとなりさんネットワーク「えん」	福岡県	23
21	公立中学校の空き教室・花壇を住民と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する	社会福祉法人 リデルライトホーム	熊本県	24
22	大都市における認知症介護家族の現状と求めているもの	社会福祉法人 浴風会 ケアスクール	東京都	25
23	認知症について考える会(だいじょうぶネット)	東住吉区東田辺地域ネットワーク委員会	大阪府	26
24	認知症のある人の福祉機器展示館	国立障害者リハビリテーションセンター研究所	埼玉県	27
25	認知症サポーター養成講座の開催推進	コープさっぽろ福祉活動交流支援センター	北海道	28
26	小・中学生認知症サポーターからのメッセージ	彦根市 介護福祉課	滋賀県	29
27	認知症に対する地域活動と妻の在宅介護(個人の講演活動)	南相馬市生涯学習アドバイザー・認知症の人と家族の会 福島県支部相双地区所属	福島県	30
28	ハッピーライフのご提案 認知症にやさしいまちづくり	認知症予防推進員の会 有楽ねりま ミニ講座グループ	東京都	31
29	鮫川村 認知症予防に向けて村民と行政が共に助け合う仕組みづくり	鮫川村役場住民福祉課・鮫川村地域包括支援センター	福島県	32
30	認知症メモリーウォーク・千葉	第2回 認知症メモリーウォーク・千葉実行委員会	千葉県	33

No.	活動名称	応募者名称	都道府県	掲載頁
31	市民後見センターきょうと	NPO 法人 ユニバーサル・ケア	京 都 府	34
32	地域型認知症予防旅行プログラム5日間体験版「ボケない脳は旅で鍛える」	内閣府認証NPO 法人 日本トラベルヘルパー協会	東 京 都	35
33	慣れ親しんだ地域で暮らし続ける～より地域に開かれたグループホームを目指して～	西脇 陽子	新 潟 県	36
34	大笹生地域の福島市立大笹生小学校4年生と当事業所利用者との世代間交流	医療法人 生愛会 附属介護老人保健施設 生愛会ナーシングケアセンター	福 島 県	37
35	認知症を理解することからはじめよう～できることから1つずつ～	みぢか ネットワーク	福 岡 県	38
36	目黒たけのご流・認知症ネットワーキング	目黒認知症家族会 たけのこ	東 京 都	39
37	今、伝えたい認知症～区民(認知症の人も!)で支えあう町づくり～	認知症サポート連絡会(横浜市都筑区)	神 奈 川 県	40
38	あさがお協力隊の活動について	旭福祉保健センター サービス課 高齢者支援担当 保健師一同	神 奈 川 県	41
39	地域に根ざした多職種の間人による多角的な認知症支援	認知症の人と共にくらす会“きくち”	熊 本 県	42
40	親父パーティーが地域を変える!～認知症地域資源ネットワーク「NICE!藤井寺」の構築～	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会	大 阪 府	43
41	認知症 ささえあえるまちづくり事業	津山市地域包括支援センター	岡 山 県	44
42	であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援「あんしんメイト」	NPO 法人 認知症サポートわかやま	和 歌 山 県	45
43	地域のよさを見直し、地域を生かすケアの実践	社会福祉法人 久万高原町社会福祉協議会	愛 媛 県	46
44	認知症 予防と介護と支えあい～認知症にやさしい地域づくりを目指す～	「白い箱の会」	東 京 都	47
45	認知症を学び、知り、理解する ・認知症サポーター養成講座を周辺地域の町会を主に町内会館で開催 ・千葉メモリーウォークに参加 ・認知症の人やその家族との交流や懇親会	社会福祉法人 三育ライフ シャローム若葉(地域包括支援センター「千葉市あんしんケアセンターシャローム若葉」、グループホーム「虹の家」、認知症対応型通所介護「ひばり」)	千 葉 県	48
46	認知症高齢者 就労支援デいの試み	社会福祉法人 創隣会 グループホームきずな	東 京 都	49
47	若年認知症支援の会「愛都の会」の活動	若年認知症支援の会「愛都の会」	大 阪 府	50
48	認知症にならないための活動	藤松まちづくり協議会	福 岡 県	51
49	回想法の取り組み	関西医大滝井病院認知症疾患医療センター	大 阪 府	52
50	子供は、みんなで守っていかないといけないんだ。～安全パトロール。継続は力なり～	NPO 法人 たんぼぼの会 グループホーム やすらぎのさと	大 阪 府	53
51	あそびながらリハビリテーション～身体機能・認知機能の活性化を図る～	社会福祉法人 芦北町社会福祉協議会 予防推進課「あそびRe(り)パーク」	熊 本 県	54
52	地域住民とともに認知症予防活動の実践	社会福祉法人 ふらで福祉会	福 岡 県	55
53	学習の継続と3本柱	認知症サポーターの会“かなざわささえ隊”	神 奈 川 県	56
54	認知症高齢者に対する在宅支援事業	NPO 法人 福島県シルバーサービス振興会	福 島 県	57
55	認知症の方々から学ぶ暮らし方・生き方探し事業	特定非営利活動法人 ゆうらいいふ	滋 賀 県	58
56	地域の声で始まった「認知症劇」	長岡市地域包括支援センター	新 潟 県	59
57	「いつでも いつまでも きれいでいたい」ヘアメイク、ハンドマッサージ等の体験により笑顔全開、気分リフレッシュ	NPO 法人 日本理美容福祉協会 滋賀米原センター	滋 賀 県	60
58	「朱雀の会 若年認知症家族会」の活動	朱雀の会 若年認知症家族会	奈 良 県	61
59	認知症支援ネットワーク構築事業	社会福祉法人 上土幌町社会福祉協議会	北 海 道	62
60	山形市介護相談員派遣事業	山形市介護相談員(山形県山形市健康福祉部介護福祉課)	山 形 県	63

No.	活動名称	応募者名称	都道府県	掲載頁
61	ふれあいいきいき・サロンと認知症をもつ人を支える仕組みづくり	近畿大学豊岡短期大学通信教育部 社会福祉士養成課程	兵庫県	64
62	いくつになっても“イキイキ”と - 「安心・快適・満足」の美容サロンが地域のセーフティネットに -	東京都美容生活衛生同業組合	東京都	65
63	認知症地域支援体制構築等推進事業「地域資源マップ」の作成	東郷町地域包括支援センター	愛知県	66
64	「共生ステーションめいまい」の活動	共生ステーションめいまい	兵庫県	67
65	若年認知症の方を支える講演会活動～一人の方の思いを形にすることで広がった地域作りの事例～	認知症の方の暮らしを考える会	兵庫県	68
66	めざせ 徘徊フリーゾーン - 人間関係が希薄な都会で認知症を支える -	医療法人社団つくしんぼ会	東京都	69
67	～ build a bridge ～ 心につなぐ橋渡し	玉本 あゆみ	大阪府	70
68	地域と共に歩む老人ホームを目指して	社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名	沖縄県	71
69	小地域の公共施設を利用した「高齢者の出前居場所作り」事業	特定非営利活動法人 ふれあい坂下	茨城県	72
70	思い出ミュージアムで“なじみ”の場づくり～総泉病院 思い出療法	総泉病院 ウェルエイジングセンター	千葉県	73

活動名称	この町で普通の暮らしを続けたいな
活動要旨	相互扶助を中心としたコミュニティを再構築することを目指し、ボランティアグループや地域住民とともに、フリーマーケットや地域交流会などを展開。
応募者	縁側プロジェクト 稲田 里香、中矢 暁美
連絡先	〒791-8044 愛媛県松山市西垣生町 1497 託老所 あんき内 縁側プロジェクト

(概要)

一人ひとりに合わせたきめ細かいケアは少ない人数でないと難しいのではないだろうか。そんな思いから、住み慣れた地域で、認知症や障害があってもその人らしく暮らせる場所作りができればと、平成9年3月に託老所あんきを立ち上げました。開設して約4年間、利用者が一日1人か2人多くて4人という日々が続きました。しかし、その中で、認知症の高齢者の方々の介護を通して、その人、一人ひとりに寄り添うには、家族、地域との連携が不可欠であるという事に気づきました。

- 平成12年 4月：介護保険制度が施行され、託老所あんきでは、通所介護定員10名、訪問介護、居宅介護支援の3つの事業所を立ち上げる
- 平成12年 9月：自主事業で託老所（泊まる 住む）場所、託老所あんき式号館を設立
- 平成12年10月：地域通貨モデル事業 ボランティアグループあんきを立ち上げる
- 平成15年 4月：グループホーム こんまい「あんき」1ユニット（住宅改修型）を設立
- 平成16年 4月：グループホーム こんまい「あんき」の倉庫の一角にボランティアグループあんきと地域住民による『いまづの縁側』プロジェクトを立ち上げる

地域でのコミュニティ形成の重要性が認識される中で、相互扶助を中心としたコミュニティ形成に向けたさまざまな活動が展開されるようになってきています。そこに求められるのは、地域住民が自らが参加し、共に考え、共に解決する取り組みが重要になってくると思うのです。豊かな生活環境を作り出すには、地域住民が、主体的に自分の住む地域のコミュニティを再構築していくことが大切になってくると思うのです。

(「いまづの縁側」の活動から得た気づき)

1. 新しい力の発掘：手の足りないところ、今の自分たちではどうしようもない問題、そんな弱点があってこそ新しい力が生まれる
2. 子供たちの力：子供たちにも役割（分担）が必要
3. じわっと広がる：動員を掛けられても仕方なく集まるのではなく、気になって寄ってきてもらえるよう、お客さんではない仲間作り
4. 安心して暮らせる街へ：街全体が高齢者や子供たちの安心した生活の場でなければならない

(今後の課題)

グループホームこんまい「あんき」(いまづの縁側)が、地域福祉の拠点としての役割を担えるようにしていきたい。平成20年11月より託老所あんき移転に伴い、移転場所に新しくコミュニティスペースの設置。
障害や認知症があっても、いち住民として地域の中で暮らし続けられるよう地域福祉の充実を図る。
見えないもの(心)を見ていく力を養っていきたい。
形のないものを形にしていく。(地域のネットワーク)
一つひとつ小さくとも少しずつ、根強いものにしていきたいと思い、今後も活動をしていきたいと思いをします。

活動名称	地域へのかかわり方を見直そう!!職員・入居者としてではなく“地域住民”として
活動要旨	「地域住民としての役割を果たすこと」が認知症の理解や支援を得る第一歩と考え、自治会に入会し、バーベキュー大会などで交流を深めている。地域包括支援センターとともに啓発活動を展開している。
応募者	(有)プランニングフォー 認知症高齢者グループホーム「古都の家 学園前」 統括部長 杉山 淳彦
連絡先	〒631-0073 奈良県奈良市二名東町 3750-2

(概要)

平成16年9月、認知症高齢者グループホーム「古都の家 学園前」は開設されました。当ホームは奈良市にあります。最寄り駅の近鉄学園前駅から徒歩で10分、さらにバス停から徒歩で10分歩くと、緑が多く閑静な住宅街で目の前には小学校・中学校、そのすぐ隣にも幼稚園・保育園があります。周りには公園や神社があり、子供たちや親子連れの憩いのスポットとなっています。

「地域に根差したグループホーム」になるにはどうすればよいのか日々頭を悩ませる中、職員間で様々な話し合いを行った結果、「まず地域住民としての役割を果たすこと」が認知症の理解や支援を得る第一歩になるのではないかという考えに至りました。

自治会としての活動に参加する

地域交流を進めるにあたり、「地域の方々とコミュニケーションを重視しよう!!」を目標に掲げました。地域の方々に「おはようございます」「こんにちは」とこちらから挨拶をし、自治会へも入会し、毎月1回(20:00~21:00)に実施される会合にも参加しています。(注意としては、夜間での会議なので、職員の負担をどう軽減するかを考えないと、うまくいかないと思います。)

自治会の主な活動内容は、草むしりや盆踊り大会、福祉大会、子供会、年に1~2回ある親睦を目的とした新年会などです。その中でも代表的なイベントが子供会の「バーベキュー大会」です。バーベキュー大会では、自治会会員の方々や入居者家族の方々、支援センター職員など総勢約60名参加され、盛大に行なわれました。バーベキュー大会は、当ホームが開設して約2年経ったころの出来事です。

これらの活動に参加することで、地域の方々とコミュニケーションを多く持つことができました。関係を築く上で最も重要視したのが、会議や会議後、そして催し物の準備や、後片付けの際にする立ち話です。話をしていく中で、自然と認知症やホームの話題がでるようになり、今思えば、「もう、あんたら忙しいやろうから帰ってくれていいで」と言われても、決して言葉に甘えず辛抱強く手伝ったことが、今の関係の礎になったと感じています。

グループホームの地域開放と周辺地域資源の理解と協力

当ホームでは、自治会を通して、認知症の理解や関わりを地域に啓発・啓蒙しています。それ以外にも、認知症キャラバンに参加し、地域包括支援センター職員と協力し合って、活動をしています。内容は、マンションや学校等の社会資源に対して、認知症の理解を促すための教室を開いたり、県のボランティア事業に参加し、地域の方々や学生の受け入れをしています。

また、地域包括支援センター主体の勉強会を開き、横のつながりや県のグループホーム協会とのつながりをもっています。職員の質の向上や情報交換等を行ったりして、相互の関係性を高め、よりよい協力体制ができるように心がけています。そして消防署・警察署・図書館・奈良公園・美術館等の公共機関や美容院・散髪屋・クリーニング屋さん等に認知症の理解と協力をいただき、地域の方と同じように対応してくれています。

活動名称	学幸へ行こう会 幸齢者いきいき体操クラブ ~住み慣れた地域で、我が家で安心して暮らすには~
活動要旨	市から委託を受け、地域支援事業の一環として『幸齢者いきいき体操クラブ』を実施。地域で点の存在で生活していた高齢者や独居の方が、点の存在から線への存在へ、そして線から面の存在へと顔の見える関係作りに変化をしている。
応募者	社会福祉法人 勝曼会 あすみの丘在宅介護支援センター 米川 京子、塚本 恵
連絡先	〒284-0001 千葉県四街道市大日 1623-1

(概要)

あすみの丘在宅介護支援センターは、平成8年に四街道市の委託事業として開設し、母体は特別養護老人ホームです。特別養護老人ホームのベッド数50床、ショートステイ20床、ユニット型ショートステイ20床、デイサービス1日30名、ケアハウス30名という施設に併設しています。

当センターの職員体制は、センター長、専任の相談員1名、兼務1名、居宅介護支援専門員3名、合計6名で支援センター業務及び居宅支援事業業務を行っています。

四街道市は、千葉県の北西部に位置し、人口約8万6千人強、高齢者率20.0%(地域によっては36%以上) 東京まで快速電車で約1時間という所に位置しています。市内には、在宅介護支援センターが3箇所あり、各中学校区を担当しています。

事業内容は『高齢者総合相談窓口業務』『高齢者の生活機能チェック業務』『一部申請代行』『介護予防事業等』となっています。四街道市から委託を受け、地域支援事業の一環として『幸齢者いきいき体操クラブ』を行っています。介護予防事業を中心に地域7箇所で、概ね65歳以上の方(年間通して参加可能、自分で会場に来られる方)を対象に月1回約2時間を目安に体操を実施。

地域との連携として、四街道市シニア連合会での健康教室の年3回開催、日赤奉仕団での認知症予防と転倒予防教室の実施、年2回貯筋通信の発行、あすみの丘在宅介護支援センターのアンケート調査と四街道市のアンケート調査を行っています。

(活動の成果と今後の展望)

成果: 地域で点の存在で生活していた高齢者や独居の方が、月1回の「学幸へ行こう会」を通して点から線へ、線から面の存在へと顔の見える関係作りに変化をしてきました。地域の高齢者の生の声を聴く事が地域づくりの第一歩だと感じています。参加者と本音で言いあえる関係作りは、そう簡単に作れるものではありません。笑いがあり、次の月も行きたいと思えるプログラム作り、参加者をあきさせない話術、無茶をさせないが少しの無理をして頂く声かけが大切です。5年間の地域作りの取り組みは、白澤政和先生(大阪市立大学教授)が研修等で講演される支援センターの役割であるプラットホーム作りになっていると考えています。地域の懇談会等にも自然と声がかかるようになり、小さな地域ごとに福祉について住民を交えた話し合いがスタートしようとしています。

課題: 在宅介護支援センターの現状は非常に厳しいです。市区町村によっても違いはありますが、いかにモチベーションを持って仕事に取り組むか、自分との戦いの時もあります。行政と施設との狭間で悩むこともありますが、高齢者の方が笑顔で楽しむ時間を共有できること、地域で待っていてくれる人が沢山いることに喜びを感じながら、地道に活動を続けていきたいと思えます。

展望: 高齢者といっても、70代前半の男性の方も参加しています。参加者の目標設定やそれに対する評価をどのように行っていくか、PDCAが今後の課題です。そして意識を持ってセルフケアに取り組んでいる方々を市がどのように評価していくのか、住民の代弁者として声をあげていきたいと思えます。また地域で認知症高齢者の現状を把握し、認知症サポーターの役割として、「認知症は他人事ではなく、誰にでも起こりうる病気である」と言う事を多くの方に理解して頂き、どのような状態になっても安心できる地域作りを行政、地域包括支援センター、そして地域住民と連携をとって作っていききたいと考えています。

活動名称	外国籍の子と認知高齢者とのアートコミュニケーションの取り組み
活動要旨	外国人が多く暮らす地域の特性を生かした、外国籍の幼児と日本人の認知症高齢者を対象とする民間の宅幼老所。「アートコミュニケーション」の活動などを通じ、認知症高齢者と外国籍の子どもが互いに見守るという相乗効果が生まれている。
応募者	多文化共生施設 DOREMI みらい 代表 相馬 清美
連絡先	〒509-0206 岐阜県可児市土田 5311

(概要)

岐阜県中南部に位置する可児市は、名古屋市および県庁所在地の岐阜から30km圏内にあり、北部はおおむね平坦で、南部は県下最大級の工業団地、住宅団地やゴルフ場が点在する丘陵地となっている。また、市の北端部には日本ラインとして名高い木曾川、中央部には東西に流れる可児川があり、豊かな自然環境に抱かれている。昭和40年代後半から名古屋市のベッドタウンとして人口が急増し、平成17年5月1日には、兼山町と合併し人口も10万人を超え、可茂地域の拠点都市として発展している。

DOREMIみらい 指針

文化と世代の垣根を越えた人々の笑顔のあふれる集い、学びの場
生活空間のなかでゆったり、楽しくそして寄り添って安心の場
地域に根ざした多文化共生づくりの場

(活動の背景と実践)

現在、地域では少子高齢化が進み、中でも認知症の占める割合が上昇し、また外国人の居住が年々増え続けており、ひとつの社会現象としてコミュニティの形成に大きな課題としてあげられると考える。地域住民との交流の必要性が高まるなか、文化の違いによる言葉の壁やハードルが高い生活様式を越えたアートコミュニケーションを通じて活動を取り組む。

外国人住民と日本住民の相互の意識や共生の実態把握をし、認知症の理解や外国人との垣根を取り払うことができないかと考えた。共に生活をするなかで、互いに良い結果を与えようと、心の通うコミュニケーションの方法として音楽療法・園芸福祉・臨床美術の手法を用いて実施した。それらの創造的な活動を行うことで相乗効果が生まれ、高齢者の認知症予防・子どもの感性の育成など新たな活動に挑戦した。

外国人が多く暮らす地域の特性を活かし、認知症高齢者になっても社会問題の解決の役割を担っていくことの必要性を感じる。また、日本文化の生きた大先輩として一つ一つの言葉・行動が外国籍の子どもたちに大きく刺激を与え、思いやりやさしさを知ることができ日本文化の生活ルールの教科書となることを改めて痛感する新たな試みとして事業展開する。

平成20年4月、平屋の民家を購入し、認知症高齢者の日帰りサービス事業をスタートする。そして、外壁に中部学院大学こども学科の学生10名の手により、当施設のシンボルである観覧車などが描かれた。7月より外国籍児童の預かり事業も加わり、託児と宅老を兼ねた形態となる。子どもたちの利用時間は午前7時から午後7時までだが、時折親の残業で8時すぎることもある。

高齢者の利用時間は午前8時から午後5時まで。料金は高齢者・子ども共に週5日で月5万円となっている。

高齢者の一日は、子どもが保育プログラムに取り組む際に、小さな子どもたちの世話をしたり、時には音楽療法・園芸福祉・臨床美術のプログラムと一緒に取り組むこともある。幼児に対しては歌を口ずさみ、眠りにつく子どもの姿をあたかく見守るなど、子どもの存在を感じることで自然とレクリエーションが実施できている状況となる。懐かしくやさしい風景は感動の瞬間であり、職員はカメラやビデオに走り回る。

活動名称	アニマルセラピー活動
活動要旨	和歌山県内を中心に「アニマルセラピー」の講習会・啓発活動・施設慰問を行っている。高齢者が孤立する事なく、普通の生活のまま過ごしていける一助を担いたいと、日々活動を展開している。
応募者	NPOリトルハンド 理事長 田中 康嗣
連絡先	〒648-0011 和歌山県橋本市隅田町真土 187-4-1

(概要)

福祉というと、専門職とか介護を必要とする人とその家族・関係者に限定するイメージを持たれる人がいますが、現代の少子高齢化社会を否応なく現実の世界と受け止めるとき、この問題をもっと身近な問題として捉える必要があるのではないのでしょうか。

人口の五人に一人が65歳以上の高齢者になっている地域は既に多く、むしろ15年先・20年先の四人に一人、三人に一人の高齢者の時代を先取りしている地域すら珍しくない過疎地の現状も憂うべきではないのでしょうか。

昔から長生きはしたいが、年老いて下の世話をかけたり、自分を見失う事をおそれて、ぼっくり寺と言われる有名寺院にお参りする人が絶えないのも、現実の姿ではないのでしょうか。

どこかの寺の掲示板に『10人の子供を育てる親はいても、親を見守り介護する子は一人もいない』という現代社会の核家族社会を戒める言葉が書かれていたのを、ふと思い出します。

有吉佐和子さんが「恍惚の人」で、認知症の問題を提起して久しく、時折「花いちもんめ」等のように映画化されては世間の関心を集めることはあっても、家族にとっては毎日が切実たる問題であるのは論を待たないと思います。

こうした福祉の問題を身近な事として捉え、家族だけでは限界があることを社会全体で考え、助け合いの互助精神を育むことを目指して、【福祉を身近に、心のバリアフリー】をテーマとして、ボランティア組織である『小さな手』を立ち上げたのが、平成14年11月でした。その後、平成16年6月には、NPO法人の認可を取得し、家族の立場での在宅介護を目指して、訪問介護の認可も受けました。

NPO法人では、名称を『リトルハンド(小さな手の意)』とし、ボランティア組織当時から、動物を同行した『アニマル・セラピー活動』を実施してきています。

かつてベトナム戦争で心身共に大きなダメージを受け、心を閉ざした兵士達に大きな効果があったとされる[音楽療法]。日本でも、福祉の専門学校で学ぶことが出来、取り入れる施設も少なくありません。この[音楽療法]と二分する効果があるとされ、欧米では早くから取り入れられているのが、『アニマル・セラピー』と言われます。その名前の通り、動物達と触れ合うことで、癒し(セラピー)を感じて貰うのが目的です。

5年前にこの[アニマル・セラピー]を始めた時には、インターネットでも検索なしであったのが、今では2万件以上にアクセス出来るくらい関心の高い分野になってきています。

実際、多くの施設を慰問して、同行している私達のほうが、動物達の持つ無償の愛・人間への絶対的な信頼というものが、いかに多くの入所者に感動・感激・生きる力を与えているかを目の当たりにし、深い思いと新たな福祉活動の取り組みへの決意を起こさせてくれるのは、紛れもない事実なのです。

ちなみに私達の同行する動物は、犬は大型犬(高等訓練資格取得のラブラドル種)、小型犬(ブーデル4匹)等で、他に手乗りのギン鳩・ジュズカケ鳩・セキセイインコ数羽や、モルモット等がいます。

活動名称	認知症の老人と共に生きる「後世への最大遺物」 幼老共生社会の復権・復活を目指して
活動要旨	回想法の学習会からスタートし、特養の認知症高齢者、地域の親子、施設職員とともに高齢者ボランティアが「手づくりおもちゃ幼老交流教室」を開催。世代間交流を通じ、ふるさと町づくりを目指す。
応募者	世代間交流まちづくり「回想法」・校舎の無い学校 森 依顕
連絡先	〒779-3301 徳島県吉野川市川島町川島 438-1

（概要）

7年前、5人で始めた一期一会の回想法学習会は、紆余曲折を経ながらも、先達の教示に学び、今日では、認知症を生きる老人達を中心に編成した45名の小規模学校・町全体をキャンパスとする「校舎の無い学校」と「附属おもちゃの図書館」を併設し、「手づくりおもちゃ幼老共遊教室」を開いています。

老人達が、思い出語りから紡ぎだした昔の子どもの遊びを教材とした多世代交流複式学級である。平成20年1月にオープン。月例集会として、特養ホームの認知症の老人15名、地域の幼児の親子15名、老人施設職員と私達老人ボランティアを合わせた15名のふるさと教員、計45名で編成。まだ僅か7回の実践であるが、手応え十分。次世代へ循環し、持続可能な活動と確信し、楽しみながら運営しています。参加者は、精一杯遊び、笑い、老人は色を失わず、希望の持てる小さいコミュニティを形成しつつあります。私達老人ボランティアは、密かに、認知症の老人達と、この営みを「後世への最大遺物」として、勇ましく高尚な生涯にして、この世を去りたいと考えています。

手づくりおもちゃ幼老交流教室

私達の生涯学習まちづくり「回想法」の使命は、昔の思い出語りから紡ぎだした生活文化を未来に生かし世代間の交流を通じて、お互いを理解しあい、親睦を図り、ふるさとまちづくりを目指すことにあります。

我が国は高度経済成長を経て社会は大きく変化しました。日常生活の中でも価値観の多様性によって、従来、常識と思っていたことが、そうでなかったりすることも少なくありません。その中でも「世代間の交流」や「こどもの遊び」が希薄化しており、伝統的な生活文化の中でも伝承遊び文化の希薄化が危惧されているところです。

それは時代が変わったからだときらめる人もいますが、私達は、そうではないと思っています。それは、人間の心のあり方や心と心のつながりは、いつの時代でもどこの世界でもその本質は変わらないと思うからです。親子、家族、友人、隣人、社会人等の人間関係の底には、お互いを知り合い、理解し合い、助け合うという人と人のつながりを希求してやまないのが人間の本質だと確信しているからです。又、遊びについても人類の歴史を観るとき、人間のみが、余暇を遊びに使うって進化した存在であることを思えばきっと遊びの復権・復活は蘇生できると信じているところです。

このたび企画した「手づくりおもちゃ幼老交流教室」は、幼老男女が、障害の有無を問わず自主参加して、手を使うことによって脳の活性化を図りおもちゃ遊びに興じ幼老共生の基礎づくりを目指します。

活動名称	居場所づくり 長洲カフェの試み
活動要旨	地域の中にある喫茶店を借りて、コーヒーを飲みながら音楽やおしゃべりを楽しむ「長洲カフェ」を開催。ご近所力を高め、災害時なども助け合いの力が発揮できるよう、施設利用者と住民が日頃からふれあえる場づくりを目指す。
応募者	誰でも安心して暮らせる地域福祉の会 齋藤 達
連絡先	〒260-0854 千葉県千葉市中央区長洲 2-22-5

(概要)

平成20年5月からはじまった「長洲カフェ」の活動は、長洲町内の老人会(福寿会)と町内にある認知症高齢者グループホーム「ニチイのほほえみ本千葉」有料老人ホーム「ニチイのきらめき本千葉」の協働運営である。

地域の中の喫茶店を借りて、月1回住民と認知症のホーム入居者が歌ったり話し合ったりする、ふれ合いの場としての活動を続けている。

費用負担は、千葉市中央社会福祉協議会から毎回1,500円の補助金を受けていて、福寿会会員にはさらに100円の補助金も出しているの、飲み物代1杯300~400円で参加してもらっている。会費はそっくり喫茶店に飲み物代として支払っている。

会は役割分担を決め、会計は福寿会会員、飲み物のオーダー係や運ぶ係はホームスタッフ、人と人をつなぐコーディネーターはホーム管理者やボランティア、地域の人を買って出ている。毎回歌う歌詞の用意や、会の進行役は福寿会会長が行っている。

「貴族館」は昔なつかしい造作の喫茶店で、マンションの1階にあり利用定員は約40名。多少の段差はあるが、車椅子の人でも利用できる店内の広さやトイレがある。平成20年5月に第1回目を開催して、以後毎月1回第4火曜日と開催日を固定して会を重ねている。

目的には、千葉県の提唱する「認知症になっても安心して暮らせる町づくり」があり、民生委員から協力要請された独居高齢者の閉じこもり防止をよびかける意味もある。

また、ホーム側には認知症に対する正しい理解と知識を町の人にも広めたいという意識があって、双方の思いが合致したところでの協働活動となっている。

地域住民の高齢者割合は、世帯数297、高齢化率は30パーセント、老人会加入者は100人である。古くから住む住民と新しいマンション住民が混在しているが、両者の交流は乏しく、一戸建ての住民のほとんどは定年退職者である。商店は少なく活気に乏しい。古くからある総合病院が一つあり、地域の高齢者はたいていそこに通院している。町は起伏がなく平坦な地で、海岸、河川からも遠い。従って住民の自然災害に対する危機感があまりなく、自主防災組織も結成されていない。

町内に平成17年5月、2ユニットの認知症高齢者グループホーム「ニチイのほほえみ本千葉」が、平成18年11月にはその隣に50室の有料老人ホーム「ニチイのきらめき本千葉」が開設された。それぞれのホームは地域密着型として開設以来自治会組織や老人会に加入し、お互いに密接に地域福祉交流をしている。

今後千葉市でも最も高齢化が進むと言われるこの町は、ますます独居高齢者や認知症が増えることが予想され、お互いに困った時は遠くの親戚より近所の力が頼りとなる。そうしたご近所力を高め、災害時などにも助け合えるように、日頃から袖ふれ合って仲良くしましょう、というコンセプトで、福寿会会長や長年福祉活動をしてきた会長の知人、ほほえみ本千葉、きらめき本千葉の管理者が、地域にあるレトロな喫茶店「貴族館」を借りて、歌い合い、助け合える場としての「長洲カフェ」の試みがはじまった。

活動名称	安心を築く力+子どもの感性=将来につながる力
活動要旨	小学校の子ども達と認知症高齢者が交わす挨拶の姿から、周りから支援の形をつくるのではなく、本人から認知症の苦しみを地域に発信し、地域がともに支援の形を築く大切さに気付く。小学校との交流を通じて「ともに支えあう」関係づくりを展開。
応募者	うえすぎ松寿苑デイサービスセンター 田中 良樹
連絡先	〒623-0102 京都府綾部市上杉町花ノ木2-3

(概要)

うえすぎ松寿苑デイサービスセンターは京都府北部の綾部市上杉町(東八田地区)にあり、市内唯一の認知症専門のデイサービスセンターです。平成18年4月24日に開設し、1日の定員が10名の中、できるだけ地域性を活かしながら認知症の方を支援していきたいという思いでサービスを始めました。また、平成19年10月には併設してグループホーム(グループホームうえすぎ)を開設しています。東八田地区は市街地から20分ほど離れた田園風景が広がる静かな田舎町です。買い物に行くにも車がないと不便な場所ですが、海に近いため食事には舞鶴直産の魚介類を使ったり、地元産の農産物や米を使用し、「安全」「安心」な地産地消の精神を大切にしています。

東八田地区の地域性を活かすためには、まず、認知症の方を「地域を迎える力」と「地域へ出て行く力」をポイントにおいての地域資源の探求が必要となりました。

まず、「地域を迎える力」の活動の一つとして「うえすぎ松寿苑フェスティバル」や「ふれあいデー」といった地域に対してイベントを定期的に関き、地域の方に対して認知症の理解や直接的な認知症の方との交流を行いました。

次に「地域へ出て行く力」ですが、活動の一つとして、先に少し述べましたが、食材へのこだわりでした。例えば、野菜類については、東八田地区の農家のサークルが週に3回開く朝市にグループホームのご利用者とともに買い出しに出かけています。豆腐や揚げについては、東八田で製造されている豆腐屋さんから配達をしてもらっています。また、東八田地区の祭りに露店を開いたり、運動会や文化祭などにも積極的に参加したりと、色々な場面で地域の方とご利用者との交流を深めています。

そういったつながりの中で、東八田地区の地域性が見えてきました。一概には言えませんが、良い意味でお人よしの方が多く、一人ひとりから「やさしさ」を感じることができます。一番地域性を表しているのが、東八田地区の子どもたちです。センターから200メートルほど離れた所にある東八田小学校は、センターの前が通学路となっており、登下校の際には本当に元気な声で挨拶してくれます。「帰りました」の声にご利用者は窓を開けて「おかえり」と交わす関係が構築できています。ただ教育が行き届いているのではなく、ごく自然と身につけた感じを受けます。親から子、先輩から後輩への伝承、伝統なのでしょうか。地域性を感じる大きな瞬間です。

今回、子ども達とのつながりは、一人の認知症の方からの一つのきっかけから始まりました。それは、認知症の方を地域で支援していく上で、その方の周りが支援の形を築いていくのではなく、ご本人が「認知症」という病気の苦しみや悲しみを地域に発信し、周りがそれに気づき、ご本人と地域がともに支援の形を築き上げるといったスタンスの大切さに気づいたきっかけとなり、一人の人間として、認知症の方への地域支援の輪を広げるために、何を目指していくべきかを問い直せた大きな成果となりました。つまり、答えは認知症の方自身にあります。

活動名称	認知症を理解してもらい、地域で生き生き生活
活動要旨	地域住民を対象に年に2回小規模多機能型居宅介護職員と認知症の合同勉強会を開催。納涼祭や保育所、中学校との交流など様々な行事を通じ、地域交流を深めている。
応募者	医療法人 千輝会 グループホーム神田イン国分 管理者 鶴岡 紀代子
連絡先	〒582-0020 大阪府柏原市片山町 1-24

(概要)

平成16年5月1日「グループホーム神田イン国分」は開設されました。

医療法人である当ホームは、地域医療に力を注いでいる院長が、認知症の家族を抱え一生懸命に介護されているご家族から、介護の大変さや困っている事などの相談を受け何とか力になれないものかとの考えから立ちあげられました。

当グループホームは近鉄大阪線「河内国分駅」から徒歩3分の場所にあり、商店も多く入居者の買い物意欲をそそります。駅に近いので電車を乗り継いで入院されている奥様を見舞いに行かれる方や、遠方の親族やお友達もよく訪ねてきていただけます。

ホームの玄関は自由に入出入りできますので、毎日いろいろな方が来られますし、入居者の方も「ちょっと帰ってきます」と玄関から出られます。ご近所の方から「ホームのおばあちゃん1人で出かけておられますけれど」と電話をかけてきてくださる方もいらっしゃいます。勿論少し離れて後ろを職員がついて見守っていますが、ご近所の方にも見守られています。

(活動の内容)

地域に向けて年に2回認知症を理解して頂こうと小規模多機能型居宅介護職員と合同勉強会を開催しています。参加者は地域住民、地域のグループホーム職員、介護支援専門員。市の高齢介護課の方々のご協力も得ています。思わぬ反響として地域のケアマネジャーに大変勉強になったとの言葉を頂きました。

ホームの大きな地域に向けての行事として毎年7月に納涼祭を行っています。老人会の方々のカラオケ、河内音頭。青年団による和太鼓の演奏等大いに盛り上がり近隣の皆さまも多数来てくださいます。納涼祭には同じ地域のグループホームの入居者の方も来られたり、こちらから他のグループホームの夏祭りに参加したりと交流を持っています。納涼祭の前より千羽鶴を入居者の方々が折り、納涼祭には参加して下さった方々にも折っていただき柏原市の平和展に千羽鶴を届けに行きます。戦争、平和について市の職員より話を聞き涙を流されホームに帰ってこられます。

毎年9月の敬老会には、地域の保育所から招待され園児に肩たたきや手作りプレゼントを頂き1日楽しく過ごします。今年は園児の訪問を受け、皆さま大喜びされました。秋には、秋祭りが地域で盛大に行われます。青年団のだんじりがホーム前まで繰り出してきてくださいます。入居者の皆さまもかつては自分たちも参加していただんじりに感無量の涙を流されます。

地元中学校の職業体験でホームに生徒たちが11月に来ます。認知症の方々と根気よく話をしたり散歩や買い物に行くなど、最初は緊張していた生徒たちも、2日目、3日目になると自分のおじいちゃんおばあちゃんのように接している姿が見られます。これはメールやパソコンなど人間同士のコミュニケーションの機会が減少している中で今後のいい体験になってくれることと思います。

12月のクリスマスには、地域の子供たちがダンスを踊りに来てくださいます。入居者の皆さまはかわいい子供たちの踊りを目をきらきらと輝かせていつまでも余韻にひたっておられます。

春にはホームの前が桜並木となり、近隣の方々の往来が激しくなり普段は静かなホーム前もにぎやかになります。

運営推進会議をほぼ2カ月に1度開催しています。会議には入居者の家族、市の職員、地域包括センター、民生委員、地元消防署、警察署の方々に参加していただき、貴重なご意見やご指示をいただいています。

活動名称	顔の見える関係づくり・歩いていけるところに茶話会を
活動要旨	認知症の方や介護者がともに集う月1回の茶話会を通して、認知症の方が自分らしさを発揮できるようにすることや介護者の負担軽減を図る。高齢者が歩いていける場所に同様の会ができることを目指し行政とも連携。
応募者	澗の会 中島 加代子
連絡先	〒179-0085 東京都練馬区早宮 3-36-10-104

(概要)

おしゃべりを通して孤立しがちな方の社会参加の機会を増やし認知症を発症した方の見守り機能、介護者の精神的負担の軽減、認知症を発症した人でなく さんとして参加し会話を楽しむ。社会参加の機会、楽しい出会いの場づくり。茶話会に参加することで、支え、支え合う。参加者全員が主役なのが澗の会の活動です。

- 茶話会を通し見守り機能と高齢者の生活の不安や孤独、心の安定、相談機能を果たしています。何気ない会話の中にニーズが出てきます。解決できることは関係機関に繋げています。電話一本、何日も誰とも口を利いたことがない方が多い。昨今いつもの顔ぶれに会える安心と心地よさを味わっています。
おしゃべりはストレスの発散効果があり、精神的安定効果をもたらします。
脳梗塞の後遺症でスムーズに言葉が出てこなくなった方と認知症を発症されて言語能力の低下や記憶力が低下された方がお互いの障害の辛さを分かち合っています。お元気な方も参加しております。
集うことで支え合うことが実感できています。
- その人らしさの発揮できる場になっています。
おしゃべりは特別な技能はいりません。認知症を発症された方はその場での会話を楽しめます。主役になれる場でもあります。
居心地の良い場は精神的安定に繋がり周辺症状の軽減になります。
本人宅は最高の馴染みの場になります。
認知症の人でなく さんとして参加しています。
- 介護家族の精神的負担の軽減を図っています。
介護以外のおしゃべりも出来介護者以外の自分になれる時間になります。
一人で介護しているより他の方がいることで精神的負担の軽減になっています。
- 看取り終えた方も参加されています。
体験者同士共感でき、故人を回想することで看取り終えた方自身の精神的安定に繋がっています。
自分の家族以外の方に寄り添うことで(介護者を交代する)新たな気持ちになれます。
短時間の外出も可能になります。
参加者にとって家庭の雰囲気はすぐに馴染の関係になれます。
- 認知症を発症した方とその家族が病気を隠さないことが地域で支えられる第一歩であることも同時に発信しています。
- 地域で開催することは遠くに行けない高齢者や短時間の外出しかできない介護者にとって交流の場として最適であることの実証をしています。
- 地域で開催する為には数の確保が必要です。澗の会をモデルとし広報しながら地域に同様の会が高齢者が歩いていける所に沢山できることを願って活動していきます。同時に他の施設(デイの空き時間の利用、地域集会場での開催も視野にいれ活動してまいります。その準備としてミニコンサートを実施しました。平成20年度福祉のまちづくり(練馬区福祉部地域福祉課)パートナーシップ区民活動支援事業・助成事業になりました。

活動名称	認知症教育を通じた人づくり・町づくり
活動要旨	講義と実習を経た学生が小・中・高校生を対象とした出前講義を行い、地域のNPO団体と連携してボランティア活動を実施。このプログラムを通して一人ひとりのやさしさの網の目を広げ、認知症の高齢者が安心して暮らせる共生の町づくりへ貢献。
応募者	鹿児島純心女子大学 やさしさの網の目推進委員会 木村 孝子
連絡先	〒895-0011 鹿児島県薩摩川内市天辰町 2365

(概要)

(1) このプログラムは、建学の精神に基づく純心教育の学びを具現化する三段階の構成である。第一段階は認知症援助論の開講で、本学の全学部の学生と市民が対象である。これは講義と実習で成り立っている。

本学が所在する薩摩川内市は、高齢者世帯と独居老人が年々増加し、認知症高齢者も増えている。認知症の高齢者に尊厳をもって関わることのできる認知症サポーターの育成は急務である。第二段階では、認知症援助論を受講した学生が小、中、高校生を対象とした認知症教育の出前講義を教員と共に行う。こどもを通して市民の認知症への理解を広げることを目指す。第三段階では、地域のNPO団体等と連携協力し、ボランティア活動を行う。ボランティアを育成し、その中からリーダーを養成していく。これらを草の根的に行うことで一人ひとりのやさしさの網の目が広がり、認知症の高齢者が安心して暮らせる共生の町づくりへ貢献する。

(2) 本取組終了後における、取組の実施を踏まえた展望について

本科目を受講し、「認知症サポーター」として認められた学生は、卒業後も地域の中でキャリアとして教員・栄養士・看護師としての活動が可能となる。

このような学生を草の根的に増やしていくことで、認知症の高齢者が安心して暮らせる町づくりが実現できる。また、在学中に認知症の高齢者とのかかわりを体験することで、学生は社会の現状やその問題に関心をもち、自らの立場でその問題にどのようにかかわっていけばよいのかを具体的に考え、行動することのできる社会人へと育ていく。またウェブサイトを立ち上げ、「やさしさの網の目づくり」を情報発信の面からも支援していく。

本取組みは平成19年度の文部科学省の現代的教育ニーズの支援プログラムに採択されたものである。平成20年度は2年目である。

活動名称	創作劇「地域で支えよう！本当に知っていますか、認知症のこと」とシンポジウム
活動要旨	社会福祉協議会と共催にて、学生と教職員による創作劇の上演やシンポジウムを開催。準備から関わることで認知症の理解を深める。
応募者	神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科 教授 菊池 信子、准教授 高橋 昌子、講師 重野 妙実
連絡先	〒651-1111 兵庫県神戸市北区鈴蘭台北町 7-13-1

(概要)

神戸親和女子大学(以下、本学)は、神戸市北区での福祉系大学を有する唯一の大学である。地域貢献の期待も大きく、それを自覚し、行動する使命を担うため、発達教育学部、福祉臨床学科では、2006年より高齢者福祉に関するシンポジウムを開催している。2006年は「地域で支える高齢者」を、2007年には「高齢者になっても住み続けられるまち」をテーマに活動してきた。

2008年のシンポジウムは、前年度同様、神戸市北区社会福祉協議会との共催で、準備段階から地域との連携を深めながら、準備を進めてきた。メインテーマは「高齢者虐待を防ぐまちづくりをめざして 私たちができること」とし、第一部で「地域で支えよう！本当に知っていますか、認知症のこと」という創作劇を上演した。講演、討論が主であったこれまでのシンポジウムに創作劇という新たな特色を備えた形式は、教員が運営、実施を担ってきた従来のシステムとも異なり、学生と共に活動する新たな展開となった。

神戸市内の地域包括支援センターに勤務する社会福祉士が今回の創作劇の脚本を手がけた。本社会福祉士は認知症ケア専門士、認知症サポーター100万人キャラバンのキャラバン・メイト(先生役)でもあるため、本シンポジウムをサポーター養成の一環としても位置づけることを検討し、当日受講した学生・地域住民は認知症サポーターとしてオレンジリングを受け取った。

創作劇のあらすじは、「大学生の主人公は、最近学校に通うのも憂鬱で、同居の80歳の祖母の物忘れがひどく、家族の雰囲気も悪い。誰にも相談できず、悩む主人公だったが、ある日、母親が祖母の態度に腹を立て、祖母の体を叩いているところを見てしまう。その緊迫した状態にただならぬものを感じ、やっとの思いで友人に相談する。母は、毎日エスカレートしていく姑の認知症に悩みながらも、一生懸命、身の回りの世話を続けていた。しかし、近所に嫁からいじめられていると言いまわる姑の言動に耐えられず、夫に相談するが、年のせいだと親の認知症に理解がない。主人公大学生の相談をきっかけに、事態が少しずつ変わっていく。一人、また一人と認知症に対する理解者が増えていく。」というものである。商店街の人や地域住民が認知症の勉強会に参加する場面では、サポーター講座のビデオも上映され、シンポジウムに参加した一般市民や学生への認知症への理解を深めるものとなった。

4年生のゼミ生8名と教職員7名が出演者、ナレーション、会場運営、舞台道具、照明、音声、アシスタント等全てを担当した。創作劇という手法を用いたことにより、楽しみながら、わかりやすい展開となり、参加者には好評であった。創作劇に続き、認知症についての解説を加え、より啓発に努めることができた。第2部では、弁護士、地域包括支援センターの社会福祉士、劇にも出演した学生がシンポジストとして登壇し、認知症も含め、高齢者虐待を防ぐために、それぞれの立場から何ができるのかを考えた。

その他、高齢者福祉に関心と理解の深い3団体の協力を得て、学外へのアピールも強めることができた。今後は、高齢者、地域住民、学生、教員、それぞれの特徴を活かし、本学が地域に根ざした高齢者福祉の活動拠点となるようなシステム作りに着手したい。また、支援する対象として捉えがちである高齢者を、学生と共に行動を起こす住民として位置づけ、両者が主体となって、地域に還元できる地域社会活動を構築することも課題である。

活動名称	仲間と共に、若年認知症をイキイキと！
活動要旨	若年認知症当事者・家族の思いを共有し、社会参加につながる場を生み出すべくサロン活動、家族懇談、自主製作・販売活動、啓発活動を展開。当事者の「役に立ちたい」の声を生かした活動を若年認知症の地域支援ネットワークへ発展させるべく活動。
応募者	若年認知症グループ どんどん 代表 中川 和子
連絡先	〒215-0018 神奈川県川崎市麻生区王禅寺東 2-38-8

(概要)

「若年認知症グループ どんどん」は、若年認知症当事者・家族の思いを共有し、ホッとできて社会参加にもつながる場を生み出すべく、2006年7月に川崎市認知症ネットワークを母体として発足しました。きっかけは2004年の国際アルツハイマー病協会京都国際会議でした。若く元気なのに役割を失い、働きたいのに働けない、子どもの学資や住宅ローンを抱えて経済的にも厳しい、介護保険制度では「認知症なのだから」と高齢者と同じに扱われ、障害者支援制度からは「進行性の病気だから」と別扱いされ、居場所も適切な支援もほとんどない状況にある当事者・家族を、少しでも支える活動が必要だと考えたからです。現在川崎全域を対象に以下のような活動をしています。

サロン活動

毎月1回定例で集まり、川崎市内のさまざまな施設を利用して、ボーリング・卓球などのスポーツやカラオケ・ビデオ鑑賞などのレクリエーション、絵手紙などの創作活動を行っている。また年に数回、特別プログラムとして、バスハイク、野外料理なども実施している。活動終了後はファミレスなどで二次会を開催。おしゃべりの花を咲かせている。

家族懇談

サロン活動と並行して開催し、日ごろの悩みなどを話し合うと共に、介護保険や障害者保健福祉制度についての情報交換を行っている。必要があるときは医療・保健福祉分野の専門職によるアドバイスを受けている。

自主製作・販売活動

当事者たちの「役に立ちたい、働きたい」という意欲にいささかでも応えるべく、昨年より、当事者がデザインしたオリジナルTシャツや絵はがき・一筆箋などを製作。各地の福祉イベントなどを通じて販売している。

啓発活動

家族もサポーターも、講演・講師の依頼には積極的に対応し、地域の福祉専門職等の見学・研修も受け入れている。

今年度は「若年認知症と向き合うための冊子」づくりをすすめている。「家族の体験」や「当事者の声」の聞き取りを行い、専門職によるアドバイスもまじえて、2009年3月に発行予定です。

自主製作・販売活動は、地域啓発活動としての意味も担っており、他の地域の家族会、福祉専門職、その他多くの人たちの賛同と協力を、若年認知症支援の地域ネットワークへと発展させることが今後の目標です。

「どんどん」のこうした活動への参加は3者共通の楽しみとなっています。特に自主製作・販売活動は、当事者の励みとなり、そのことがまた、家族・サポーターの励みとなっています。またこの活動は活動資金を生み出し、温泉1泊旅行などの夢の実現につながっています。「今度は何をやる？」を考え、話し合うのも楽しいことです。

「若年認知症グループ どんどん」は、サポーター・当事者・家族が共に支え合う共同体のようなものです。今後も「同じ世代の課題」として若年認知症と向き合い、困難を乗り越える知恵を出し合いながら、絆を深めていきたいと考えています。

活動名称	東五のひろば
活動要旨	自治会が掲げる「お年寄りと子どもに優しい町」を目指し、自治会と民生児童委員の協力の下、真夏・真冬を除き月1回「グランドゴルフとお茶飲み会」を開催。お茶会を中心とする「東五のひろば」も開き、高齢者の居場所づくりをすすめている。
応募者	青梅市東青梅五丁目 民生児童委員 篠原 澄子
連絡先	〒198-0042 東京都青梅市東青梅 5-22-30

(概要)

東京の西の外れに位置する青梅市は御岳山や多摩川が近くにあり、豊かな自然に囲まれています。その自然を求めてでしょうか、老人ホームがとて多いのが特徴でもあります。青梅市の中心部にある東青梅五丁目は、昔から住んでいる地元の高齢者と都心や他県から越してきた高齢者とが仲良く暮らしています。

東青梅五丁目自治会が掲げている「お年寄りと子どもに優しい町」を目指して自治会と民生児童委員との協力の下、2004年11月から「グランドゴルフとお茶飲み会」を始めました。冬の1月2月と夏の7月8月はお休みをして、その他は毎月1回近くの公園でグランドゴルフをしています。ゴルフが終わってから公園の敷地内にある自治会館で楽しくお茶飲み会をしています。毎回25名くらい集まりゴルフとお茶飲みを楽しんでいます。ゴルフは自治会役員が音頭を取り、お茶飲み会は民生児童委員の私が音頭を取っています。

半年ほど続いた頃、<ゴルフをするほど力は無いけれど、家に閉じこもっているのは嫌だ>という高齢者もいると思い、2005年11月から「東五のひろば」を始めました。

毎月1回自治会館に集まり、お茶を飲んだりおしゃべりを楽しみます。季節ごとの風物詩を折紙で折ったり、簡単なぬいぐるみやブローチを作ったり、お手玉や百人一首・青梅カルタでも遊びます。続けているうちに、近くの保育園の園児たちも遊びに来るようになりました。又、他の地域からも詩吟を聞かせてくれたり、三味線を持って一緒に歌ったり、色々な人たちとの出会いが増えました。たまには警察や消防署・消費者相談の相談員さん・お医者さんなどから、役立つ話を聞くこともできます。東五のひろばやグランドゴルフに欠かせない、手作りの和菓子を作ってくれる心優しい男性もいます。

家族がいても会話の弾まない人や一人暮らしの人もここでは昔話に花が咲きます。今まで頑張ってきた高齢者の居場所が地域にあるように、高齢者の笑顔が続くよう、これからも自治会と一緒に続けていきたいと思っています。

活動名称	認知症のことを相談できる場所を知ってもらおう！！ <地域交流学習会 在宅介護支援センターと地域住民とのネットワーク作り >
活動要旨	在宅介護支援センターと地域包括支援センターが協働し、より多くの住民に認知症の理解とネットワーク作りに参加してもらえよう、地域交流学習会を展開。
応募者	社会福祉法人 白寿会 玉出地域在宅サービスステーション 種継 敦
連絡先	〒557-0063 大阪府大阪市西成区南津守7-12-32

(概要)

社会福祉法人白寿会は大阪市西成区にあります。西成区は大阪市の南部に位置し、大阪市の中でも高齢化率が高く、単身高齢者の方が多い地域です。その西成区の南西に位置する玉出地区で在宅介護支援センターの活動を行っています。今回の取り組みは、西成区内の在宅介護支援センター、地域包括支援センターが協働して行った取り組みです。

1. 活動の経過

2006年に高齢者虐待防止法の施行や、虐待の報道などで地域住民の方にも認知症や虐待、介護の事についての関心が高まってきました。そこで、私達の西成区では在宅介護支援センター7ヶ所、地域包括支援センター1ヶ所(2008年度は在宅介護支援センター9ヶ所)が連携を図り地域の住民に対して、認知症を知っていただく機会を作り、地域で高齢者の方が安心して暮らしていく為に活動できることを、住民の方と共に考える事ができました。また、その場が情報発信源となるような取り組みも目指しました。そして、2年間の取り組みが地域の方にも受け入れられ、現在もこの取り組みは継続して、開催場所や回数も増えています。さらに、区域で活動している認知症サポーター養成講座とも連携を図ってより多くの方が認知症の理解とネットワーク作りに参加していただけるように活動を行っています。

2. 活動方法(住民の方と共に)

具体的な手順として、各開催地域の見守り活動をされている方を中心にインタビューを行い、認知症や虐待に対するイメージの聞き取り、認知症理解のために必要な情報や、知りたい情報、開催方法や周知の方法を確認 インタビューをもとに地域住民の方と協働で学習会を開催 学習会で理解を深めていただいた後に、グループワークを行い、地域の現状や地域住民の方が感じること、早期発見、気軽に相談できる窓口を作るにはどうすればよいかなど多くの意見ができました。インタビュー、学習会のアンケート、グループワークで得た情報をまとめ次年度の取り組みへつなげる、この学習会で得た情報をヒントに新たな取り組みを住民の方と考えるなど効果は広がりを見せています。

3. 取り組みの効果(『新たな繋がり』『新たな取り組み』へ)

話し合った内容が次年度の活動に繋がった

- ・ グループワークなどの情報から得た地域住民の意見をまとめた資料が出来上がりました。(地域のニーズを知る)
- ・ 各在宅介護支援センターの取り組みが増える(ふれあい喫茶、地域の食事会への参加)
- ・ 在宅家族会の充実
- ・ 認知症、在宅介護支援センターパンフレットの作成 など

在宅介護支援センターが身近な存在になった

総合相談として相談件数が増え、地域に対して浸透しつつある

地域交流学習会が地域の事業の一つに定着した

今年も引き続き交流会を開催し、地域住民のニーズを考える場に成長。

今後も地域の状況に合った交流を続けて地域のネットワーク作りを考えていきたいと思ひます。

活動名称	シルバー110番 地域認知症無料相談所
活動要旨	認知症を抱えるご家族とご本人を対象に「双方が、認知症による犠牲者なのである」という考えのもと、認知症の心配事相談を無料で行っている。ニーズにあわせて勉強会も実施。
応募者	社会福祉法人 未生会 グループホームちくりんえん 園長 片山 直紀
連絡先	〒 629-0103 京都府南丹市八木町諸畑後町 14

(概要)

新しい認知症ケア ~主導権は施設でなく「あなた」です。~

近年、認知症の方やその家族に対する介護内容や支援方法が、目覚ましく変化してきました。そして、地域で認知症高齢者を専門とする、小規模で、より家庭的な雰囲気、その人らしさ(本人)に中心とした新しい認知症ケアが、今、全国的に広がっています。

南丹地域においても、認知症の方は増加し続けており、行政やケアサービス事業所はもとより、地域の住民の皆さんと共に直視し、どう対応していくのか、南丹地区ぐるみでの取り組みを、実行していかなければならない時代になりました。

私たちもまた、南丹地域で市と密着した、地域の皆様のための事業所『ちくりんえん』・『くま五郎の家』でありたいと願い、利用者や家族様それに関係者や職員と共に喜びや悲しみを分かち合いながら、認知症技術を地域に還元する様々な活動を行っています。

そこには、ケアを行う役割や立場の者(施設職員)と、介護を受ける立場の者(利用者)というような関係ではなく、人対人としての関係でなければなりません。

「患者」・「入所者、利用者」ではなく、その対象者である「ご本人」つまり『わたし』として捉えた、私が、より良く安全に暮らすために支援してほしいという解釈です。

シルバー110番 ~認知症の心配事無料相談~

私たちの事業所にも、認知症高齢者を専門とするプロの技術者たちがいます。

職員は、「施設」という概念を捨てて現場を地域に移し、地域内で認知症を抱えるご家族とその人を対象者に、認知症高齢者心配事相談の受付(無料)を行う独自の支援活動(シルバー110番)が活動しております。

毎月、1件以上のご相談があり、「孫が泥棒にされている」・「嫁がノイローゼになった」などといった家族の苦悩内容が大半を占め、家族崩壊の危険性が高い極めて重大な相談内容もあります。

私たちシルバー110番スタッフは、問題を解決する力はありませんが、家族の気持ちが理解できるだけでなく、本人の気持ちも理解できる力があります。

在宅レスキュー ~在宅での認知症介護を支援します。~

認知症の本人が、理に合わない行動を起こすことを「問題行動」と呼んで対応していました。

私たちは、これを認知症のために引き起こされた「生活障害である」という考えを持って対応しています。

あまりにも苛酷な介護であるため、家族は時として、諦めたり、拒否をしたり、つい手が出てしまう場合もあり得るでしょう。それらの行為を世間では、軽々しく「虐待」と呼んでいます。私たちは、「双方が、認知症による犠牲者なのである」という考えを持っています。「愚痴の一つも言いたい。こんなことを人には言えない。」そんな思いでお暮らしのご本人様。

そんな思いで認知症介護をなされているご家族様。2015年には250万組のご家族が存在すると予想されています。

認知症の勉強会(愚痴を聞こう会)では、言葉の掛け方や対応方法等スライドを通し映像として見ながら、個々の家族とこれからの在宅介護を一緒になって考えていきます。具体的には、

- (1) お電話で対応させていただく方法
- (2) ご本人またはご家族がお来しになり、勉強相談会を即席で行う。
- (3) 職員が直接訪問し、勉強相談会を出前で行う。

などの支援方法をご用意しております。

活動名称	先生の異業種体験から生徒の職場体験と共に育つ地域福祉活動
活動要旨	先生の異業種体験受け入れをきっかけに、小学校との交流が始まる。生徒の職場体験も受け入れ、入居者、生徒、家族、地域住民の中でやさしさ、おもいやりが循環している。
応募者	グループホームはるすのお家・阪南
連絡先	〒599-0204 大阪府阪南市鳥取 105-1

(概要)

「グループホームはるすのお家・阪南」は、平成15年10月に阪南市鳥取に開設されました。平成14年当時、阪南市にグループホームが無いとの状況から、隣県でグループホームを平成13年から運営し、近くの市で訪問入浴サービスを運営している株式会社はるすが開設しました。

開設場所は、閑静な住宅地の中で、向いには小学校があり、又徒歩5分ほどで海岸・漁港がある潮風の心地よい立地です。

開設にあたっては、当時認知症に対する認識は、現在ほど一般的ではなく、地元の理解をなかなか得られにくい状況でした。行政関係、福祉関係者との協力を得ながら、自治会、小学校、保育園、幼稚園関係者と何度となく説明会及び協議会を開催し、認知症に対する認識、理解を深めていただきました。開設前月の内覧会には地元の方々にも多くおいでいただき、10月の開設を迎えることができました。

翌年の秋には、地元の秋祭りの「やぐら」の山車が施設内の広場にまで入っていただく様な、交流も始まりました。地元自治会、小学校、保育園、幼稚園との交流を深めていく中で、小学校の先生の異業種体験から児童への「認知症」に対する授業、ホームへの児童のレクリエーション、児童の職場体験へと繋がり、現在も継続しています。

<小学校の先生の異業種体験から生徒の訪問、職場体験へ>

平成18年に当ホームのななめ向かいにある「西鳥取小学校」の先生の異業種体験を受け入れました。職場体験終了後、4年生の福祉現場への地域参加として、ホームにてレクリエーション活動を行いたいとの依頼がありました。事前に認知症の説明を授業として行い、レクリエーション活動に参加してもらいました。そして、平成19年も同様な活動が行われました。

平成20年になり、2年前の4年生も6年生となりました。ここで、又新たな提案として、6年生の「職場体験」の場として、ホームを利用できないか、との依頼を受けました。「職場体験」とは、提供される職場から生徒自らが選択して体験するという内容でした。ホームとしては、生活の場という観点から、入居者や職員とともに日常生活を体験してもらおうとの事で、受け入れをすすめ、15名の参加者を受け入れました。内容としては、普段と同じ生活、調理、掃除、散歩、10時の「おやつ」をいっしょに体験してもらおう事としました。

窓を拭くという作業を行った男性の入居者と生徒では、同じ窓面でも生徒の手が届かない部分は利用者が、届く部分は生徒がと、お互いに相手を思いやる配慮が自然とみられました。

調理では生徒がまず味付けしてから、利用者と一緒に味見をし、これをもう少しとかこれを入れたらいい等の会話がはずみ、普段以上の味付けになったようです。

散歩では、入居者の車いすを押しながら海岸まで向いました。初めて車いすを押す体験した生徒もあり、最初は不安げだったが帰りは自信を持って押せたとの会話もありました。

今後もこの活動を継続し、小学校から中学校へも交流を深め、社会人になっても「職場体験の経験」が活かした「やさしい・思いやりの人」になれるような地域への福祉活動の一部を担えればと思います。そのためにも、「まずは、ホームを見ていただく。」「これからの地域福祉を担う子供たちを大切にする。」という事をホームとして進めていきたいと思っています。

活動名称	社会福祉法人がすすめるまちづくり～認知症の理解者を増やそう～
活動要旨	中学生の職場体験学習をきっかけに中学生、町内会、市役所職員など、様々な団体を対象に認知症サポーター養成講座を実施。法人内の地域包括支援センターもサポーター養成の啓発に尽力。
応募者	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島
連絡先	〒 960-1241 福島県福島市松川町字産子内 1-1

(概要)

私どもは地元の社会福祉法人として「認知症の人やその家族に対して何かできることはないか」と考え始めました。なぜなら、認知症の人の介護をしている家族からの相談や認知症にならないように外出の機会をつくりたい、デイサービスを利用したい、といったような認知症に関する相談が増えてきたためです。認知症介護をしている家族からは「どう関わったらよいのかわからない」や「負担が大きくてストレスがたまる」といった悲痛な叫びを耳にするとときも少なくありません。また、相談者は家族のみならず民生委員や近所の人などもおり、認知症の人がいかに日常生活を送るうえで支障を来しているか、その介護者である家族がどれほど困ったり悩んだりしていたかを窺い知ることができました。

そのような状況を少しでも改善するために私どもは平成19年6月から認知症サポーター養成講座を開始しました。ちょうど7月に中学生の職場体験学習の予定があり、「老人ホームの職場体験をするには事前に認知症の勉強が必要だろう」と思い、6月に学校教諭と日程調整を図り、特別授業という形式で認知症サポーター養成講座を開催しました。

これを皮切りにこれまで21回の講座と延べ760名のサポーターを養成してきました。これまで中学校、女性スクール、民生委員、町内会、市役所職員、連合婦人会、市議会有志、福島21ロータリークラブ、ふくしま市民後見人の会などさまざまな団体を対象に講座を開催してきました。

また、私どもの法人には地域包括支援センターがあり、年度始めの老人クラブ総会や民生委員会議に出席させていただき、認知症サポーター養成講座のチラシを配布しています。その甲斐があり各団体からもお声かけいただいております。

認知症がいかに私たちにとって身近な病気であるかお伝えするために様々な試行錯誤を繰り返してきました。標準教材をもとにパワーポイントで資料を作成してスクリーンに映したり、認知症の人と家族の会のHPにある資料を参考にしたりなど認知症について正しく理解していただけるように工夫してきました。

認知症の理解者を広めるために地域における社会福祉法人の独自性とこれまでの活動の学びを活かして取り組みました内容についてご紹介させていただきます。

活動名称	「地域と認知症の人」から「地域の中の認知症の人」へ向けて
活動要旨	小規模多機能型居宅介護事業所にてサロンや交流室を無料開放。「受け身ではできない！」を合言葉に認知症への啓発活動にも取り組んでいる。
応募者	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島 ライフ吉井田小規模多機能型居宅介護事業所
連絡先	〒 960-8165 福島県福島市吉倉字谷地 36-1

(概要)

「認知症になっても、自分の住み慣れた自宅で、自宅のある地域で住み続ける、今までの生活を当たり前のように続けていくことができる」そんな認知症の方々の思いが実現できるように、支援していきたい。それが、私達の願いでした。そしてその願いの実現へ向けた取り組みのきっかけとなったのが、平成19年8月地域密着型サービスのひとつ、小規模多機能型居宅介護事業所の開設でした。

ライフ吉井田小規模多機能型居宅介護事業所は、地域交流スペースの「サロンおらげ」と「地域交流室兼研修室」を設け、地域への呼びかけから始まったものの・・・はじめは戸惑うことも多く悩む日々もつづきました。しかし、「受身になってはできない！」を合言葉に様々な方面からの活動を始めました。まだ動き出したばかりですが、子供達など地域の住民との交流を図り、認知症と言う病気の事や高齢者を理解してもらおうという事についての取り組みについて紹介させて頂きたいと思います。ライフ吉井田小規模多機能型居宅介護事業所を拠点とした認知症の人と地域を繋ぐ活動について、以下の3つの項目に分けて報告させて頂きます。

(1) 地域に出向く！

- ・町内会入会 - 地元の吉倉町会への入会。
- ・吉倉夏祭り - 地元の「八幡神社」吉倉夏祭りへの参加。
- ・吉井田地区で開催された文化祭への参加。
- ・地元商店への買い物。
- ・毎月1回、集会所で地元の方々が集う『ふれあい広場』への参加。

(2) 地域を呼び込む！

- ・地元の回覧版に『なじみの品の寄付』についてのチラシを回して頂く。
- ・地域密着型サービス見学会の開催。
- ・毎月、季節感を味わえる行事を開催。
- ・年に1回の消防署を招いての総合防災訓練にて、地域の方々にも参加頂く。

(3) 地域と協同する！

- ・地元の小学生、団塊の世代、グループホームの入居者さんなど様々な方々にご利用頂いている。
- ・地元の方々同士の交流や小規模多機能の利用者様との交流など憩いの場となっている。
- ・こども110番の協力店にもなっている。
- ・地元の吉井田小学校から見学に来て頂く。
- ・会合や勉強会などが行える100名前後までの利用が可能な「地域交流兼研修室」を無料で開放。
- ・ライフ吉井田としては、相互参加型介護講座の開催。

また、今年度の取り組みとして、独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業を受けて、NPO法人福島県シルバーサービス振興会が実施する「コミュニティー再生事業」に全面的に協力し地域の活性化を図っています。介護福祉に関する研修と実践活動 学童への学習や遊びの支援等を行う実践活動 休耕地を活用し、野菜、花卉等を生産する活動 生産物の販売等を行う交流活動の4つの活動を通し、ライフ吉井田は地域交流室やサロン「おらげ」を開放し、に関しては講師として職員の派遣をし、介護実習の受入れを行っています。

活動名称	これからの地域を支える近隣型助けあい活動
活動要旨	子育て、障害者、高齢者、消費者問題など、異なる市民活動をしていたメンバーが集まり、地域の福祉力を高めるべく、「近隣型助け合い活動」に取り組んでいる。
応募者	おとなりさんネットワーク「えん」 代表 田代 久美枝
連絡先	〒802-0833 福岡県北九州市小倉南区上石田 2-21-23

(概要)

おとなりさんネットワーク「えん」は・・・

「年を取って、一人ポッチは辛いね。仲間と一緒に、何か少しでも人の役に立つ人生を送りたいね」というメンバーの声で「えん」を作って8年になります。ご近所さんのメンバーが集まって「安心・安全な街づくり・ずっとここで暮らし続けられる地域づくりを自分達がやる。地域の福祉力に自分達がなろう」を目標に活動する「近隣型助け合い活動」のグループです。

2001年に12名の理事ではじめ、現在40名ほどのメンバーで、次のような活動をしています。

ボランティア活動 - 特養「春吉園」の洗濯ボランティア(毎週2回)障害者の生活自立支援のためのフリーマーケット「おとなりさんショップ」開催。

地域コーディネート活動 - 地域の世話焼きさんの後押し。

他団体との交流・参加 - 北九州NPO研究交流会、認知症・草の根ネットワーク、ボランティア連絡協議会等に参加したり事務局を担当している。

居場所づくり「火曜日の会」の開催 - 毎週火曜日に個人宅を開放し、居場所づくりの会を開催。毎回15～20人の参加がある。

学習活動「えんの会」開催 - 2ヶ月に1回、いろんな分野のお客様をお呼びして現場発且つ最新の情報をいただいている。目からウロコの経験をする事が多く、参加者に喜ばれている。

組織運営 - 理事会をおき(現在10名の理事)年間4回ほどの理事会をひらいて、活動方針を決定し、4月に総会を開催。日常的には、火曜日の会の担当、高齢者ボランティア、障害者ボランティアの担当を置き、広報紙「おさそい・れたー」を必要に応じて発行。

「えん」設立のきっかけは・・・

永年つきあってきたメンバーが皆50代に入り、親の介護、子どもの自立、夫のリストラ、自分達の健康に関する不安と生きがいの問題など、個人的ではありながら、社会と密接に絡んだ問題を抱えていました。それを外に出して話し合ったとき、なんだ自分だけではないのか。では皆で勉強しながら、何か行動すれば、解決にむすびつけることができるのではないかと考えたのがきっかけでした。様々な問題を抱えながら、「親の介護はしているけれど、さて自分達の老後は？」自分達の最終章をどのように良いものにしていったらよいのか、そのイメージがつかめないことに一層な不安を抱えていました。

子育て、障害者、高齢者、消費者問題など、メンバーはそれぞれ(課題型の)市民活動をしている人たちでしたが、では地域の状況はどんなものかということをお外つかめていなかったのです。活動を始めるにあたって、出てきたのが、私たちが「知らない」ということでした。

ではまず、あちこち出かけていって、お付き合いをしながら、「知ること」から始めよう。地域の何に安心出来ないのか、良い最終章をむかえるためにはどういう条件整備をしないといけないのか、「現在」をつかんで、「こうありたい未来のイメージ」と「それを実現させる具体的な取り組みは何か」をおきらかにしようと取り組んでいます。毎年の活動方針のなかに学習プログラムを大きく組むのも、少数の人だけが状況をわかるのではなく、メンバー皆が地域や社会などの周辺状況をしらなければ、問題解決に必要な行動がとれないと考えているからです。メンバー一人一人がグループの担い手として活動することで、出会った人から学び、地域で何をしないといけないのかという課題が次第に明確になってきました。その一つが「認知症」の取り組みです。

活動名称	公立中学校の空き教室・花壇を住民（認知症者を含む）と中学生が協働作業を通して認知症を全校区民が正しく理解する
活動要旨	中学校に隣接した空き家に小規模多機能型居宅介護事業所を開設し、認知症支援の啓発や、地域の防犯・防災に貢献。学校は勉学だけでなく「人間力を培う場所」でもあり、地域住民にとって「開かれた公的な空間」であるなどの成果が生まれている。
応募者	社会福祉法人 リデルライトホーム 総合施設長 小仲 邦生
連絡先	〒860-0862 熊本県熊本市黒髪 5-23-1

（概要）

平成19年3月、社会福祉法人リデルライトホームは法人本部と同じ生活圏内の熊本市立桜山中学校の隣接地に小規模多機能型居宅介護事業所「コムーネ黒髪」を開設。空き家となって10年以上の建物は、以前熊大生に貸間として使っていたことから洗面・トイレの設置箇所が多く小規模多機能型居宅介護事業にはうってつけの建物でした。近隣住民・自治会関係者は“防犯上”からこの家屋を当法人が借用し、認知症高齢者の施設として活用するという説明に対し両手をあげ賛同していただきました。

このことは以下のようにまとめることができるのではないのでしょうか。

認知症の支援施設の啓発機会になった

地域の防犯・防災という点から社会福祉法人としての貢献ができた

本活動は、「コムーネ黒髪」が位置する黒髪四町内（(2)地域の紹介参照）に絞込み、そこを利用する、認知症の人々と町内住民＝顔見知りの人々が、中学生と協働して、花壇の草を取り、花や野菜を植え・育てそして収穫する、という一連の関わりをもつことにより

認知症を正しく理解する

学校は勉学だけではなく、(地域の人々との関係を通して)人間力を培う場所でもある

学校は、地域住民にとって「開かれた公的空間」である

等々の成果物を得ることを目標に別紙に沿って活動して参りました。今後も校区の住民と一緒にやってこの活動を推し進めていきたいと思えます。

本活動は、平成20年4月から具体化しましたが、約20年前にその源を探ることができます。「地域の力を引き出した保健活動」(平成9年6月、保健婦雑誌 Vol 53 No.6 p454 - 462)の末尾には、「現在、ボランティアを中心に“支え合う地域”をめざし、次世代を含む住民の協力参加に向けて生き生きと活動が展開されています。～中略～この活動は、ボランティアとそのサポートを受ける高齢者の生きがいや病気の予防、ひいては寝たきりや痴呆(現認知症)の予防につながる活動といえます。この活動で健康情報や福祉サービスが住民の身近なものとして活用されるよう働きかけることは大切である。」と記されています。

昭和50年代からの熊本市の保健活動が黒髪校区の住民とともに“種をまき・花を咲かせ”てきたことが今日の黒髪校区の住民風土(支え合いの関係)の基礎になっていると思えます。文教地区といわれる黒髪校区には、幼稚園・小学校・中学校・高校・大学及び附属特別支学校(旧熊本大学附属養護学校)があり、黒髪校区の中心部にある熊本大学(旧制五高)は数多くの著名人を輩出しています。ラフカディオハーン(小泉八雲)・夏目漱石が教鞭をとっていたことはあまりにも有名です。今日、世界各国からの留学生も多く町内で日常的に外国人を目にする地域でもあります。

活動名称	大都市における認知症介護家族の現状と求めているもの
活動要旨	大都市で生きる認知症高齢者と介護家族の思いを聞くアンケート調査を実施。家族セミナーや出張講座の開催を経て家族会を立ち上げ、より具体的に家族を支援している。
応募者	社会福祉法人 浴風会 ケアスクール 服部 安子
連絡先	〒168-0071 東京都杉並区高井戸西 1-12-1

(概要)

東京杉並区にある社会福祉法人浴風会は、80年の伝統と実績を有し、敷地内には1800人の高齢者と780人の職員がおります。今回のプロジェクトは、理念の一つでもある「地域社会の協働と貢献」を推進する為、始めたものです。

認知症の高齢者の数は、現在、約170万人。その半数は自宅で生活し、6割は運動機能的には問題のない「動くことができる認知症高齢者」とであると言います。

介護保険施行後、認知症介護に対して認識が広まったとは言え、地域で支えあう形・認知症の方を取り巻く環境に地域差が出ているようです。

以前、田畑が残る東京の郊外で仕事をしていたときは、「認知症の方かしら？」と徘徊中に、保護することも度々ありました。しかし、山の手の住宅地で仕事をするようになって「認知症の方かしら？」と思える高齢者が歩く姿は、殆どなく、門構えも立派に施錠されておりました。さらに、ご自身のプライドから「認知症を他人に知られたくない」と隠し、通所介護は一般デイに通われるか、通所介護よりむしろ訪問介護の利用率が高い地域です。

大都市における地域社会は、極端な核家族・共働きが進行し、老々介護や日中独居高齢者の問題、介護事業者から断られる認知症高齢者の存在や、在宅における高齢者虐待の問題などと年々深刻な事態は増えるばかりです。まさに大都市に住む介護家族は「群集の中の孤独」を感じております。その要因の一つに近隣と疎遠な生活を営む都市部の特徴があります。

一度、家族が認知症となり、徘徊や昼夜逆転などの周辺症状が進行し、人格変容という予想だにしない事態が生じた場合、「会社人間」であった人も「地域社会人間」として「地域」に突然戻らざるを得なくなり、生活環境は急変します。頼るべき拠り所としての地域社会が機能していない都市生活者は、より困難な介護を強いられることとなります。

今回は、こうした大都市の特性を踏まえて、今後、要介護状態となり、地域での生活を考えるとき、大都市で認知症の高齢者と介護者が生きる際、どんなことに悩み、どんな生活を望み、どんな支援を必要としているのか。また、どのような関係を構築したいと思っているのか、地域住民として何ができるのかを検討して行く必要からアンケート調査を行い、報告書を作成しました。その報告書には、大都市で生きる認知症高齢者とその介護家族の「思い」がつかまっています。それを公の場へと持ち出すことが、認知症で苦しむ人たち、その介護で悩む家族のみならず、医療・福祉に携わる者、そして、これからの大都市で生きる人たちにとって、現状を打ち破るひとつの礎となることを切に願っております。

その後、介護家族の苦悩に応える方法を模索しながら、より具体的に家族を支援できるように、小規模の家族セミナー3回シリーズを2クール実施しました。そこから家族会が立ち上がりました。一般市民へのお出張講座2回、地域の空き店舗を利用して「談話室・よくふう」(相談は勿論ですが、認知症の方、介護家族、地域の方が気軽に集えて談笑できる場)へと事業展開を行っております。そして、何よりも認知症の家族と一緒に外出し、それを当たり前と見守りあう地域社会をつくることを検討中です。

活動名称	認知症について考える会（だいじょうぶネット）
活動要旨	地域で認知症の人や家族を支えるネットワークづくり、家族介護者の駆け込める場づくりを目的に、会を発足。地域や介護者のニーズにあった支援内容を模索。
応募者	東住吉区東田辺地域ネットワーク委員会 松原 宏樹、松下 由佳子
連絡先	〒546-0043 大阪府大阪市東住吉区駒川 4-10-5 東田辺会館

（概要）

平成15年11月、地域発の「認知症について考える会（だいじょうぶネット）」が発足する。地域住民による、地域住民のための認知症啓発・家族介護者支援のための小さな組織が誕生する。月1回、地域の中心部に位置する公立小学校PTA教室を会場に開催している。開催目的は、地域で、認知症の人やその家族を支えるネットワークづくり（人材育成） 家族介護者の駆け込める場づくり である。その後、その目的の達成に向けて1回も休むことなく継続開催をする。徐々にではあるが、地域への浸透を深めていく。

平成17年12月、今までの活動実績が評価され大阪市（東住吉区）が主催する認知症啓発事業の実施地域に選ばれる。そこでは、3回にわたり認知症啓発研修を開催し多くの地域住民が参加するに至る。この頃から、小学校区の範囲で行っていた活動が大阪市東住吉区の社会資源として認知される。毎回、周辺地域からの見学者や参加者も増え始める。大阪市東住吉区内における認知症啓発モデル地域となる。

平成19年3月、大阪市東住吉区による認知症啓発シンポジウムのパネリストに選出される。テーマは、「認知症を知って、地域で安心して住み続けるために」である。シンポジウムに対する区民からの反響は大きく、その後「私たちの地域でも、認知症について考えていきたい」との声をいただきたくと共に、そのような地域への後方支援を行う。

平成19年4月、「だいじょうぶネット」の活動を充実させる目的で「だいじょうぶネット ケアプラス」を発足させる。開催目的は、地域住民と共に、認知症ケアに貢献できるケア専門職および地域ボランティアの育成（人材育成） ケアする人のケア（ケアする人が悩みに打ちひしがれて、燃え尽きないようにするための場の提供） である。よって、当初からの「だいじょうぶネット」は家族介護者への支援の場とする。

平成19年10月～11月、「だいじょうぶネット」が活動場所としている公立小学校4年生への認知症啓発授業を行う。地域での認知症啓発および認知症になっても暮らせる町づくりを実現させるためには、地域に住む子どもたちの力が必要である。子どもたちへの認知症啓発授業を通して、その企画に携わる大人たちの認識が変わり始める。そして、授業を通して学校関係者の認識が変わる。その後、このときの授業が話題となり大阪市内の小学校や学童保育での認知症啓発授業を行うことになる。また、初の試みとして大阪市内の保育園での認知症啓発活動を行う予定である。

平成20年4月、「だいじょうぶネット ケアプラス」の活動を更に充実させる。平成15年から開催してきた間に築かれたネットワークをもとに、「だいじょうぶネット」サポーターを創設する。今年度は数名のサポーターから開始し、「だいじょうぶネット ケアプラス」を通して養成する。家族介護者が、「だいじょうぶネット」へ参加する際の子どものお世話（会場内）や初参加の人へのメンタル的支援などを行ったり、「だいじょうぶネット ケアプラス」での講師役になってもらったりしている。

今後は、既存の活動を継続させると共にそれぞれの活動の充実を図るための、“地域ニーズ”や“家族介護者ニーズ”に対応した支援内容を模索していくことである。また、近い将来において“認知症介護を終えた人”へのメンタル的支援をより充実させていきたいと思っている。

「だいじょうぶネット」の発起人であり、現在もコーディネーターとして関わっているわたしは認知症介護指導者でもある。今後においても、地域に対する認知症介護指導者としての地道な活動を行っていく次第である。

活動名称	認知症のある人の福祉機器展示館
活動要旨	認知症の方の自立生活の支援手段を紹介する全国で初めての取り組みとして「認知症のある人の福祉機器」を展示。将来的な機器の普及と開発を進め、認知症の方が機器を利用しながら自信をもって暮らせること、家族のケア負担の軽減を目指している。
応募者	国立障害者リハビリテーションセンター研究所 石渡 利奈
連絡先	〒359-8555 埼玉県所沢市並木 4-1

(概要)

2007年12月にオープンした「認知症のある人の福祉機器展示館」(埼玉県所沢市)は、「認知症の方の自立生活」の支援手段を紹介する全国で初めての取り組みである。「認知症のある人の福祉機器」というのは馴染みのない発想であるが、欧米では、軽度の認知症者の生活を支える手段として、一般化しつつある。このような機器を用いる すなわち、生活家電を使いやすいものにしたたり、記憶障害をサポートする機器を利用することで、認知症があっても、家事や外出などの社会生活を保ちつつ、より長く自宅で今までの暮らしを継続することが期待される。

本展示館開設の目的は、当事者や介護者、開発者に「認知症のある人の福祉機器」を広く紹介することで、将来的な機器の普及と開発を進めることである。これにより、認知症の方が機器を利用しながら自信を持って暮らせるようになること、また、家族関係を支援し、ケアの負担を軽減することを目指している。

(活動内容)

機器の展示 展示館は一軒家になっており、テレビのリモコンはリビングに、薬入れはダイニングにというように、機器をそれぞれが使用される生活空間にあわせて展示している。展示品の総数は77点(2008年9月現在)で、開発中の機器や取り寄せることができなかった機器11点もパネルで紹介している。

機器の貸出 希望者には、無償で機器の貸出を行っている。また、施設や団体が主催するイベントや講習会において、福祉機器を紹介したい、といった相談にも応じている。

インターネットによる情報提供 展示機器はインターネット上のデータベース(認知症のある人の生活支援機器データベース)で調べることができる。

(活動の成果)

- ・ 現在までの総来館者数は581名である(2007年12月～2008年9月)。そのうち、1割弱は所沢市内の来館者で、地域包括支援センターの方に多くご見学をいただいている。
- ・ 全国各地の地方紙、ケア関係者や認知症当事者とその家族を読者層とした雑誌、テレビの報道番組で展示館が紹介された。これにより、家族やケア関係者からの問い合わせが増え、機器への関心が高まり始めている。
- ・ 来館者を対象にしたアンケートの結果、服薬管理や蛇口の閉め忘れなど、記憶障害への対処法としての機器に、ケア関係者からの大きな期待が寄せられていることがわかった。
- ・ 介護者を対象とした講習会やイベント(秋田県、京都府、福岡県)において、機器を貸出展示し、本館を訪れるのが難しい遠方の方々にも機器の体験の機会を提供できた。

(今後の展望)

2008年度から、市内の集合住宅で暮らす高齢者の方を対象に、「機器による生活支援の実証研究」を始めている。この結果を、機器の導入事例のモデルケースとして、インターネットなどを通じて紹介したいと考えている。また、将来的には、より多くの関係者が、本館に足を運ばなくても自分が暮らす町で機器を知り導入を検討できるよう、各地域の福祉機器展示場や高齢者施設など、情報提供の場が増えていくことを期待している。

活動名称	認知症サポーター養成講座の開催推進
活動要旨	「コープ福祉活動交流支援センター」の発足をきっかけに「くらしの助け合いの会」活動や福祉・助け合いの活動を見直す。組合員向けに「認知症サポーター養成講座」を積極的に開催し、組合員の中に認知症理解が広まる。
応募者	コープさっぽろ福祉活動交流支援センター 中原 豊司
連絡先	〒063-8501 北海道札幌市西区発寒 11 条 5-10-1

(概要)

コープさっぽろは「消費生活協同組合法」(昭和23年)にもとづく生活協同組合です。2008年の今年は創立43年を経て、各地統合の結果、北海道全域を立地に、130万組合員、2300億円の利用高をもつ、全国でも屈指の生協です。

2005年度に「コープ福祉活動交流支援センター」が発足し、「くらしの助け合いの会」活動やこれまでコープさっぽろが培ってきた福祉・助け合いの活動を見直しました。

認知症の取り組みは、2005年日本生協連の誘いで、「認知症」の正しい理解促進事業(財)生協総合研究所の独立行政法人福祉医療機構(WAM)助成事業)に参加し、札幌で12月「認知症セミナー」を開催したことが始まりです。定員150席に180名が参加したセミナーでは、まだまだ偏見の多い認知症に適切な理解を進め、地域の連携を計って行くこと、生協が果たす役割などが期待を込めて、語られました。

折りよく「認知症キャラバンメイト」の育成が北海道(札幌市・本別町)を皮切りにスタートし、「認知症サポーター養成講座」が推進されることとなりました。2006年度コープさっぽろの組合員向けに認知症の学習会として「サポーター養成講座」を開催することを相談し、札幌市の理解と協力で、組合員に限定することなく「認知症サポーター養成講座」の開催が可能となりました。

2006年は3月の開催を皮切りに、後半は札幌市以外の地区にも広がり17ヶ所351名、2007年度は全道26ヶ所512名のサポーターが誕生し、取り組みの輪は大きく広がりました。

引き続き2008年も4月の北見市での開催を初め、9月末で10ヶ所で開催され、参加者は200名で進行しています。合計では53ヶ所の開催、1083名の参加=サポーター養成となっています。

2年半の取り組みで、まずは認知症理解が組合員の中に広がり、札幌市や北海道ひいては全体の「認知症100万人キャラバン」運動にいくばくか寄与できていると思います。

サポーター養成講座の開催過程で北海道や札幌市はもとより、各開催地の行政窓口と対話が進行し、コープさっぽろの福祉や助け合い活動を知って貰い、認知症の取り組みを理解いただいたことがあります。講師役の包括支援センターやグループホームのキャラバンメイトの方々とも上記同様ネットワークが広がったことは大きな成果です。

コープさっぽろ(福祉活動交流支援センター)の役割は、組合員要望に応えつつ組合員と行政やメイトの方々を結びつけることになりました。それは地域の多様なネットワークへの生協の福祉や助け合い活動が協力・協同の関係に発展する可能性を持っていると思われます。

そこにコープさっぽろの店舗や宅配ドックも大きな役割を持つかもしれません。今後はサポーターの方々への情報提供や、コープさっぽろの福祉・助け合い活動の紹介・案内、学習機会提供などを課題にしつつ、認知症学習の輪をひろげ、地域ネットワークへの参加/協力・協同を展望していきます。

活動名称	小・中学生認知症サポーターからのメッセージ
活動要旨	市内の小・中学生を対象に、学校の授業で認知症サポーター養成講座を実施。さらに認知症について学習をした小・中学生がシンポジウムに出演し、同級生や保護者など幅広い世代に認知症についての啓発の役割を担う。
応募者	彦根市 介護福祉課 上林、速田
連絡先	〒522-0041 滋賀県彦根市平田町 670

(概要)

～小・中学生認知症サポーターからのメッセージ～

彦根市では市内の中学校2校(1年生)、小学校2校(6年生)を対象に、学校の授業の中で認知症サポーター養成講座を実施。

小学生、中学生の授業を受けての感想や思い、絵や作文の数々・・・

**「小・中学生の思い、メッセージを地域の大人たちに発信したい！
子供たちが大人たちを動かす！！」**

をテーマに、各小・中学校等に協力を要請し、認知症について学習をした小・中学生が出演者となり、参加者にメッセージを発信するシンポジウムを平成20年3月22日開催!!

「認知症でもだいじょうぶ やさしさいっぱい のまちに

～小・中学生認知症サポーターからのメッセージ～」

内容

小・中学生が出演者となり、認知症について学んだこと、感じたこと、自分たちにできること、認知症サポーターとしての意気込みなどを『川柳』や『作文』、『絵』や『ビデオメッセージ』、『歌』などを通して参加者にメッセージを発信した。

～シンポジウム参加者の意見・感想～

- ・小・中学生が認知症について学び、しっかりとした活動をされていることに驚き、自分も親として胸をはれる行動をしていこうと感じました(30代男性)
- ・今回のような会に今度は小学生の自分の子どもと一緒に参加してみたい(30代女性)
- ・すばらしい彦根の子どもたちで安心して年重ねることができます(60代女性)

活動の成果と今後の展望

小・中学生がシンポジウムに出演することにより、同級生、働く世代や子どもたちがその背中を見て育つ保護者世代に参加を促すことができ、認知症について幅広い世代に啓発をすることができた。

今後は高校生や大学生などに対しても普及啓発を行ない、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりに向けての原動力になってもらえるような働きかけをしていきたいと考えている。

活動名称	認知症に対する地域活動と妻の在宅介護（個人の講演活動）
活動要旨	認知症と診断された妻を介護した体験をもとに講演活動を続けている。心構えや生きがい、家族の人間関係などを共通話題とし、支え合いや協力の必要性を説いている。
応募者	南相馬市生涯学習アドバイザー・認知症の人と家族の会 福島県支部相双地区所属 紺野 幸
連絡先	〒975-0005 福島県南相馬市原町区二見町 1-15

（概要）

1) はじめに

妻を介護して9年たち、2008年10月に妻は介護5に認定された。数々の体験をしながら、本人のものとはいえない言葉の数々、着替えや入浴時の暴力、薬服用の気分による拒否、車椅子のための介助など、誰にも理解してなどとはいえないし、言ったところで難しい理解、そんな苦勞を多くの人にさせたくないと思い、予防の手助けになるよう、公的な介護のほかのサポートとして、講演活動で頑張っている日々をまとめてみた。

2) 地域における認知症に関する意識の格差

- ・認知症についての意識は低く、家族や身内にそれらしい人が出た時には閉鎖的で外部に話さず、たとえ聞こえたとしても家族でなければ人ごとのように捉えている。
- ・一人暮らしや老夫婦の実態から予備軍まで考えるとこのまま無関心であっていいのか、現実の問題として老人の行方不明事件や脳卒中で倒れている事件が発生したことによる一人暮らしの方の老人の不安な言葉から、「老人見守り隊」を結成し活動している。
- ・組織的な活動としては、「認知症の人と家族の会」に加盟しているが、私個人は、市の生涯学習アドバイザーとしての活動と、所属する「老人見守り隊」と「子ども見守り隊」による警察庁指定の「地域安全安心ステーションモデル事業」による「愛の小鳩会」の活動である。

3) 活動の内容

個人的な活動が主であるが、生涯学習という目的のなかで高齢者が希望するメニューを作成し、各種団体への講話活動を展開しているが、妻のアルツハイマー型老人性認知症という診断による在宅介護を余儀なくされた厳しい試練のなかで数多くのことを学び、それらを抑止する心構えや生きがい、家族の人間関係などを共通話題として、「私の介護体験記」「高齢化が進むなかで」「ボケない生き方をするためには」「認知症の予防と早めの対応は」「家族の人間関係はどうあるべきか」「生きがいのある人生とは」「親子同居の心構え」「もう一つの人生は楽しさと輝きで」などを、主なメニューとして依頼回数が多い講座である。

4) これからの展望と課題

認知症の人や家族を如何にして積極的な相談や診断を進めていく方法や組織のあり方。また、行政・サポーター・家族の会員の姿勢や対応が大きく影響すること。場合によっては、逆効果になることもあり、現にそうした相談も数件ある。(他に漏らされたこと、根ほり葉ほり聞くこと、認知症と決定付けられたことなど) 体験者の話や直接お逢いしての経験など聞く機会を多くし、早期診断が大切で、対応を誤ると家族や兄弟など人間関係の崩壊をまねくことも例を通して説明することが必要である。そして地域の見守り、理解が重要であり、早期診断や進行抑止には、多くの人の意識と協力がなければできない。年々増加の傾向にあるこの問題は、国や行政が本気になって取り組む課題であるとともに、市民が皆、認知症のサポーターとしての役割が持てるようにならなければならない。私自身も妻の介護の体験や苦勞とそれに関わる家族や兄弟関係の人間関係、そうならないための生きがいのある生活や日頃の人間関係の絆や親戚や隣近所の付き合いや協力による支え合いの必要性を説いていきたいと考えている。

活動名称	ハッピーライフのご提案 認知症にやさしいまちづくり
活動要旨	区民の認知症予防への関心の高さを受け、認知症予防事業がスタート。認知症予防推進員が「区民の立場から学んだことを伝える」を意識して認知症のミニ講座や劇を実施。「出会い」「交流」の輪を広げている。
応募者	認知症予防推進員の会 有楽ねりま ミニ講座グループ 岸 肇
連絡先	〒176-0002 東京都練馬区桜台 3-29-20

(概要)

平成16年度練馬区高齢者基礎調査によると区民の認知症予防への関心が高く、17年度より練馬区の認知症予防事業が始まりました。私たち認知症予防推進員は練馬区が東京都老人総合研究所の指導のもとに実施した認知症予防推進員養成講座の修了者です。自主活動として会を立ち上げ、定期的に研修や話し合いを重ね、認知症予防を区民に広げるための出前ミニ講座や劇を行っています。

ミニ講座では、認知症予防に効果的な生活習慣や具体的な取り組みを区民の身近なところから伝えています。また、ミニ講座を通し、認知症について不安に感じている人や家族に区の相談窓口を紹介し、認知症の早期発見や早期対応に寄与し、予防から認知症の症状が発症した方にもやさしいまちづくりを目指しています。

やさしいまちづくりに向けて実践しているのは「出会い」「交流」です。普通の講座の場合は、「講師と講座を聞きに来た方」という関係になりがちです。ですが、「区民の立場から、自分が学んだことを伝える」を意識することで、ミニ講座は講座を聞きに来た方たちとの距離感が縮まります。それを活かしながら、講座終了後に交流の時間を設けるようにしています。

「こんなことを悩んでいるの・・・」「意外とご近所なのね」などの声が聞かれると、交流の輪が広がっていることが実感できます。

私たち区民の認知症予防推進員が、区民の前でミニ講座を始めてから平成20年10月で3年になります。この間、約40名のメンバーが入会しました。練馬区の指導とミニ講座グループが毎月開いている月例会の中で、ミニ講座サロンを開き認知症予防の研修やミニ講座の練習時間に当て、切磋琢磨、講師としての技術を身に付けています。そのうち25名がミニ講座の講師として練馬区内の地域の集会で認知症予防の講演をボランティアでしています。この講演はグループメンバー2人一組で担当します。また、講師の経験、未経験を問わず講演に参画します。講演のあと現地で反省会を開き意見交換を行います。このように人前で話す準備を常に行い講師としての技量を磨いています。

平成20年度からは認知症の理解を進めるための「劇」の作成にも取り組んでいます。「普通に話をしているだけでは理解してもらえないのでは?」「認知症に対して関心の薄い世代向けのツールは何かいいのだろうか?」の2点を解決する手段として、「劇」というツールをつかうのがいいのではないかと考え、作成に取り組みました。センター方式を活用した事例を題材にし、約2か月の準備期間を経て、9月25日に上演を行いました。その時の様子を録画したDVDを使いながら、地域に飛び出し、交流の輪を更に広げていきたいと考えています。

活動名称	鯨川村 認知症予防に向けて村民と行政が共に助け合う仕組みづくり
活動要旨	過疎化が進む村で村民、保健推進員、キャラバン・メイト、行政が協力し、小さな村だからこそできる寝たきりや認知症予防を目指した地域づくりを展開している。
応募者	鯨川村役場住民福祉課・鯨川村地域包括支援センター 認知症キャラバン・メイト事務局 鯨川村役場 鈴木 芳子
連絡先	〒963-8401 福島県東白川郡鯨川村大字赤坂中野字新宿 39-5

(概要)

はじめに

鯨川村は人口4,277人、高齢者1,296人、高齢化率30.3%(内75歳以上の高齢者は764人、高齢者の59%を占める)(平成20年8月1日現在)3人に1人は高齢者で、なお後期高齢者の占める割合が高いという、過疎の村です。しかし、「いつまでも人として尊厳を保ち、最後まで自分らしく楽しく地域で暮らしたい!」という願いを実現するため、従来の行政主導型ではなく、行政と村民が協力し、個々が得意な分野で力を発揮し支え合える小さな村だからこそできる、寝たきりや認知症予防を目指した地域づくりが始まりました。

活動の内容

基礎づくりは平成9年から、地区の各団体との連携を図りながら、高齢者のための支援体制が徐々に整備されました。平成12年には7行政区全てに区長さんを中心に、高齢者地区支援事業として「ふれあい広場」ができ、各地区で健康教室や運動等を企画運営しています。

また保健推進員さんや食生活改善推進員の地区自主活動は各地区の集会所単位で毎年開催しています。地区では村民が主催し行政がサポート、中央では行政が主催となり、教室の運営委員や運動指導員を村民の中から育成し村民が村民のために活動する体制づくりが出来上がりました。

平成18年度からは3年間計画で「認知症サポーター養成」が始まり、平成19年度末には7行政区で362人のサポーターが誕生しました。

平成20年度からは、講師役の認知症キャラバン・メイトを住民から公募、育成し教室を開催しています。また、前年度から要望があったフォローアップ研修も開催しました。

保健推進員の地区自主活動として、身近なところで人を集める役割を保健推進員が担い、キャラバン・メイトが講師役で「認知症・サポーター養成講座」を開催することになり、みごとな連携プレーをしています。地域の要望で、夜間や日曜祭日にも対応する体制で取り組んでいます。対象者はお嫁さん世代から中学生、高校生まで幅が広がりました。体制づくりが徐々にできてきたので、今後は若い世代の方を巻き込んだ地域の健康づくりに発展していくことを期待しています。

結果 《成果と課題》

病気の予防の「地区健康教室」として「認知症サポーター養成講座」を取り組んでの効果

- 1) 村民については、「認知症に関するアンケート」を講座開始前と後に記入してもらい、認知症について正しく理解できた等、良い結果が得られた。
- 2) 保健推進員さんにとっては、2年任期の1年目の活動でもあり新規事業でもあったが、健康教室の内容は決まっておらず講師はキャラバン・メイトに依頼できることもあり、意欲的に参加者を集め、各集会所に集まってくる人達も夫婦、家族等若い世代で、メンバーが一新できた。人数も例年より多くなり、取り組みはとても意欲的だった。
- 3) キャラバン・メイトは村保健師と地域包括支援センターの職員の2人からスタートし、平成20年度には8人に増員となった。また月に1回は集まって、講座の評価と今後の事業の分担をしている。各講座は、パワーポイントとビデオを使い、前半、後半に分けて2人体制で実施。それぞれに熱心に勉強し、与えられた役割を担っている。
- 4) 行政事務局の役割は、村民が力を出し合えるような仕組みづくりと後方支援者として、今後モサリげなくサポートすることが大切。

活動名称	認知症メモリーウオーク・千葉
活動要旨	平成19年に日本初の「認知症メモリーウオーク」を官民協働で実施。実行委員会方式により準備から当日まで様々な立場の人が協力しあい、その過程の繋がりが当日のパレードに結実。共に歩くことで認知症の方と家族の心を開くことに繋がっている。
応募者	第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会 委員長 助川 未枝保
連絡先	〒289-0226 千葉県香取郡神崎町神崎神宿 66-10

(概要)

住みなれたまちで安心して暮らしたい。誰もがそう願うように、認知症になっても思いは同じです。今後、団塊の世代の高齢化が進むにつれて、認知症高齢者の更なる増加が予想され、その影響が懸念されています。この増加にあわせて認知症への対応を考えるとき、認知症の人の生活全般を支えるためには、認知症が、「病的な変化によるもの」とあたりまえに理解されるようになり、保健・医療・福祉・地域住民が連携した支援体制が整っていなければなりません。

認知症の人が安心して暮らし続けることを追及することは、地域に暮らす全ての人にとって、とりわけ、高齢者や子ども、障害者など、支えを多く必要とする人にとって、住みよいまちをつくることにつながっていくものと思います。そんな思いから、「認知症メモリーウオーク・千葉」は生まれました。

【「認知症メモリーウオーク・千葉」の実施】

諸外国(カナダ、米国、英国、オーストラリア、オランダ、台湾、キューバ等の様々な国)で、アルツハイマー病の理解と、社会への啓発活動を目的に「メモリーウオーク」(パレード)が盛んに行われているのに対し、日本ではまだ行われていないことから、千葉から日本初として「認知症メモリーウオーク・千葉」を実施しようと提案しました。

【平成19年度の実績】

平成19年9月16日(日)日本発の「認知症メモリーウオーク」を開催しました。予定していた人数を大幅に超えた、520人の参加者が集まりました。また、当日参加できなかった、特別養護老人ホームやグループホームの方々は、ウチワに画を描いて思いを託し、「ウチワでの参加」を行い、その思い(ウチワ)を参加者が持って歩きました。「認知症でも安心な千葉に!!」をテーマに、皆の気持ちが1つになりました。また、参加者だけではなく、各企業にも、この趣旨に御賛同いただき、多くの寄附を頂きました。

【平成20年度の実績】

より多くの地域に認知症についての理解を求めため、広域型と地域型の形式にして、広域型については、千葉県全域から参加者を募り大規模なパレードを10月13日に実施し、地域型については、地域のカラーを活かした小規模なパレードを、香取市で10月19日、佐倉市で11月29日に実施しました。

広域型から地域型へとつなぐシンボルとして、特別養護老人ホームのお年寄りが作った「千羽鶴」をバトン代わりに、各開催地につなげていきました。昨年度よりも施設を利用されている方が多く参加し、認知症本人が楽しんでいる様子を目にして、主催者もほっとしました。

このつながりは、来年、再来年とより多くの市や町に広げていこうと考えています。

【千葉から海外へ】

平成20年度は、もう1つ嬉しいニュースがありました。それは、平成19年、平成20年度と2年連続、海外から「認知症メモリーウオーク・千葉」に参加していただいた、韓国アルツハイマー病協会会長、李 聖姫(リ スンヒ)氏が、韓国ソウル市で韓国初の「認知症メモリーウオーク」を実施したことです。千葉から韓国へ……。このように国内だけではなく、海外に発信できたことは、とても素晴らしいことと感じています。

活動名称	市民後見センターきょうと
活動要旨	成年後見制度の普及を目指し、相談対応やセミナー開催などの基本業務に加え、常設相談所の設置や解説冊子の発行、より安全な法人後見事務のための「市民後見ペア・サポート」、テレビ会議方式によるインターネットでのライブ相談などを展開。
応募者	NPO法人 ユニバーサル・ケア 内藤 健三郎
連絡先	〒600-8216 京都府京都市下京区西洞院通七条下る東塩小路町 607-10 サンプル京都ビル 501号

(概要)

「市民後見センターきょうと」の取り組み

私たちは、成年後見制度が広く市民社会に浸透することを目標として活動しているNPO法人です。

京都府では高齢化が進み、高齢者人口が53万人に上っていますが、福祉サービスは十分ではなく高齢者にとって住みやすい地域とは言えません。高齢者の生活と権利を守る成年後見制度の普及についても、その利用支援体制の整備は遅れています。

司法・行政機関による制度についての広報活動の不足もあって、成年後見制度の利用自体が低迷を続けていますが、私たち「市民後見センターきょうと」は、成年後見制度を「だれもが自由に利用できる、ごく普通のサービス」にすることを目指して活動をしています。

私たちは以下のことを基本業務として行なっています。

相談所来訪者および電話・ファックス・メールによる相談者への対応(制度解説、利用指導、後見申立手続支援・任意後見契約手続き支援など)

法人としての後見人引受(法定後見および任意後見)

年一回の「市民後見人養成講座」開催および独自のプログラムによる相談業務・後見実務従事者の育成

関係組織、諸団体からの要請に基づく成年後見セミナーや説明会の開催

また、以下のような特長を持った活動を続けています。

(1)成年後見常設相談所の開設

平成18年から、京都では初の成年後見専門の常設相談所「市民後見センターきょうと」を京都駅前開設し、以来、多くの市民の方々に利用していただいています。

(2)成年後見制度解説冊子の発行

成年後見制度解説の冊子もっと身近に!『成年後見』を独自に作成しました。制度解説の入門書として、また、ご相談者への手続きの説明書としても使用し、好評を得ています。

(3)二つの非営利法人による、より安全な共同後見引受サービスの開始

平成19年からは、より安全な法人後見事務を実現するため、二つの非営利法人による共同の後見人引受事業「市民後見ペア・サポート」のサービスを開始しました。

(4)テレビ会議方式による「成年後見ネット・ライブ相談」サービスの開始

平成20年9月中旬からは、インターネットを利用した「成年後見ネット・ライブ相談」サービスを全国に先駆けて実現しました。

活動名称	地域型認知症予防旅行プログラム5日間体験版「ボケない脳は旅で鍛える」
活動要旨	高齢者の社会参加によるQOLの向上を目的に「旅の脳活性訓練法」や「旅行ぬり絵プログラム」などを取り入れ、「認知症予防旅行プログラム」を各地で実施。地域社会に認知症予防の手法を提案し、高齢者の自立した生活持続の重要性を伝えている。
応募者	内閣府認証NPO法人 日本トラベルヘルパー協会 宮下 典子
連絡先	〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-19-13 トップヒル10F

(概要)

NPO法人日本トラベルヘルパー協会では、認知症を防ぐために今日からできるまちづくりとして「高齢者の社会参加によるQOLの向上」を目的とした「認知症予防旅行プログラム～5日+2日間体験版～」を各地で実施しました。

この旅行プログラムは、東京都老人総合研究所(都老研)が開発した地域型認知症予防「旅行計画」プログラムを5日間の体験版として監修し、介護旅行の(株)SPIあ・える倶楽部が制作した「旅の脳活性訓練法」や「旅行ぬり絵プログラム」などを取り入れた総合健康旅行プログラムです。

都老研では認知症になりかけの時にはじめに落ちる次の三つの機能を重点的に鍛えることをすすめています。

エピソード記憶(出来事や体験を記憶して思い出す)

計画力(目標を決め、手順を考える)

注意分割機能(注意を切り替え、色々な注意を配る)

また、認知症を予防する生活習慣として

有酸素運動をしよう...ウォーキングがおすすめ

頭を使う生活をしよう...パソコン、お料理、旅行計画

野菜・果物・青魚を食べよう...赤ワインもおすすめ

としている他、「新しいことをはじめ(チャレンジする)」ことを推奨しています。

旅行プログラム開始に先立つオリエンテーションでは、まず開催趣旨として認知症予防を意識した教室であることを強調した上で、希望者には認知力検査(ファイブ・コグ検査)を実施しています。

このファイブ・コグ検査は、都老研の認知症介入研究グループと筑波大学臨床医学系精神医学により開発された検査法で、軽度認知障害のひとつの診断基準である加齢関連認知的低下をスクリーニングする為に、記憶・学習、注意、言語、視空間認知、思考の5つの認知領域を測定します。

85歳までの測定が可能とされ、一度に多数(100名程度)の集団高齢者の認知機能を評価でき、認知機能の変化を検出することができるのが特徴とされています。

教室は、1回あたり90分から、休憩を含め120分程度を目安に行い、参加者7～8名毎に1名のガイド(ファシリテーター)がグループを担当します。内容は、頭の体操として高速学習による脳活性訓練(毎回10分)と旅行計画により計画力を鍛える(90分)という脳活性法を併用したプログラムと旅行実施後は、さらにぬり絵を活用した旅行記の作成、発表など、エピソード記憶を刺激した内容を盛り込むなど、脳も身体もフル活用させます。

この体験プログラムを実施することにより、地域社会に認知症予防の手法を提案し、高齢者の自立した生活持続の重要性を訴え、その成果を報告書にまとめています。

なお、この活動の一部は独立行政法人福祉医療機構の助成を受けて行いました。

活動名称	慣れ親しんだ地域で暮らし続ける ～より地域に開かれたグループホームを目指して～
活動要旨	一人暮らしの女性が地元を離れてショートステイ利用や特養入所をされた後、地元のグループホームに住まいを移る。地域との関係を保持し、心身共に安定した暮らしを継続されている。
応募者	西脇 陽子
連絡先	〒940-2034 新潟県長岡市上除町西 1-411 社会福祉法人 長岡社会福祉協会 高齢者総合ケアセンターこぶし園 グループホーム上除

(概要)

一人暮らしの女性Aさんが、認知症の症状や転倒等を繰り返しながらも地域で暮らしていた姿から、地元を離れてショートステイ利用や特養入所を経て、地元にあるグループホームに住まいを移して地域での生活を継続している姿を追った。

5年前の秋、S町の福祉コーディネーターさんから在宅介護支援センターに、「最近Aさんの物忘れがひどくなってきたようだ。一人暮らしで心配だ。」と連絡があった。

そのきっかけはAさんが暮らしていたS町地区社会福祉協議会の事業の1つの「小地域ネットワーク活動」であった。これは一人暮らしの高齢者等を近隣者やボランティアによる構成員が訪問や見守りを行い、生活上の問題が生じたときに民生委員や町内会長、支援センター等に連絡・相談し、早期に解決するための仕組みである。

その当時、徐々に物忘れがひどくなってき始めたり、膝や腰の痛みで出かけられないことがしばしばあったりしていたが、Aさん宅近くの民生委員や構成員がよく訪ねて来て下さり、見守られた生活を続けていた。

Aさんには服薬管理や火の始末の不安もあり、ホームヘルパーやデイサービスを利用しながらも、自分でシニアカーに乗って買い物をしたり、美容院に行ったり、近所に住む元同僚が遊びに来たりという生活をしていた。

しかしAさんは、もともとあるひざの痛みもあり歩行が不安定になっており、しばしば転倒しては怪我することが増えてきた。

このような状態になった頃より、不安は募るばかりで、ショートステイを緊急利用し、一人暮らしは難しくなり特養入所となる。最後のショートステイ利用中には、自分がどこにいるのかすらわからなくなっていたのだ。

しばらくして、地域のグループホームに空きができ、地域に戻ることができた。特養入所の申請時より、地元のグループホームへの入所を強く希望していたので、Aさんと地域とのパイプを断ち切ることなく暮らせるスタンスが出てきたのだ。

現在では、自宅で一人暮らしをしていた頃や、特養にいた頃を知るスタッフと生活している。また、一人暮らしをしていたときに支えてくれた地域の方々やボランティアさんが来てくださり、関係を維持し、慣れ親しんだ地域での生活を継続することができているのである。

しかし、ADLの低下が見られ、Aさんから地域に向くことは少なくなったが、地域のボランティアが来てくれたり、妹さんが面会に来てくれたりと、地域との関係を保持し、生活を続けている。そのような中で、仕事をしていた頃の話やご主人の話をして、表情が豊かになり声を出して笑うようになったのも大きな変化の1つである。

一人暮らしや認知症による不安は、介護サービスの利用で補い、温かく見守ってくれる近所の方々を支えられ、何よりも顔なじみがいる住み慣れた地域にすることで、安心した生活につながっているのではないだろうか考える。

活動名称	大笹生地域の福島市立大笹生小学校4年生と当事業所利用者との世代間交流
活動要旨	近所の小学校の授業の一環として、毎年小学生と利用者との交流を年二回実施。世代間交流により、老人保健施設への理解を深めてもらい、利用者には元気に、児童には思いやりの心や奉仕することへの喜びを感じる心が育成されることを目指す。
応募者	医療法人 生愛会 附属介護老人保健施設 生愛会ナーシングケアセンター 総看護師長 佐藤 延子
連絡先	〒960-0251 福島県福島市大笹生字向平 13-1

(概要)

私は、認知症介護研究・研修仙台センターで、認知症介護指導者研修を平成13年から14年にかけて修了した第3期生です。研修後は現在まで、当事業所に勤務しながら県主催の認知症介護実践者研修にも携わっております。

今回は、本年度実施している当事業所の行事の中から、利用者との地域にある大笹生小学校4年生との世代間交流について紹介いたします。

当事業所では、開設当初から理事長の「地域に根ざした老健」の趣旨の下に、近くにある大笹生小学校の児童達が授業の一環として、毎年利用者との交流を年二回持っております。もう12年目を迎え、今年も4年生が訪れております。少子化の影響で一学年一クラスのみ、人数は20名です。この児童の来所に先立ち、私が学校に出向き「生愛会ってどんなところ？」というテーマで、パネルを作って出前講義をしてきます。それは児童達に生愛会や、認知症高齢者へのイメージをもって貰う事と、生愛会を訪れる期待感を植えつけたいからです。

世代間交流のねらいは、(1)身近な介護老人保健施設「生愛会」について理解を深めてもらう。(2)利用者はアクティビティとして児童と交流を図り元気になっていただく、児童には思いやりの心や奉仕することの喜びを感じる心を育成することです。

今年は、6月に第一回の交流をもちました。((3)活動の内容参照)第二回目は11月に実施し、利用者の方々と一緒にクリスマスツリーを飾る予定です。この世代間交流の時間は約2時間程度です。前半は、児童達が授業の中で考え準備したことを実施いたします。その年により歌・音楽演奏・劇・昔話など内容は異なりますが、担任の先生の指導の下に、企画から発表運営など全て児童達で行います。

本年度は「高齢者と遊ぶ」で、おはじき・あやとり・オセロ・ボウリングなどを行いました。後半は、利用者とのコミュニケーションで、施設手作りの「おやつ」を一緒に食べながら交流を持ち、最後にお互い手作り品のプレゼントの交換をいたします。私達職員は、スムーズに運営できるようにお膳立てをして後方支援をいたします。利用者は、自分の孫と重ね合わせて感動するようです。児童達もやりがいを感じ又来たいと言って帰ります。

さて話は変わりますが、福島市では、市内の全中学校の生徒に「地域に学ぶ体験活動」を実施しています。当事業所でも、近くの信陵中学校の生徒さんを毎年3名～5名受け入れています。期間は5日間ですが、この生徒さんの中にどこかで見覚えのある生徒さんがおりますので声をかけてみると、「大笹生小学校の時に生愛会に来て楽しかったので又希望しました。将来は医療か福祉関係の職業につきたい」との答えが返ってきます。私はとても嬉しくなります。これからの高齢者に関わる若者の底辺を増やす手助けになればと、職員の皆さんの協力を得ながら、忙しくても楽しみながら仕事をしている毎日です。

は掲載省略

活動名称	認知症を理解することからはじめよう ～できることから1つずつ～
活動要旨	「元気な市民と元気なまちづくり」を進める取り組みとして『宗像市人づくりでまちづくり事業』の助成金をもとに行政の理解を得て、市民独自の認知症の取組みを実施。
応募者	みちか ネットワーク 酒井 久仁子
連絡先	〒811-3304 福岡県福津市津屋崎 2-14-28

(概要)

全国的に市町村合併が進むなか、宗像市も1村1町と合併し現在の人口約10万人、高齢者率21%の市になった。離島や住宅地、農村・漁村など地域によって特色があり、統一的な取り組みではなかなか浸透しにくく、市民も受け入れにくい現状がある。

宗像市は、平成15年より「市民と協働のまちづくり」に積極的に取り組んでいる。現在の活動は、行政(宗像市市民活動推進課)の理解や協力と、地域のニーズにあわせた活動を行っていききたいという市民団体が連携することにより実現できた活動であると感じている。

平成19年春に広報誌で宗像市独自のサポーター養成講座受講生を募集。申し込み内容にはあらかじめスポット的な参加でなく継続的に参加していただき、講座修了後は地域での活動協力を依頼したが、定員を上回る申し込みが寄せられ、関心の強さを感じた。同年秋より、みちかネットワーク企画による『宗像市人づくりでまちづくり講座「宗像版認知症サポーター養成講座」』を開催。通常、1時間程度の講座をうけることでサポーターとなるが、私たちはまず、認知症を正しく理解した上で地域活動のできるリーダーを育成することから開始。そのため、2時間程度の講座を10回シリーズで計画し内容も充実させた。ちなみに今回の講座は80名ほどの受講生でスタートし、最終的にリーダーとして巣立った受講生は60名ほどである。

さらに宗像市2地区に協力依頼し、認知症を理解するための地域にあった取り組みについての方法を検討。J地区は、リーダーそれぞれが近隣者に声かけし、少人数での地域勉強会を開催、理解者の輪を広げていこうと提案され、現在実施中である。A地区は、自治会や民生委員会の協力で地区の役員(60人)を対象に『認知症サポーター養成講座』(標準)を開催することができた。認知症に関する勉強会に初めて参加した人が多く、認知症を理解してもらいよい機会になったと。さらに、アンケートから「自分の地域でも(勉強会を)したらいいのではないかと感じた」の意見もありそれぞれの意識の変化が伺えた。

もう一つの取り組みは、高齢者に関わることの多い職種として訪問介護や通所事業所で働くスタッフ向けに認知症初期段階に気づく力を養う講座『気づきレッスン』を企画し、実施中である。参加者それぞれが自分の経験を見つめ直し、シートにまとめ、他者の意見を聴き、そこから今後の気づきに役立てていく手法をとっている。いわゆる自分たちで気づき、学ぶ研修会である。初期段階にある認知症の人をどうサポートするかが今後の生活に大きく影響を与えることを介護職各々が理解していく内容となっている。今回のデータ(気づき)をもとに「気づきレッスン」は、一般市民向けや民生委員向けに展開させていく予定である。

(活動の成果と今後の展望)

私たちの暮らす宗像市は先進的かつ特徴のある認知症の取り組みをおこなっている地域では決してなかった。しかし、宗像市役所市民活動推進課の理解と協力で、行政主体の画一的な内容ではなく市民独自の考えによる手づくりの認知症への取り組みがはじまった。今年は3つの市民団体が独自の方法で啓発活動に取り組んでいる。介護職はもちろん、高齢者等と関わりの少ない人へのアプローチに力を入れ、「認知症の人や家族への理解」をきっかけに、「地域(まち)づくり」に関心をもてるような活動を続けたい。わたしたち「みちかネットワーク」の活動ははじまったばかり・・・決して大きなことはできないけれど・・・ひとりひとりに語りかけていくような活動をみちかなところから発信していきたいと思っている。

活動名称	目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング
活動要旨	家族会が中心となり、体験型認知症啓発イベントを開催。首都圏の10数グループとともに介護者の会ネットワークを結成し、交流イベントの開催から新たなネットワークが生まれるなど、協力の輪を広げている。
応募者	目黒認知症家族の会 たけのこ 竹内 弘道
連絡先	〒153-0053 東京都目黒区五本木 1-15-11

(概要)

目黒認知症家族会たけのこは、1998年4月から活動しているが、介護保険制度のスタートを境に、会員数の低落傾向が始まった。通所介護などの利用が促進されたためと推察された。低迷を脱するための情報を探るうち、介護者の会ネットワーク会議の存在を知った。NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジンの呼びかけで、首都圏の10数グループが結成した「草の根家族会」の集まりである。2003年秋の第2回会議から参加し、交流を通じて、たけのこの持つ得がたい“資源” 人的資源=保健師とボランティア 支援体制=区と社会福祉協議会 を再認識した。

たけのこの活動は区の保健師に支えられてきた。区内を巡回し地域の実情を知悉する“地域資源”だ。[介護者の会ネットワーク]で知り合った専門家に協力と参加を依頼し、保健師のノウハウを活かす形で、04年から体験型の認知症啓発イベント[たけのこ広場]を始めた。「個別相談」「介護者交流会」「体験ミニデイ」「認知症ミニフォーラム」などの内容で、年1回の開催。今年6月の[第5回たけのこ広場]には130人を超える人々が集まった。

「個別相談会」は医師と保健師と包括支援センターのスタッフ(保健師、社会福祉士、主任ケアマネ等)がチームを組んで、医療・介護の総合的なアセスメントを行う。「交流会」は1テーブル10人以下に設定し、専門の心理職、たけのこのメンバー、保健師・包括スタッフが進行役を務める。「体験ミニデイ」も同様の態勢で認知症の人を迎える。「ミニフォーラム」の講師はフォーラム終了後は交流会に合流する。今年は区の保健師9人、地域包括支援センターからも9人、さらに区と社協の職員6人が中核スタッフとして参加した。行政現場とのネットワークも確かなものになっている。

たけのこは発足以来、区の人的援助(保健師の派遣)と社協のミニデイ支援(助成金、ボランティア募集、保険等)を受け、「ミニデイと家族交流会を同時開催する」活動を続けてきた。[たけのこ広場]はその拡大版である。[広場]を通じて保健師や包括スタッフとの“コラボ感”が深まり、日々の活動にも協力して取り組むようになった。問題を抱えている家族を「たけのこで慣らし運転してから介護保険サービスに誘導する」といった取り組みだ。デリケートな認知症の人と介護者には、こうした「助走期間」が必要だ。そこにたけのこの10年のノウハウが活かしている。DVや介護うつの人も保健師に伴われてやってくる。

[たけのこ広場]は介護者の会ネットワークにも刺激を与え、05年から[介護なんでも文化祭]という首都圏規模のイベントがスタートした。年々、規模が拡大し、昨年、浜松町の都立産業貿易センターで行った第3回では来場者は600人に達した。[文化祭]からは、福祉団体・グループ、企業、医療NPOなどのネットワークの連鎖が起こっている。

目黒区の認知症サポーター養成講座では、「家族会から伝えたいこと」というコーナーが好評で、終了後も懇談していく人が多い。地域に密着した出前講座も増えており、そうした中から、地域の多様なグループとの交流が生まれている。目黒ローカルでもネットワークの連鎖が起こりはじめている。

ネットワーキングの結果、低迷していた会員数も大きく回復した。例会の見学者も増え、家族会、行政の担当者、学生などがしばしば訪れる。今後は「在宅ターミナル」などの問題に真剣に向き合わなければならない。[広場]や[文化祭]で得たネットワークの先を探り、これからもたけのこ流のネットワーキングを模索していこうと思う。

活動名称	今、伝えたい認知症～区民（認知症の人も！）で支えあう町づくり～
活動要旨	「都筑区認知症サポート応援し隊事業」の推進に向け、区の福祉保健センターの声かけにより認知症サポート連絡会が立ち上がる。認知症の普及啓発と、認知症の人と家族を支える事業に、関係機関・団体と連携しながら取り組んでいる。
応募者	認知症サポート連絡会（横浜市都筑区）一同
連絡先	〒224-0034 神奈川県横浜市都筑区勝田町 651 医療法人 活人会 高齢者グループホーム 横浜ゆうゆう

（概要）

2008年5月に、都筑区福祉保健センターの声かけで、都筑区において認知症サポート連絡会（以下、連絡会）が立ち上がりました。連絡会立ち上げの趣旨は、認知症の普及啓発と認知症の人と家族の方を支える「都筑区認知症サポート応援し隊事業」の推進に向け、関係機関・団体と連携を図り、効果的に事業を展開するためのものです。事業構成は下記活動内容の3つを掲げ、連絡会が携わりながら、今年度の活動をおこなっています。連絡会メンバーは、「都筑区認知症サポート応援し隊事業」の趣旨に賛同された地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、認知症グループホーム、認知症キャラバンメイト、区のスタッフで構成されています（20名+区のスタッフ4名）。

（活動内容）

認知症出前講座

都筑区福祉保健センターのケースワーカーや保健師、認知症キャラバンメイトが講師となり、老人クラブ、地区民協、食生活改善推進委員、保健活動推進委員などを対象に出前講座を実施しています。2009年1月末現在で40ヶ所、約1,289人の方に参加いただき、認知症サポーター養成講座の位置づけでも実施しています。参加者からは、「認知症と物忘れの違いがわかった」、「困った時にどこに相談すれば良いかわかった」、「偏見をもたず声をかけることから始めてみたい」など様々な意見が寄せられました。

フォーラムの開催

2008年10月30日に都筑公会堂で「認知症フォーラム in つづき～今始めよう認知症を理解することから～」を開催しました。当日は、定員600人を超える680人以上の区民などが集まり、1部は永田久美子氏の基調講演、2部は介護者の家族、地域包括支援センター、ケアマネジャー、認知症サポート医、グループホームスタッフ、認知症キャラバンメイトによるリレーメッセージをおこないました。以外でも、地域包括支援センター、ケアマネジャー、グループホーム、キャラバンメイトが各自でブースを作り、相談窓口や事業の紹介などをおこない、多くの区民から讃辞をいただきました。

キャンペーンシールの作成

2008年12月より連絡会でシールのイメージを考え、作成しました。オレンジリングの輪の中に笑顔の男女の高齢者がいて、その輪の外に、横浜市や都筑区の建物などでもう一つの輪を作り、「皆で支え合おう」というメッセージシールで、一緒に作成したリーフレットと一緒に幅広く区民に配布していくところです。連絡会メンバーは、早速車に貼ったりして普及・啓発に努めています。

（活動の成果と今後の展望）

認知症出前講座は、今後は学生などにも幅を広げながら、対応していきたいと考えます。「認知症フォーラム in つづき」は、活動内容のとおり多くの方の讃辞をいただいたので、来年度も趣向を凝らし開催していきたいと考えます。また、キャンペーンシールもこれから広く配布していき、認知症の普及・啓発につなげていきます。その他にも、都筑区徘徊高齢者SOSネットワーク連絡会との連携なども推し進めて、豊富なアイデアを活かして、皆で支え合う町づくりを構築していきたいと考えております。

活動名称	あさがお協力隊の活動について
活動要旨	区の保健師が呼びかけ区民ボランティア組織を結成。認知症学習会、施設見学や体験型研修を経た会員が、本人の趣味活動と一緒にを行うサロン班、ほか家族会班、情報班、個人ボランティア班に分かれ、活動している。地域包括との横の連繋も生まれる。
応募者	旭福祉保健センターサービス課 高齢者支援担当 保健師一同
連絡先	〒241-0022 神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰 1-4-12

(概要)

活動のきっかけ

旭区では高齢者人口上昇に伴い要介護高齢者、特に認知症高齢者の増加が目立ち始めましたが、区役所に相談にみえるときには認知症の症状がかなり悪化し緊急対応のケースが多く、保健師としての予防活動が見えない現状にありました。平成15年に認知症や介護者の実態調査を行った結果「早期の段階から気軽に相談できる場 介護者のための学習や相談できる場 初期の認知症の方が気軽に参加できる場 認知症になっても安心して暮らせる町づくりのための地域の協力」の4点が必要となりました。今回はこの「地域の協力」として認知症の理解と協力の呼びかけ、ボランティアグループ「あさがお協力隊」の誕生と経過を報告します。

研修の内容

平成19年3月に開催したフォーラムや広報で認知症を支えるボランティア「あさがお協力隊」(名称は区の花「あさがお」に由来)の主旨説明と会員募集をしたところ60名ほど集まりました。平成19年5月から半年ほどにわたり5回の学習会や話し合い、デイサービスやグループホーム、特養ホームなど10ヶ所の施設見学や認知症に関するイベントへの参加などさまざまな形で体験型研修を行いました。自分が地域で生活する認知症や家族だったらどのような支えがあったら安心して暮らせるかという視点で話し合いを重ねました。そして、身近なところで認知症の人の話し相手や趣味活動と一緒に行いたい、家族の気持ちを支えたい、認知症の理解を地域に広め情報を発信したい、自分の特技を生かしたいという4つの考えにまとまりました。

組織の構成と活動内容

ご本人の趣味活動と一緒に行う「サロン班」家族の支援を行う「家族会班」認知症を広く知らせる「情報班」特技を生かした「個人ボランティア班」と名前が決まり、11月から班ごとに代表者を決め、月1回ペースで定例会を開催しました。また全体の動きが見えるように、各班の代表者で構成する世話人会や各班の活動報告や認知症の学習などを行う全大会を開催しました。平成20年度に入り家族会班の活動は、旭区認知症家族の会「あさがお」として月1回の開催が定例化し、介護者同志の情報交換や、3ヶ月に1回は講師を招いての「まなびの会」を実施しています。サロン班においては認知症のご本人が趣味活動をしながら一日過ごせる場所づくりということで10月から月1回サロンを開催する予定です。情報班は、啓発活動として区役所での情報発信コーナーへのパネル展示、商店街や包括支援センターまわり、世界アルツハイマーデーでの街頭ちらし配布、あさがおの協力隊の活動を伝える機関紙を発行する予定です。個人ボランティア班は楽器演奏などの特技を生かしグループホームなどの施設で活動をしています。

今後の展開

地域包括支援センターやケアマネージャーの会、ボランティア連絡会などの各種関係団体から「活動の内容を教えて欲しい」「一緒に取り組めることが何かあれば」という横のつながりや、各メンバーの生活圏レベルで徘徊高齢者の発見協力を呼びかける動きも始まっています。今後各班の活動がさらに根付くことで認知症の早期対応や介護者の負担の軽減、関係機関と協働して、認知症になっても住みよい町づくりにつながる活動ができることを期待します。その為には活動拠点の確保や活動資金、メンバーの増強などが当面の課題としてあげられています。

活動名称	地域に根ざした多職種の間による多角的な認知症支援
活動要旨	多職種のメンバーが集い、会を設立。市全体で認知症が理解され、適切な対応が出来る優しいまちづくりを目指した活動を展開している。
応募者	認知症の人と共にくらす会“きくち” 会長 曾山 直宏
連絡先	〒861-1331 熊本県菊池市隈府 494 菊池中央病院内

(概要)

1) 菊池市の状況

熊本県北部に位置する菊池市は、高齢化率は26.5%になっており、いわゆる団塊の世代が65歳になる5年後には、超高齢者社会と言われる高齢化率30%になる勢いである。また、核家族化などによる一人暮らしや高齢者のみの世帯も増加する中、高齢者を取り巻くあらゆる問題も多様化し、特に認知症への対策は急務となっている。

2) 「認知症の人と共にくらす会“きくち”」について

医療、介護、福祉、行政などそれぞれの業務に携わる中、認知症に関する悩みが共通のものであったことに気付く。そこで、どうしたら菊池市全体で認知症が理解され、適切な対応が出来る優しいまちができるか。関係者はもとより市民が広く認知症問題に取り組み、認知症の人の尊厳の保持と見守り体制ができるまちを作りたい。そこに集まった、さまざまな職種の人たちが熱い思いで、将来の菊池市を語り始め、全員が、このような人たちとそれぞれの思いが達成できるような活動を始めたいと考えた。

そこで、最初の構想から6ヶ月、12回の会合を経て、昨年10月、本会の発足に至った。現在、医師、歯科医師、看護師、ケアマネージャー、理学療法士、作業療法士、言語療法士、栄養士、検査技師、放射線技師、保健師、包括支援センター職員、介護職、社会福祉協議会員、ソーシャルワーカー、民生員、など多職種のメンバー168名を抱える団体に成長した。

3) これまでの事業

活動推進委員会議 概ね月2回

認知症学習会や認知症講演会の開催

認知症サポーター養成講座の協力、支援。

キャラバンメイトの育成と認知症相談会を目的とした認知症アドバイザー養成研修

4) 新事業への着手

これまでの事業を継続し、下記の活動を計画する。

認知症の人と家族の会 熊本支部 菊池地区の結成

ホームページを利用した認知症相談窓口の開設

市内の児童、学生を対象とした啓発活動

認知症の人の嚆下サポートチームの立ち上げ

5) これからの家族支援活動のテーマ

認知症早期発見のための支援活動

菊池市内にある認知症専門医療機関への早期受診を推奨。

周辺症状の苦痛を軽減させるための活動

家族や地域の人たちの適切な対応を高めるために地域学習会の開催を実施する。

認知症の人の家族のサポート活動

認知症アドバイザーによる地域の公民館や空き店舗を利用した認知症相談会の開催。

活動名称	親父パーティーが地域を変える！認知症地域資源ネットワーク「NICE！藤井寺」の構築
活動要旨	「(N)認知症になっても(I)いきいき暮らせる(City)町って(E)ええやん！」を掲げ、保健所、市、社協、地域包括支援センターが事業展開。団塊の世代が「誰でも参加し、楽しめるイベント」を開催し、認知症への理解と支援の輪を展開。
応募者	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会 家田 葵（総務地域福祉係）、羽根 武志（地域包括支援センター）
連絡先	〒583-0035 大阪府藤井寺市北丘 1-2-8

（概要）

国の認知症地域資源ネットワーク構築モデル事業を受託した、大阪府藤井寺保健所、藤井寺市、藤井寺市社会福祉協議会（以下、社協）・地域包括支援センターでは、「(N)認知症になっても(I)いきいき暮らせる(City)町って(E)ええやん！」 NICE！藤井寺 をキャッチフレーズに、さまざまな事業を展開してきました。その一つとして、社協が行ってきた「親父パーティー」の取り組みは、NICE！藤井寺 の知名度をあげ、認知症の方への理解啓発をすすめる起爆剤となりました。

面積が小さく、旧村地域も多く残る藤井寺市では、地域住民同士の繋がりが強く、市全体としての行事や取り組みが当たり前のように行われています。その中で、自治会、福祉委員会、老人クラブなど様々な地域団体組織が機能し、その中で活躍する住民が多く存在することは、大きな強みです。

「親父パーティー」は、退職後第2の人生として地域に戻ってくる団塊の世代に着目し「地域の中で何が出来るか?!」というテーマのもとワークショップ形式で開催しました。地域は親父のチカラを必要としている。でも実際どんなチカラを地域は求めているのか？親父達は地域に対して何が出来るのか?!そんな事を親父だけでなくオカン(女性)も集まって考える場となりました。第2の人生においてこれを地域にどう還元するのか？これこそが親父パーティーの大きなテーマとなりました。認知症というキーワードをメンバーが意識し、さらに自分たちの認知症予防も大きな機能であると、積極的な取り組みとして発展してきました。

そこで、注目すべきは、第1回親父パーティーで結成された“親父”による『NICE！藤井寺バンド』の存在です。音楽をテーマに認知症啓発を行い、市内施設への定期コンサートや野外ライブを通してファンを獲得し、地域高齢者のスターになりました。基本精神を“音楽を楽しもう！どんな楽器でも参加OK！自分も楽しみ認知症予防をしながら認知症高齢者にも懐かしい歌を通して笑って歌ってもらおう！”と活動しています。

「親父パーティー」初企画の認知症高齢者の日帰りアウトドアは、認知症とその家族を対象としたイベントであり、普段なかなか家から出ない、また出てもデイサービスや病院など決まったところへの外出にとどまり、野外活動の機会が極端に少ないであろう方のために、認知症高齢者キャンプの実例を参考に計画しました。親父パーティーのメンバーに加え、ボランティアスタッフとして市内の専門職（ケアマネジャーや介護スタッフ）の協力もあり、大成功に終わることができました。イベントの送迎時、不安そうな顔をされていた対象者が、帰りの車内では興奮して笑顔いっぱいだったことは印象的でした。

その後、親父パーティーは新しい事にチャレンジ！これが「公園を親父が変える！」イベントです。物騒な世の中で、公園も安全とは言えない...でも大人が楽しく過ごせる公園になれば、子どもや認知症の高齢者も自然に外で楽しく過ごせるのではないかと考え、市内いろいろな地区の公園で音楽と簡単なレクリエーションを中心としたイベントを行おうじゃないかと、親父パーティーのメンバーが主催者の意識をもって、3箇所の公園での実績を残しています。

活動名称	認知症 ささえあえるまちづくり事業
活動要旨	認知症セミナーの開催、寸劇による普及啓発活動、モデル事業の取り組みなど、地域での認知症高齢者と家族を支えるしくみの基盤づくりに取り組んでいる。
応募者	津山市地域包括支援センター 大橋 慶子
連絡先	〒708-0004 岡山県津山市山北520

(概要)

平成16年度より津山市地域ケア会議の中で、認知症ケアシステムの必要性が挙げられ、津山市における認知症の取り組みについて検討が始まった。

まず、地域住民が認知症への認識を深め、病気の誤解や偏見を解消していくこと、さらに地域での認知症高齢者と家族を支えるしくみの基盤づくりを目的として、平成17年度にセミナーを開催した。市民約900人の参加があり、認知症への関心が非常に高いことがわかった。

また、先進的に認知症予防教室に取り組んでいる京都府宇治市、広島県三原市を視察し、津山市における認知症予防教室開催の検討材料にした。平成18年度はうめちゃん一座(寸劇)など普及啓発に重点をおき、平成19年度は認知症教室を地域で展開するため、モデル事業を実施した。

津山市は岡山県北東部に位置し、北は中国山地、南は中部吉備高原に接する地域で、平成17年2月に1市、3町、1村が合併し新たに「津山市」となった。人口は平成20年9月1日現在で10万9,795人、世帯数は43,799世帯。65歳以上の人口は2万6,441人、高齢化率は24.08%。(平成20年7月1日現在)

(活動の内容)

【事業名】「認知症 ささえあえるまちづくり事業」(モデル事業)

【目的】

- ・認知症になっても、安心して暮らすことのできるまちづくりを支援する。
- ・地域で見守り、支えることのできる仕組みをつくる。

【対象地域】

- ・めざせ元気!! こけないからだ講座(津山市が取り組む運動機能訓練事業。市内約90ヶ所で実施)を平成18年までに開始している。
- ・参加者人数が20名程度。
- ・本モデル事業の理解と協力が得られること。

【プログラム】

(例) B、C地区のプログラム

3つの地区でそれぞれ全7回のプログラムを実施。A地区で実施後、次のB、C地区では内容組み換えを実施。(本事業は平成19年度のみ認知症サポーター養成講座を兼ねる。)

- ・第1回 認知症の寸劇を鑑賞しよう!
- ・第2回 講話～病気の理解とかかわり方～ 問題点を整理してみよう!
- ・第3回 もし認知症になったら? 認知症になりにくい生活とは?
- ・第4回 問題点に対してどんな対応をしているか考えてみよう
レクリエーション～予防になることやってみよう!～1
- ・第5回 私たちができることを考えてみよう!
レクリエーション～予防になることやってみよう!～2
- ・第6回 私たちの地域で支えるためにはどうしたらいい?
～ 絵本を通じて理解しよう。寸劇のシナリオを考えよう～
- ・第7回 認知症の寸劇を鑑賞しよう!
座談会～私達の地域で支える為に自分達ができること～

【実施主体】津山市地域包括支援センター

活動名称	であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援「あんしんメイト」
活動要旨	家族の会から生まれたNPO法人が市と協働で行う認知症高齢者見守り支援事業にて「あんしんメイト」を開始。地域包括支援センターが窓口となり、認知症の方の性格・趣味・居住地域などを総合的に考慮した肌理細やかなコーディネートを実施。
応募者	NPO法人 認知症サポートわかやま
連絡先	〒640-8144 和歌山県和歌山市四番丁 52 ハラダビル2階

(概要)

「あんしんメイト」は、見守りが必要な認知症の人を家族が留守の時や家族が休息したい時に支援員を派遣し見守りを行う活動である。認知症高齢者と家族の精神的負担や不安を解消・軽減することを目的として和歌山市内に居住する認知症高齢者の見守り支援体制を構築するために、和歌山市とNPO法人認知症サポートわかやまが協働で行う認知症高齢者見守り支援事業として、平成18年に和歌山市より委託され3年目を迎えている。「あんしんメイト」の依頼の窓口は市内8か所の地域包括支援センターで、訪問調査のうえ市が認めた認知症高齢者の家族が利用することができる。「あんしんメイト」は、地域で共に生きる人間としての視点を理念としており、認知症の人に対しては、人間としての対等の関係を心がけている。認知症の人と支援するメイトの性格・趣味・居住地域などを総合的に考慮した派遣コーディネートを行い、家族の状況に合わせて居宅を訪問し、認知症の人とメイトの付き合いが始まる。家族の都合や場合によっては支援ルームでの支援も行っている。

「あんしんメイト」の派遣に先立って、認知症の疾患や認知症の人との接し方など、認知症の人を地域で支えるために必要な知識や技能を身につけるための「あんしんメイト養成講座」が開催され、養成講座のカリキュラムを修了した者が「あんしんメイト」として登録できる。「あんしんメイト」の活動は家庭や職場で認知症の人を介護した経験のある人が、今までの経験を活かして社会貢献できる場でもあり、認知症の人を看取り終えた家族の生きがいづくりの場ともなっている。

家族の負担軽減だけでなく、「あんしんメイト」を利用するようになって、本人の状態に良い変化がみられることも多く、認知症の本人の周辺症状が少なくなるなどの成果が表れてきている。介護保険サービスを利用している利用者のサービス担当者会議に出席することも多い。担当のケアマネージャーから他の家族に「あんしんメイト」が紹介されるケースも増えている。

また、認知症高齢者見守り支援事業では「あんしんメイト」の派遣と並行して毎月認知症の人と介護する家族を対象に、グループカウンセリングのかたちで「ピアカウンセリングのつどい」を行い、手作りの食事を提供し家庭的な雰囲気の中で、本人グループと家族グループが何でも話せる場所を提供し、精神的な負担や不安を解消させ前向きな気持ちを持てるよう支援している。併せて、認知症サポートわかやまでは「わかやま認知症なんでも電話相談」を受け付けており、随時家族の個別の相談にも応じている。

メイト達は、本人や家族の様子に一喜一憂しつつも、よりよい支援を目指し毎月のミーティングと学習会を重ね、試行錯誤しながら着実にスキルアップしてきている。

「あんしんメイト」の活動は県内外からも注目されており、介護家族や関係機関から、問い合わせ・希望が多く寄せられていることから認知症の人が地域で安心して暮らせる社会への支援として、行政と協働した力強い町づくりキャンペーンといえよう。

サロンの掲示板には研修会など県内外の催しの案内を掲示している。常に新しい情報を提供して、メイトが関心のある催しに参加し、個々に研鑽できるように支援している。サロンでは、認知症関連の書籍の貸し出しも行っており、ビデオ・DVDを鑑賞することもできる。また、毎月介護家族の相談交流会の「つどい」が開催され、また毎月一般市民を対象に「認知症サポーター養成講座」を開催しており、キャラバンメイトの資格を持つメイトやスタッフが交代で講師を務めている。

活動名称	地域のよさを見直し、地域を生かすケアの実践
活動要旨	社会福祉協議会が核となり、地域の団体や住民と協力しながら、モデル地区を設定し町づくりプログラムに取り組む。認知症支援の充実、高齢者全般の支援として広がりをみせている。
応募者	社会福祉法人 久万高原町社会福祉協議会 菅 将朝
連絡先	〒791-1201 愛媛県上浮穴郡久万高原町久万 45-2

(概要)

活動の概要

誰もが、認知症になっても、障害をもっても、『住み慣れた地域で安心して暮らし続けたい』と願うものではないでしょうか。しかし、現在のおかれている状況といえば、地域間の関係性が疎遠・希薄な状態にあり、まだまだノーマライゼーション理念の実現に至っていないのが現実であります。そしてこれらは、地域全体で取り組むべき課題でもあると考え、今回、久万高原町社会福祉協議会が中核となり、多機関・団体と協力しながら、モデル地区（久万高原町露峰地区）を設定して地域づくりに取り組んだ結果、認知症支援の充実のみならず、その枠のみにとらわれない広がりをみせ、地域の高齢者全般の支援として、地域が必要を実感し、地域をあげて『住み慣れた地域で安心して暮らし続けるために』を、実現化させた一つの取り組みです。

活動の経緯

久万高原町露峰地域においては、地域の高齢者見守り活動や、地域ボランティア活動団体として、平成2年度に露峰愛和会ボランティアグループ（現在の会員数：22名）が結成され、地域に即したボランティア活動をこれまで実践されてきました。平成19年1月には、地域の公民館を拠点として高齢者向けのふれあいサロンを設立しましたが、設立をして間もなく、閉じこもりがちな高齢者や、認知症のかた、障害者などの参加が全くない状況下にありました。当時のふれあいサロン形態は、ボランティアスタッフであり、サロン参加者にしかありませんでした。ボランティアスタッフからも、認知症の方や、閉じこもりがちな高齢者の参加をどのようにすればよいか、スタッフ関係者の中では議論の途中にありました。

久万高原町社会福祉協議会では、平成19年9月に、久万高原町露峰地域をモデル地区と設定し、認知症や高齢者、障害者の方などが、『住み慣れた地域で安心して暮らせるような地域づくり』を行うことを目標として、同時に、これらの活動からふれあいサロンの充実も願い、露峰愛和会ボランティアグループ・露峰地域の住民の皆さんと共に、重点的な関わりを持つようになりました。

活動を通して

はじめは、地域の認知症の方の支援や障害者の支援のために、自分たちが何かをしていく必要があるという認識のみでありましたが、『私たちも住み慣れた地域で暮らし続けたい』という思いに変わってきたことが何より印象的でした。自分たちも認知症になることもあり、また障害を持つこともあります。こうした事を実感され、何ら認知症や障害といったものが、特別なことではなく、自分たち自身の問題であるということに気づき、地域をあげて積極的な実施につながったのです。

具体的には、ワークショップから、地域のよいところ（法蓮寺の開花期しだれ桜）をもう一度みつめ直し、そこで、地域の特産品や加工品をボランティアで作り出し、売上金の一部は、地域ふれあいサロンの財源にするという取り組みが見られたり、地域でアルミカンや古新聞、ダンボールなどを回収し、それによって得た収入を、地域ふれあいサロンの財源にあてるなど、地域をあげて、地域を生かしたケアの展開が図られました。

こうした取り組みにより、安定したサロン財源の確保が図られる事となり、地域の高齢者や、認知症のかた、障害者の方に安定した支援が図られる事となりました。また、ワークショップから、声かけの問題点なども発見することができ、認知症や障害者の方の、地域ふれあいサロン参加者が増えて行く事にもつながった活動です。

活動名称	認知症 予防と介護と支えあい～認知症にやさしい地域づくりを目指す～
活動要旨	支えあえる地域づくりを目指して、情報紙発行、講演会、学習会、独居高齢者傾聴訪問、料理教室などを実施。
応募者	「白い箱の会」 松尾 千賀子
連絡先	〒176-0025 東京都練馬区中村南 1-22-8-605

(概要)

「白い箱の会」では、認知症及び認知症の予防や介護への正しい知識と理解を住民の一人ひとりから深め、自ら予防を行うだけでなく、地域で世代間を越えて支えあい、認知症になってもその人らしく生きていける地域づくりを目指しています。

1) 練馬区内にある薬師堂診療所を母体とした高齢者施設(6ヶ所・4地域)における、週1回の定期的活動。

認知症の予防と遅延をベースに、傾聴を中心とした脳(心)の活性化を目指したプログラムを組み、各施設の特性に従って活動。

場所：療養型病床・グループホーム(2)・デイサービス(2)・小規模多機能ホーム

2) 情報紙『私の忘れもの』毎月1回発行(A4サイズ1枚)毎回1000部発行

認知症及び認知症の予防と介護を中心に、地域住民が認知症に対する正しい知識と理解を深めることが出来るよう、毎月定期的に発行。

配布先：活動施設及び高齢者の家族・活動施設周辺住民宅へのポスティング・商店街・学校・福祉施設・美術館・図書館・地区区民館等。9月にはハガキにて読者アンケートを実施。

3) 講演会の開催 ～認知症にやさしい地域づくり推進講座～(年2回)

人々の、認知症や地域づくり等に関する知識や理解、意識の深まりと啓発を目指す。

第1回：2007年9月「傾聴・共に学ぶ」講師 中辻萬治

第2回：2007年11月「学ぼう・共に支えあう事」講師 明星マサ

第3回：2008年9月「生きること 老いること」講師 横山紘一

第4回：2009年2月「生かそう・地域とあなたの底力！」講師 青戸 泰子

4) 「脳に良い料理講座」の開催(年2回)

理論と実践を学びながら、地域住民の認知症に関する啓発と交流を目指す。

第1回：2008年6月「脳に良い料理講座・お菓子編」人參クッキーとおからケーキ

第2回：2008年11月「脳に良い料理・おかず編」魚と野菜を作って

講師：お話 可野倫子 実習 苗木久子

5) 世代間交流(高校生徒と教師・グループホーム入居者・家族・施設スタッフ・ボランティア)

高校生が、会員と共にボランティア活動をする中で、高齢者や認知症について理解を深めていく手助けをする。認知症に関する正しい知識と理解は、若いうちから感性を磨いていくことが望ましい。高校の文化祭に高齢者・ボランティア・家族が招かれた時は、世代間や立場を越えての交流が実現。認知症になっても、地域で支えあっていく上での基盤づくりの一つとなっている。

6) 独居高齢者宅への傾聴訪問(週1回1時間 ボランティア2名一組で訪問)

独居高齢者は、孤独感や不安感、心身の不都合から家に閉じこもりがちになり、認知症を発症し易い状況となる。定期的に傾聴訪問をすることで、精神的不安の緩和及び認知症の発症や進行を遅らせ、心身の活性化を目指していく。また、地域住民との交流のきっかけを作る。

7) 地域での学習会や懇談会の開催(年3回程度)

地域住民を中心に、認知症に関わる様々な事柄を共に学び、考え話し合っ、認知症への正しい知識と理解を深めながら、互いに支えあっていける関係作りや地域づくりを目指す。

活動名称	認知症を学び、知り、理解する ・認知症サポーター養成講座を周辺地域の町会を主に町内会館で開催 ・千葉メモリーウォークに参加 ・認知症の人やその家族との交流や懇親会
活動要旨	認知症はだれもがかかりうる病気のひとつであるという認識を地域の多くの方々に理解していただくべく、様々な活動に取り組んでいる。
応募者	社会福祉法人 三育ライフ シャローム若葉（地域包括支援センター「千葉市あんしんケアセンターシャローム若葉」、グループホーム「虹の家」、認知症対応型通所介護「ひばり」） シャローム若葉 認知症対応型通所介護 施設長 砂長谷 和子
連絡先	〒264-0028 千葉県千葉市若葉区桜木 5-15-1

（概要）

《はじめに》

法人において、3ヶ所の地域でのグループホーム運営、千葉市内では認知症対応型デイサービスを運営、本体としての特別養護老人ホームの他、在宅高齢者に向けた介護保険事業や障害者サービス事業を展開しております。認知症になっても不安を感じる事のない安心した生活や住み慣れた地域での継続した暮らしは国民みんなの願いであります。

《活動内容》

認知症を学び、知り、理解する

- ・認知症サポーター養成講座を周辺地域の町会を主に町内会館で開催。
- ・千葉メモリーウォークに参加。
- ・認知症の人やその家族との交流や懇親会。

《活動日程とその内容》

認知症メモリーウォークに参加。

平成20年10月13日、千葉県庁前にて“広げよう「認知症でも安心な千葉に」”をテーマに第二回認知症メモリーウォーク・千葉に参加。当施設からは3人、全体では347人が参加しました。認知症の人とその家族も施設従事者も一般方も市内中央通り1.5キロ口行進しました。

認知症の人やその家族との交流や懇親会(平成20年6月17日、18日11時50分～14時)

- (1) 認知症対応型デイサービス「ひばり」の利用者の家族に呼びかけ、デイサービス利用中の様子をみていただき、自宅とどう違うのか、家族同士の交流を行い、明日からの介護に役立てていく。介護職にとっても、家族にとっても良い交流となった。
- (2) グループホーム「虹の家」の敬老会に合わせ、家族交流会開催しました。

認知症サポーター養成講座の開催。(平成20年11月15日午前10時、14時)

第1弾 貝塚北部自治会と北小倉町内会に話をもちかけ、協力をお願いし、回覧形式で参加者を募ります。町内会長さんや役員さんと打合せをさせていただきますといていねいな呼びかけ文をあらたに作成され回覧しています。千葉市民の問い合わせもあり、一般市民を対象とした認知症サポーター養成講座の開催も今後の課題となった。協力いただく町内・自治会の理解をいただき、一般の方も参加できます。

活動名称	認知症高齢者 就労支援デイの試み
活動要旨	東京都認知症支援拠点モデル事業の一環としてグループホームが取り組む「就労支援デイ」では、認知症高齢者のできることを個別に発掘し、できることを仕事として行うデイサービスを実施。事業化への課題を踏まえ、実績づくりが行われている。
応募者	社会福祉法人 創隣会 グループホームきずな
連絡先	〒191-0062 東京都日野市多摩平 3-5-21

(概要)

グループホームきずなは、東京都日野市にあり、中央線豊田駅から徒歩10分の場所にある。豊田駅から北に向かって進む大通りを行くと、駅前の商店街を抜け、左右に多摩平団地を見ながら進み、第一公園や日野市立病院の反対側に広がる閑静な住宅街の中に立地する。一方で近隣には、日野自動車やコニカミノルタなどの工場もある。日野市の人口は172,657人(平成20年1月現在)で、うち65歳以上は33,586人。高齢化率は19.45%で東京都全体とほぼ同水準である。このモデル事業の計画当初、きずな周辺地域(在宅介護支援センターあいりん担当地域)の高齢化率は24.11%(平成19年1月1日)で、市内を8分割した在宅介護支援センター中、最も高い高齢化率である。平成20年1月現在、高齢化率24.91%で上昇傾向である。

(活動の内容)

グループホームきずな 就労支援デイは、東京都認知症支援拠点モデル事業の一環として取り組んでいる。目的は、認知症高齢者のできることを個別に発掘し、できることを仕事として行っていただくようなデイサービスを実験的な試みとして行う。また、一般のデイサービスになじみにくい方へのアプローチとしても検証を行う。内容は、作業を通して生活環境の拡大を図りQOLの向上を企図する。介護保険サービスで実施が困難な利用者個々の潜在能力を引き出せる作業を行いその対価を提供する。認知症であっても、社会の一員として生活していることを実感できる場所や、環境の提供を目的に実施する。それは、認知症高齢者の居場所や、役割の創出につながると思う。

平成19年8月より実験的にいき、月に2回のペースで開催している。平成20年7月からは、毎週1回の開催に増加し、利用者を拡大して行っている。報酬は作業後に昼食を提供する。利用者によっては嗜好品などの場合もある。平成20年5月からは、日野ケアマネ協議会の協力を得て、対象地域をきずな周辺地域から全市を対象に送迎可能な範囲で利用者の拡大を図る。また、男性利用者だけでなく、女性の利用者も作業を行うようになる。平成20年7月より、毎週開催となり、現在男性6名、女性4名で実施している。毎週開催と人数の増加で、当初8名を目標定員としてきたが、現在は10名の利用者があり、さらに数件の問い合わせもある状況である。

活動の中でまず、働くこと、作業をすることに対し、ご本人が前向きな意思があることを重視している。上げ膳据え膳ではなく、主体的な意識で行える環境を設定し、提供している。また、本人の役割や居場所や働くことに対する目的、生きがいややりがいもそれぞれで違うので、極力個別に対応し、創造していくことを心がけている。提供者だけでなく、利用者と共に築き、それらを満たす環境づくりを模索している。作業を通して、同じ喜びや苦しみをもつ人との交流と、人の役に立つ、自分自身のためになるという、社会とのつながりを感じてもらうことを心がけている。

(今後の展望)

取り組む中で、評価と期待の大きさを感じている。生きがいややりがいは本人の価値観であり、就労支援デイが本人や家族の生活に与える影響はさまざまである。現在この取り組みはモデル事業として行われているが、介護保険サービスを含めた事業化には課題もある。個別性を追求すれば顧客満足度は上昇するが、コストも上昇する。人件費、材料費や報酬の捻出など運営面の問題は多い。利用者からの安易な料金徴収は、仕事=報酬という根幹部分が揺らぐ可能性もある。大切なことは、住み慣れた地域社会の中で貢献できる場所を見つけることである。取り組みで見えてきたことや、課題などを踏まえ今後も実績をつくり、よりよい取り組みとなるよう努めていきたい。

活動名称	若年認知症支援の会「愛都の会」の活動
活動要旨	若年認知症を支援するボランティア組織。本人が生きがいを持って暮らし、社会の一員として参加できるよう本人や家族を支援。サポーターも、人生の先輩である本人、家族と接して活力を得ている。
応募者	若年認知症支援の会「愛都の会」 杉原 久仁子
連絡先	〒537-0024 大阪府大阪市東成区東小橋 1-1-6

(概要)

愛都の会(以下、会とする)は、若年認知症を支援するボランティア組織として、2005年2月に大阪で結成された。当時、若年認知症という言葉にまだなじみが薄く、「若年でも認知症になるの?」という声が福祉関係者からも、聞かれた。一方、若年認知症の本人と家族は制度の狭間におかれ、高齢の認知症の人と比べて違う問題を抱えており、状況は深刻であった。

会の目的は、「若年認知症のある人の安息と交流、および社会参加活動を支援し、心豊かな生活の維持を共有していくこと、併せて、家族への援助を行ない、若年認知症の専門的な治療と福祉の充実を図るための活動を行なうこと」とし、1組の若年認知症の夫婦、16名のボランティアからなるサポーターの集まりから活動は始まった。スタート時のサポーターは、作業療法士が中心であったが、その後、ケアマネジャー、介護福祉士、看護師、社会福祉士、精神保健福祉士などさまざまな職種がそれぞれの視点で会に加わっている。

会員登録は、毎年1月で更新の申請が必要となり、その段階で会員数はいったん白紙としているが、発足以来、毎年会員を増員しながら現在に至っている。2008年9月現在の会員は、本人、家族、サポーター合わせて112名である。その他に顧問4名からなる。これ以外に会員登録をせずに、可能な時にものみ参加する(本人、家族、サポーターなどの)非会員を含めると1年につき総勢200名余となる。

活動の基本は、月1回の定例会である。定例会は、大阪府内で行い、大阪府や近隣県から、毎回50名の若年認知症の本人、家族、サポーターが参加している。

ボランティア団体として財政基盤も弱い状況ではあるが、定例会以外にも本人、家族からの相談、会報の発行、研修の開催などに取り組んでいる。

会では月に1回(第2日曜)を定例の活動日としており、その内容は奇数月の定例会(概ね午後1時から4時まで)と偶数月は合同交流会(本人・家族・サポーターによる外出行事)に分かれている。定例会は、大阪府内の公的施設や介護サービスの事業所を会場として、関西一円から約50名が参加している。また会の設立記念日でもある2月11日には総会・講演会を行っている。

(活動の成果と今後の活動)

ボランティアでのメリット

ボランティアは、本人の状況や希望に応じ臨機応変に対応することが可能であり、支援者でありながら同じ視点でその活動を楽しみ、必要に応じた支援を展開できるメリットがある。このように、愛都の会では、本人と同じ視点を持ち活動のできるボランティアを中心として活動を行っている。

今後の展望

1. 定例会と合同交流会の充実をはかる。
2. 若年認知症のことを社会に広く訴え、各団体と協力していく。
3. 助成金を活用する。
4. 若年認知症に関する研修、研究を行なう。
5. 会報の発行、事務局体制の拡充など会としての機能を高める。

活動名称	認知症にならないための活動
活動要旨	校区住民の認知症問題の関心と理解を深めてもらうための講演会を開催し、同時に実施するテストでMCIの早期発見に努め、認知症への移行を防ぐ活動を校区が一体となって支える取り組みを行っている。
応募者	藤松まちづくり協議会 会長 宮原 深海
連絡先	〒800-0044 福岡県北九州市門司区上藤松 2-3-31

(概要)**(1) 地域の紹介**

藤松校区は本州と九州を結ぶ交通の要衝である北九州市門司区の西南端に位置している。2,700世帯、人口6,030人、高齢化率28.9%(H20年3月現在)。特徴としては、少子高齢化が顕著で、校区内にスーパー・コンビニはなく、金融機関は郵便局のみである。また、公立の保育園・小・中・高校があり、元気なまちにするため、まちづくり事業・活動を活発に取り組んでいる校区という特徴があげられる。

(2) 活動内容**意義**

地域でH18年度から取り組みを始めた「健康づくり事業」の一環として、健康に関するアンケートを実施した。そのアンケートで、約6割の高齢者が『物忘れの心配がある』と答えた。また、地域の高齢化率が高いことや独居高齢者が多いことなど地域の実状を勘案し、「認知症問題は避けて通れない喫緊の課題である」との認識に立ち、認知症予防に取り組むこととした。

目的

- 1) 校区住民の認知症予防に対する意識を高める。
- 2) 高齢者が認知症を予防し、活動年齢(地域活動に参加できる期間)をのばす。
- 3) 認知症予防を通して「まちづくり」を行う。

対策

認知症予防の取り組みにあたって「認知症予防対策班」を立ち上げ、認知症予防の大切さを徹底してPRした。また、福岡大学医学部神経科学教授 山田達夫氏の「認知症予防講演会」を9回開催し、校区の高齢者300人の参加が得られた。(講演会はテストの関係上、1回につき30~40人とした。)講演会終了後ファイブコグテストを実施し、MCI(軽度認知障害)や認知症の人を早期発見することができた。MCIの人は認知症予防活動へ、また、認知症の人は必要な関係機関につなげることができた。

(3) 対策の効果

早期に発見したMCIの人たちを地域で予防するために、認知症予防活動に取り組むことにしたが、その際、一般公募をして誰がMCIの人たちであるかが地域住民にわからないように配慮した。(予防活動はH20年4月から週1回のペースで実施)

認知症予防活動を支援するファシリテーターを、地域の中から8人募り、ファシリテーター養成研修に参加した後、予防活動を支援することにした。

一般公募とMCIの人を含めて23名の希望者が集まり、3グループに分けて現在活動中。認知症予防活動は時間の経過とともに見られなかった笑顔も見え、仲間同士の交流もでき、徐々に明るい雰囲気の中で自主的な活動が見られるようになった。

(4) 今後の展望

認知症予防活動をしている人の評価は、半年毎にファイブコグテストを実施し、活動の結果を客観的に見ていくことにしている。

現在の活動の結果を評価しつつ継続するとともに、更なる効果的な活動に取り組む。

この認知症予防活動の目的である「健康づくり」「仲間づくり」を通して、地域として認知症が予防できる「まちづくり」ができるよう持続可能な取り組みを進める。

活動名称	回想法の取り組み
活動要旨	在宅・施設の職員研修にて回想法をテーマに認知症ケア研修を実施。大学院生チームや地域の協力を得て、回想法を実際に活用。地域住民に向けた普及啓発にも取り組んでいる。
応募者	関西医大滝井病院認知症疾患医療センター 鈴木 美佐
連絡先	〒570-8507 大阪府守口市文園町 10-15

(概要)

大阪府下では老人性認知症センターが二次医療圏ごとに設置されており、北河内圏域では、関西医大滝井病院が担当している。圏域内には4保健所があり、守口市と門真市を守口保健所が担当している。これまで保健所や市町村と協力し合い認知症ケアに関するスキルアップの研修が展開されてきたが、今回は回想法に取り組んだことを御紹介したいと思う。それは、専門職への研修から研修を受けた専門職が、自分たちのフィールドに持ち帰り、利用者(対象者)と取り組みそこに地域の協力を得て地域住民への認知症理解を求め地域住民自身の認知症予防のための回想法体験へとつながっていった取り組みである。

(地域の紹介)

関西医大滝井病院が圏域とする7市(守口市、門真市、四条畷市、大東市、寝屋川市、枚方市、交野市)にあって守口市と門真市はそれぞれ人口13万人程度の市である。古くはレンコン畑の広がる農村であったが、大きな電気産業の城下町として町工場の多い地域となった。現在はひとり暮らし高齢者が多く、守口市は大阪府でも徘徊して保護される人が多い市でもある。介護保険は守口市、門真市、四条畷市でくすのき広域連合を形成している。大阪府の事業を受けて、平成19年度から守口保健所認知症地域資源ネットワーク構築事業を行っている。

(活動の成果と今後の展望)

これまで認知症に関する研修は取り組まれてきたが、今回の成果は、回想法を軸に、地域のさまざまな専門職が手を携えたこと認知症になった人もなっていない人も回想法という同じツールに取り組むことができたことにある。

新しい制度や相談機関(そこに設置される専門職)を作り出せば、それは目新しく目立つ取り組みになるが、新しいその取り組みしか出来ないものになるかもしれない。しかし、既存の社会資源が共有しあえる部分で協力しあうと、そのバリエーションは大変大きいものとなる。歴史資料館に認知症理解を求め、認知症の人のためだけの協力を求めることは、歴史資料館の役割と合致しないが、学芸員の北河内の昭和の生活に関する知識、資料館という皆が集えるスペース、歴史資料館まで行くことができない認知症高齢者への展示物・収蔵物の貸し出しそれぞれは回想法を展開する際に大きな支援となった。

また、これまでの介護予防講座などでは、認知症になってしまった人をどう支援するのか、認知症になっていない私はどう予防できるのかと区別があったように思う。しかし、回想法に取り組むことで、認知症になってもこの町での思い出を大切に生きていける、認知症という病気をこの町で予防する為に町の施設を使っていくことができるとりくみとなった。

現在はまだ、市民向けの予防的取り組みは1回体験型であり、多くある介護保険事業所でも取り組んでみたい事業所はすくない状態なので、今後も進めて行きたいと考える。

活動名称	子供は、みんなで守っていかないといけないんだ。 ～安全パトロール。継続は力なり～
活動要旨	入居者の方々の地域の子供たちを思う言葉をきっかけに、小学校の子供安全見守り隊に参加。地域とのコミュニケーションが生まれ、入居者の方々にも笑顔になる。
応募者	NPO 法人 たんぼぼの会 グループホーム やすらぎのさと 片木谷 真弓
連絡先	〒598-0036 大阪府泉佐野市南中岡本 60 番地

(概要)

NPO法人たんぼぼの会は、住み慣れた地域で、より快適に暮らしたいという思いをわがこととして感じ、喜びを共有したいと考える人の集まった法人です。平成11年より設立以来様々な課題にぶつかってきました。なかでも認知症をもたれた方への支援です。24時間体制の支援を考え平成16年に民家を改装したグループホームやすらぎのさとが開設されました。開設に当たり地域の住民に受け入れてもらう為に、数回の説明会を開きました。そして、地域密着創りの為に地元の方優先に職員になっていただきました。地元の職員の声グループホームやすらぎのさとの地域密着に貢献してくれました。今では、地域の方より農作物をいただいたり、旅行のお土産をいただいたりと有り難く町内で過ごさせていただいています。

近年子供を狙う犯罪が増えてきました。町内では、子供安全見守り隊の腕章と旗をもたれたボランティアの方の姿を学校の登下校時刻によく見かけるようになりました。そんな方たちの姿を見ては、地域の安全を願う方々の気持ちが暖かく感じ、その町内の住民として過ごす事の有り難さをひしひしと感じています。

ある日、リビングでテレビを見ていると子供が狙われた悪質な事件がニュースで取り上げられていました。入居者の方々がいつものように内容について色々な感情を発していました。

『可愛そうにえー、誰がそんなえげつない事をするんじょ』

『ほんとほんと、こわいわねえー』

そして、昔保母さんをされていた入居者の方が、

『今は、核家族が増えていってるとしよー、共働きの家も多いから、近所の皆が守っていかないといけないと私は思うんですよ。』

その言葉から、いつも暖かくやすらぎのさとを支えていただいている町内の方々に自分たちが出来る子供安全見守り隊の仲間入りをしようと考えました。

地域の小学校に出向き子供安全見守り隊の参加の意向を伝えると腕章と旗とステッカーをいただきました。早速次の日より腕章をつけての見守り隊を開始しました。

『わあー、こりゃーしっかりせーなあかんなあ』

と入居者の方の外出に対する笑顔と意欲が増えました。まずは、道ですれ違う方々には、だれにでもこちらの方から元気よく『おはようございます』『こんにちは』の挨拶をしました。下校時の子供たちには『おかえりなさい』と、公園で会う幼児とは一緒に遊んだり体操をしたりしました。

今では、地域の方から挨拶をして頂いたり衣類や紙オムツを頂いたり下校時の子供の方からも気軽に声をかけて頂いたり、離設行為時には、助けていただいたり入居者の方のお顔を覚えてくれるようになりました。

ここ1年数ヶ月やすらぎのさとでは、入居者の方の入れ代わりはありません。毎年夏になると必ず入院していたという方もやすらぎのさとに来て入院せずに元気で暮らしています。ご家族の方より『家で居る時より元気になった』家で居る時はきつい顔やったのに最近は神の顔になってきた』というお言葉もいただきます。

毎日の見守り隊での日光浴及び自分たちで守りたいと思う力のおかげでしょうか。

活動名称	あそびながらリハビリテーション～身体機能・認知機能の活性化を図る～
活動要旨	介護予防等在宅支援モデル事業として『あそびReパーク』を実施。頭と体を両方使いながら、あそびを取り入れたリハビリテーションを行っている。
応募者	社会福祉法人 芦北町社会福祉協議会 予防推進課「あそびRe(り)パーク」 主任 理学療法士 川畑 智
連絡先	〒869-5303 熊本県葦北郡芦北町小田浦 1614-1

(概要)

熊本県芦北町は、総人口20,991人、高齢者数7,132人、高齢化率33.4%(平成20年6月末現在)の「超高齢社会の地域」です。また、「水俣病」の被害地域でもある為、介護予防等の観点から水俣病患者を含む一般・特定高齢者施策を講じるニーズが高く、平成18年より運動機能や認知機能の維持・改善に効果的なリハビリテーション手法等の開発を目的とした環境省国立水俣病総合研究センターの介護予防等在宅支援モデル事業を芦北町社会福祉協議会が受託し『あそびRe(り)パーク』として実施し、年間約7,200名のご利用を頂いています。

自然に身体を動かす(あそびリテーション部門)

リハビリ用に開発されたリハビリテイメントマシン(ナムコ社製)を用いてあそびながら自然に・積極的に・繰り返し運動することをねらっています。全て体感ゲームであるため運動が苦手な方でも本能のまま自発的に取り組んで頂いています。

歩数計配布とホームプログラム(じょぶんか!カラダ部門)

約300名に協力していただき、歩数・走行数が時間ごとに自動的に記録・グラフ化される歩数計(コナミ社製)を配布しています。これにより、日内運動量と関節痠痛の関係だけでなく、覚醒や睡眠、夜間排尿の時間が分かる様になり、より個別的な指導が可能となりました。また、運動用のゴムチューブとイラスト入りの運動表も併せて配布。自宅で行って頂き、次回の利用時に提出して頂いています。

読み・書き・計算・図形の課題(じょぶんか!アタマ部門)

施設内、または自宅内において、気軽に誰でも挑戦できる「読み・書き・計算・図形」に関する世界各国の認知症予防のゲーム、またはオリジナルのゲームに取り組んで頂いています。

介護予防講話(各種研修・講話部門)

早期発見のポイント、早期アプローチの必要性、自宅でできる認知症予防、認知症の中核症状・周辺症状、認知症と間違いやすい疾患など認知症に関する講話のみならず、身体機能に関する講話(転倒骨折予防、自宅でできるトレーニング、3分間ストレッチング)についてもスクリーンにイラストやグラフを映し出し、理学療法士が実技を入れながら指導しています。これらの講話は、施設内だけでなく地域や近隣市町、県外にも範囲を広げ、この部門だけで平成18年度は2,433名、平成19年度は3,364名のご参加を頂きました。

園芸療法(うまか!ハタケ部門)

施設内の花壇や畑を利用して、季節の花や野菜を育てています。季節を五感で感じながら育てる楽しみや収穫の喜びを共有するだけでなく、認知症予防、閉じこもり予防、骨粗鬆症予防、栄養改善をねらいながら行っています。

音楽療法(音 リラックス部門)

昔懐かしい音楽をハーモニカやトーンチャイム、打楽器などを用いて演奏・合唱することで認知症予防・呼吸機能向上を図っています。人生で初めて楽器に触れる方、楽譜が読めない方にも楽しんで頂けるように、音符を数字に、拍子を距離的間隔に置き換えて工夫しながら行っています。

活動名称	地域住民とともに行う認知症予防活動の実践
活動要旨	認知症予防啓発を目的に高齢者に対し、民生委員・自治区会役員を介して呼びかけを行い、認知症サポーター養成講座とシンポジウムを実施。予防啓発活動を通じて、独居、高齢世帯を地域で支え合う町づくりへとつなげている。
応募者	社会福祉法人 ふらて福祉会 西野 恵子
連絡先	〒 805-0033 福岡県北九州市八幡東区山路松尾町 13-25

(概要)

高齢社会の進展に伴う施策として、身体機能障害への様々な働きかけは行われていますが、認知機能障害に対しての具体的な施策は、極めて少ない状況です。新しいワクチン等が開発されその効果も期待されていますが、未だ使用には至っておらず、現時点では軽度の段階で発見し、脳の機能をしっかり使って働かせ(考えながら手先を使って何かを作る、計画する、運動するなど)脳神経のネットワークをより強化することで、脳の機能低下を予防することが重要であろうと思われます。しかし認知症予防への介入の重要性が強く注目されているものの、その社会的な拡がりや継続性を意識しながらの取り組みは少ないのではないかと考えられます。

そこで当法人では地域に居住する65歳以上の高齢者に対し、民生委員・自治区会役員を介して呼びかけを行い、認知症サポーター養成講座と、「元気に歳を重ねるために」をテーマにシンポジウムを実施。その際行ったアンケートの結果から、「物忘れや足腰の衰えに不安がある」「元気に年をとるための活動に関心がある」といった意向を確認することができました。

その結果を受け、地域の方が行きなれた神社の集会所で、半年の間に3回、認知症予防啓発のための講演とファイブコグテストによるスクリーニングを実施しました。ファイブコグテスト及びその後の2次検査でMCI(軽度認知障害・認知症の前駆的症状)及びAD(アルツハイマー)と評価された13人を対象に、認知症予防教室を実施しました。MCI・ADと評価された方と、認知症のない地域の有志、それにオブザーバーとして民生委員や自治区会役員を加え、15人前後の小グループを2つ作り、各グループ週1回・1回4～5時間、法人内のログハウスを拠点に活動を行っています。

地域に根付いた認知症予防教室となるために、地域の方々が共に参加している特定非営利法人(NPO)が主催し、医療法人・社会福祉法人・大学が活動を支え、地域住民とともに進めていける仕組みを構築しました。また活動内容の充実と継続性・社会性を高めるために、NPO内にプログラム委員会・評価委員会を構成し、様々な意見やコンテンツの集積を行っています。

具体的な活動内容は、ログハウス到着後、脳リハビリのプリント。簡単なストレッチや転倒予防体操やウォーキング。活動内容についてのミーティング。昼食後は、脳機能活性のために開発されたテレビゲーム。午後からは、アクティビティ活動(陶芸・押し花・水彩など)最後に本日のまとめや連絡伝達。当日の活動風景の写真をお渡しする。帰宅後に各々、振り返りノートに活動の記録や感想を書いたり、写真を貼ったりしてまとめる。

上記のような活動を通し参加者の方々からは、「認知症を予防するために、積極的に活動に参加しようという意欲がわいている。」「色々な活動を通し、『自分にもこんなことができるんだ』と、新しい自分の可能性を発見し、自信がついた。」といった声をいただき、参加者自身の意欲の向上は、何物にも変えがたいものだと感じています。さらにアクティビティ活動を行っているときの脳血流の状態を光トポグラフィーで測定し、活動の有効性や個別性などを検証も行き、活動開始から半年を目安に認知機能の評価の予定を組むなど、医学的・客観的評価による検証も行っています。

この活動を通して、有志として参加していただいている民生委員や自治区会の方々との連携もより強まり、地域の認知症の方についての相談などが今まで以上にスムーズに行われるようになったことも大きな活動成果だと感じています。今後もこのような社会的な拡がりをもった認知症予防活動を通し、独居・高齢世帯を地域で支え合うような町づくりに取り組みたいと思っています。

活動名称	学習の継続と3本柱
活動要旨	区のバックアップのもと、認知症サポーターの会を発足。サポーターとして何か活動したいという思いから、啓発、予防、支えの3本柱の活動に取り組んでいる。
応募者	認知症サポーターの会“かなざわささえ隊” 小沢 昌子
連絡先	〒236-0005 神奈川県横浜市金沢区並木 3-3-6-306

(概要)

“かなざわささえ隊”発足のきっかけと概要

平成17年、横浜市主催の第1回認知症サポーター養成講座を受講した約30余名の横浜市民が、各区に分かれ認知症サポーターとしての活動を開始しました。金沢区役所サービス課に、何か良い活動の場はないものかと相談し、区と協働で検討会を行いました。検討会は平成19年4月から9月まで6回実施、地域包括支援センターの専門職や八森 淳医師にも参加していただき助言をいただきました。区担当職員と認知症サポーターとで、活発に活動中の区に見学(勉強)に行き情報収集、情報交換、認知症サポーターとしてのそれぞれの思いを語り合い共有し、会則の検討など実務的な準備期間を経て、平成19年11月、金沢区のバックアップのもとに、認知症サポーターの会“かなざわささえ隊”が発足しました。

会の名前である“かなざわささえ隊”は、認知症の方やご家族の心の支えや身近な地域で支え合おうという意味と、“隊(たい)”とは、寝たい!食べたい!何かしたい!何が出来るか?何をしたら良いか?わからないけれど、何かしたい!と言う願いの意味が込められています。会員は、会の目的に賛同し、認知症サポーター養成講座を受講した方(入会後に受講でも可)で、9月30日現在、90名余の会員で構成されているボランティアグループです。

活動の3本柱

“かなざわささえ隊”は、認知症を正しく理解する為に定期的に学び、その知識を少しでも多くの人に広める「啓発」活動、認知症の本人やその家族に共感し、沢山の情報を提供する「支え」、区や地域包括センター等と協働で実施している地域型認知症予防教室での見守り、認知症予防自主グループの運営等の協力を行う「予防」の3本柱で活動中です。

「啓発」「支え」「予防」のどれもが「認知症になっても安心して暮らせる街、金沢区」を目指す為には、不可欠と考えています。「呆け 痴呆 認知症」と時代の流れと共に変化した言葉は知っているものの、実際に認知症とはどう言うものなのか?と言う初歩的な理解をする為に、認知症がどんな病気であるか?を知り、早期発見が最も大切である!と呼びかける一方、既に認知症の家族を抱え、周囲に認知症が理解されていない事により、家の中に閉じ込め、家族も介護疲れで悶々とした日々を送っている現状もあります。

高齢化社会になり85歳以上は4人に1人が認知症になる可能性があると言われ、また若年性認知症も増えつつあるなかで、テレビや新聞等でも認知症を取り上げる機会も多くなり、認知症になりたくない!と認知症予防に対する意識も年々高まっていると思います。そこで、「啓発」「支え」「予防」の活動を並行して行っていくことが大切ではないかと考えました。

目標は...

かなざわささえ隊の会員は、一金沢区民として、前面に出て目立つ活動をする事なく、影で静かに見守り、地道な小さな活動をすることで、認知症の早期発見が出来、いち早く医療機関や地域包括センター等に繋げる、こんな底辺レベルの草の根的な活動を目指しています。

また、将来は金沢区民全員が、認知症サポーターとして、認知症予防を日頃から心がけ、隣り近所の認知症の人やその家族を暖かく見守り、たとえ認知症になっても、自由に買い物したり、外に出かけたりと普通の生活が出来る、また、認知症故に起こるトラブルがあっても、街の誰でもが対処出来、安心して暮らせる街になる事を目標とします。

活動名称	認知症高齢者に対する在宅支援事業
活動要旨	本人や家族を支援するための様々な社会資源を組織化した地域ネットワークづくりや認知症に対する正しい知識の普及啓発活動、適切な情報が得られるような情報環境整備などを目的に事業を展開。
応募者	NPO 法人 福島県シルバーサービス振興会 鈴木 智子
連絡先	〒960-8043 福島県福島市中町4番20号 みんなゆうビル302号室

(概要)

「認知症高齢者に対する在宅支援事業」の概要

福島県は、人口210万人に対し、65歳以上の人口が50万人、高齢化率が23.8%と全国平均を5年先行し高齢化が進行している。認知症高齢者は年齢とともにその出現率も高く本県は全国的にも高齢化率が高いため、認知症高齢者の数も今後増加が予想される。国の認知症推計値を基に推計すると、本県の認知症高齢者は平成22年には、3万7千人に達すると推計されている。

このような状況の中、本事業は、認知症高齢者や家族が住み慣れた地域で生活できるよう、本人や家族を支援するためのさまざまな社会資源を組織化した地域ネットワーク作りを行い、それらの有機的・効果的な活用を図るとともに、認知症早期予防対策として、地域の啓発活動の担い手となる関係者や早期発見の担い手である地域住民や家族に対し、認知症に対する正しい知識の普及啓発事業を行うこと。また、介護者等の置かれている環境や介護能力に応じて適切な情報が得られるよう、情報環境を整備し、認知症高齢者及び家族への支援が円滑に行われるようにすることを目的とする。

以上の目的を達成するため、三つの観点から事業を実施した。

一つには、認知症の早期発見と早期対応のための積極的取り組みとして、行政をはじめ医療、福祉、介護、住民組織等幅広い関係機関がそれぞれの役割を明確にし、実際の支援組織としての役割を果たすよう21の関係機関によるネットワーク連絡協議会を設置し有機的・効果的な連携を図ることとした。

二つには、元気高齢者を認知症予備軍(認知症になる可能性の高い状態)にしないため、早期発見の担い手である地域住民や家族に対する知識の普及や、認知症の発症を防止するために、日常生活に関する危険因子を低減するための、医学的知識も含めた知識の普及啓発研修会等を開催した。特に、一般県民を対象とした有識者による講演会を開催し、また、県内三ブロックに分け、地域活動の担い手や家族を対象に一般向けカリキュラム、施設介護従事者等を対象に介護従事者向けカリキュラムを作成し、研修会(施設研修を含む)を実施した。

三つはネットワーク連絡協議会構成機関の役割と窓口の明確化により、各機関からの情報提供がスムーズに行なわれ、それらの情報を本振興会のホームページを通して広く公開し、本振興会のホームページにアクセスすれば、認知症に関する多角的な情報が、しかも一カ所の入り口から容易に検索できるよう情報システムを構築した。このように、情報環境を整備し、利用者がこれらの情報等を活用することにより、介護者の負担を軽減し、在宅を中心とした生活が可能となるようにした。

活動名称	認知症の方々から学ぶ暮らし方・生き方探し事業
活動要旨	独立行政法人福祉医療機構の助成を受け、事業を実施。自治会長・民生委員・認知症家族の会などの協力を得て、認知症になっても安心して暮らしてつづけるためにどうしたらいいのかを暮らしの場で検証。
応募者	特定非営利活動法人 ゆうらいふ 理事長 山田 登喜子
連絡先	〒524-0214 滋賀県守山市立田町 1231-4

(概要)

“長生き”が普通となった現在、“老い”と“死”は皆のものです。また認知症発症の可能性も誰もが持っています。どうすれば“老いの問題”を不安から解消できるのか？この課題は医療・福祉の専門職だけで解決できるものではありません。そこで、認知症になっても住みなれた地域で、安心して生活し続けるにはどうしたらいいのか？を、暮らしの場で検証してみることにしました。

実行委員の方々は、安心・安全の生活支援のために地域に根ざした活動をしている自治会長・民生委員・認知症をかかえる家族の会・ケアマネジャーの方々に構成し、具体的に生活支援に役立つ研究を目指しました。アドバイザーとして認知症の専門外来で診療されている松田医師・長濱医師のご協力を得ることができました。委員会の論議のテーマを「地域の生活力」の再発見とし、“ある ある大発見！ご近所の底力！無いものねだりからあるもの探しへ”を合言葉に研究事業を推進していきました。

高齢期を迎えたの方々にとって暮らしの場である地域は“馴染みの場所”であるはずですが、そこで生まれ育った方は70年・80年、嫁いできた方は40年・50年、転居の方はそれなりに・・・“暮らしの場”を軸に考えると、人にとっての日々の生活は地域を基盤に成り立っています。この“地域力”の活用こそが豊かな暮らしの原点ではないでしょうか。人を育て・はぐくんできた地域が“認知症”や“老い”や“命の終わり”を見放すようでは豊かな社会とは言えません。地域に暮らす委員の方々とともに“地域の底力”を探しているうちに“本人の生活力”の逞しさ“家族の底力”にも気付かされました。

介護・医療に携わる者は、認知症や寝たきりの方々に介護・医療・福祉の制度利用で生活支援をしていかなければ・・・と考えてしまいがちです。それだけでは“生活”という捉えどころのない（価値観の不透明な）ものの支援はできないことにも気付かされました。人はそれぞれに逞しく生き、それなりに病や老いを引き受けようとしているのです。

“本人の生活力”を幹に地域という大地にしっかりと根を張り、家族の力を活用して必要な介護サービスを利用していくと、認知症になっても何とか暮せるのではないかと、明るい期待が生まれできました。加えて医療や福祉制度サービス・司法サービスを必要時利用していけば、衣・食・住・介護はまかなえるのではないのでしょうか。ただ、最も難しいのが地域のなかにある“偏見”との戦いです。認知症や寝たきりになった方々をはじき出さない地域づくりが必要です。

理想的には地域の住人が“明日はわが身”を合言葉に、お互いに支えあうことのできる街・安心して命の終わりを迎えることのできる地域を、みんなで考える場が創れ、繋ぎ合えるネットワーク化ができればと願っています。

活動名称	地域の声で始まった『認知症劇』
活動要旨	地域包括支援センターとコミュニティセンターごとの地区の住民で話し合う地域福祉連携会議をきっかけに「認知症劇」やグループワークを住民が中心になって実施。地域住民が認知症を知り地域で支えることについて考えることが広がっている。
応募者	長岡市地域包括支援センターなかじま 井波 靖子
連絡先	〒940-0093 新潟県長岡市水道町3-5-30

(概要)**<地域福祉連携会議の取り組み>**

当市の地域包括支援センターでは、地域との連携体制を作るため、市内のコミュニティセンターごとの地区を受け持ち、各地区で高齢者に関する課題や問題などを住民の方々と話し合う「地域福祉連携会議」を行っています。

話し合いの内容は、認知症の方のご近所トラブルや接し方についての関心が高く、認知症について何か取り組もう、という地区が出てきました。

具体策を会議で話し合ったところ、住民に「認知症劇」を見てもらい、認知症について知ってもらうことと、認知症の人を地域で支えるにはどうしたらよいかを話し合おうということになり、役者も地域の方々からなっていたいて、劇とグループワークを行いました。

<認知症劇をやってみて>

地域の方々による即席劇は大成功、笑いの渦で楽しんだ後、グループワークでは様々な意見、前向きな意見が出てきました。

<他の地区へも波及>

高齢者に関する課題や問題は市内どの地区もだいたい共通しています。認知劇の噂を聞いた他の地区の地域福祉連携会議から、「うちの地区でも」という声が出、実現し始めています。

<市の事業との違い>

長岡市では市の事業として認知症予防教室や物忘れ相談会などをいくつかの地区で行っていますが、この「認知症劇」は地域の方々が「やってみよう」という思いで始まったもので、参加の声掛けや運営を住民の方々が熱心に行っているのが特徴です。

<平成20年度(高齢者のための)地域福祉連携事業(組織編) - 介護予防推進室>**「高齢者のための」地域福祉連携事業とは**

目指すもの

- ・地域の関係者や協力機関が、高齢者の個別の問題を「地域の問題」として捉え、自分たちの地域を住みやすくする(高齢者に元気になってもらい、又その家族を支援できる)にはどう動いたらよいか分かる。
 - ・地域住民みんなで、地域自身の解決策(サービス他)を実施することができる。
- 「地域福祉連携会議」はこれを実現していくための検討の場です。

構成員：地域関係 - 老人クラブ、町内会、コミュニティ推進協議会、福祉部会、地元医師、民生委員、地区社会福祉協議会、その他地区のボランティア団体など。

関係機関 - 郵便局、金融機関、商工会、介護保険関係事業。

公的機関 - 交番、社会福祉協議会、市役所、地域包括支援センター、地区コミュニティセンター。

活動名称	「いつでも いつまでも きれいでいたい」ヘアメイク、ハンドマッサージ等の体験により笑顔全開、気分リフレッシュ
活動要旨	理容店、美容店に出向くことが困難な高齢者や障がい者の方たちの自宅や入居各施設に、「福祉理美容士」が出張し、高齢者が前向きな気持ちになるよう理容、美容全般のサービスを提供している。
応募者	NPO法人 日本理美容福祉協会 滋賀米原センター 仲谷 由美子
連絡先	〒521-0325 滋賀県米原市藤川 1351

(概要)

滋賀県の北部、湖北地域に2006年にNPO法人 日本理美容福祉協会 滋賀米原センターを開設しました。現在、登録理容師、登録美容師は9名です。

自ら、理容店、美容店に出向くことが困難な高齢者の方や障がい者の方たちの在宅や、各施設に介護や福祉について勉強し、講習を受けた「福祉理美容士」が出張し、理容、美容全般のサービスを提供しています。

活動地域は、米原市、長浜市を中心とした湖北地域、彦根市とその周辺の湖東地域、そして現在、岐阜県西濃地域からの依頼も多くなってきました。

全国に現在のところ30か所程、各地域ごとにセンターがあります。

滋賀米原センターでは、訪問理美容業務の傍ら、社会福祉協議会等のディサービスやグループホーム、特別養護老人ホームに出かけ、ヘアメイクのボランティア活動を積極的におこなっています。お化粧をされると、皆さん自然と笑顔がこぼれ、明るい表情になります。

鏡を手にとってじっと見て微笑んでいらっしゃる方や、まゆ毛をもう少し細くして欲しいとご要望を出される方や・・・お化粧する前とされた後では表情が明らかに違います。

また、男性にはハンドマッサージをおこなっています。あまりの気持ちよさにうたた寝をされる方もいらっしゃいます。

お化粧や髪の設定をプロの美容師がおこなったり、アドバイスすることによって、認知症の高齢者の方々は大変喜ばれ、いきいきとされます。

私たちと会話を楽しみながらお化粧をするという和やかな時間を過ごすことは若かりし頃を思い出され、精神的な豊かさや満足度を高めていくことになります。「いつでも いつまでも きれいでいたい」という気持ちは誰もが望んでいることだと思います。

高齢になると、外出の機会が減るということで生きがいを失うケースが近年増加傾向の中、お化粧したり、髪をきれいさっぱりするという行為が、人前に出る意欲を湧かせ、気持ちに張りを出させ、毎日の生活に対して、前向きになられます。

私たちは通常は髪をカットしたり、パーマ・毛染め・顔そりをしたりと在宅や各老人施設、重度障がい者施設等に出向き、訪問理美容業務をしています。今後も、時間の許す限り、ヘアメイクボランティア活動をおこない、少しでも高齢者の方々に喜んでいただけたら幸いです。

活動名称	「朱雀の会 若年認知症家族会」の活動
活動要旨	若年認知症に関する定例会、勉強会、施設見学会、懇親会、会報発行、電話相談などを実施。若年認知症の方の住みよい町づくりを目指す。
応募者	朱雀の会 若年認知症家族会 代表 大塚 幸子
連絡先	〒631-0013 奈良県奈良市中山町西 3-218-6

(概要)

平成9年「呆け老人を抱える家族の会」(現 認知症の人と家族の会)奈良県支部内に「初老期痴呆家族会」として平成9年より活動。しかし、平成12年度末、この活動が本部の方針で中止せざるを得ない状況になり、継続を願う家族がまとまり、平成13(2001)年4月に「朱雀の会」として正式に発足。会の名称は、当時事務局の所在地であった「朱雀」から名づけられた。

平成13年4月1日朱雀の会 若年認知症家族会設立

<事務局> 代表：大塚幸子 世話人：約20名

住所：〒631-0013 奈良県奈良市中山町西3丁目218-6

電話番号：0742-47-4432

URL：<http://hp.kanshin-hiroba.jp/suzakunokai/pc/>

年会費：家族会員5,000円・賛助会員10,000円。

<活動内容> 定例会、勉強会、施設見学会、懇親会、会報発行などを実施しています。定例会は、2か月に一度、公共の施設を借りて行っており、互いに悩みを打ち明け、アドバイスをしたりアイデアを出し合います。介護の専門職にサポート会員として来てもらい、家族も安心して本人と参加することができるよう工夫をしています。家族が交流を行っている間はサポート会員が本人とおしゃべりをしたり、カラオケや散歩などのレクリエーション活動を行っています。

先にも述べたとおり、定例会での相談や疑問をテーマに取り上げ、年に数回、それを掘り下げたかたちで勉強会、講演会を行っています。内容は、精神科医や理学療法士、歯科医(口腔ケア)による講演、家族の体験談やサポート会員による介護のアドバイス、社会保障制度のシステムや行政への手続きなど、多岐にわたります。

また、家族や本人たちは自分の目で見て施設を知ること、また、施設側には、現段階では若年も高齢者施設の利用になるにもかかわらず、接する機会がすくないため、家族の話を通じて若年認知症を知ってもらうことを目的として、施設見学を行っています。

リフレッシュ懇親会では、年に一度、1泊2日でバリアフリーのホテルに宿泊します。家族や本人にリフレッシュしてもらうのを目的とし、昼は専門職のサポート会員に参加してもらい、勉強会や個人相談会を開いております。夜はみんなでご飯を食べながら、カラオケなどをし、二次会では家族や本人も交えて時間を気にせずおしゃべりをします。そして、定例会や勉強会、講演会、懇親会などの内容を載せた会報を年5～6回発行しています。

ホームページも平成20年度より、開局しました。

<成果と展望> 会に参加することで、地域で生活する若年認知症の方々の問題点を知ることができたという声や、親身にアドバイスに乗ってくれるという声が挙がっています。また、サポート会員のひとりが知りえた地域の問題点を、所属している「グループホーム古都の家 学園前」で話すうちに、地域で生活する若年認知症の方の生活支援・就労支援・専門職への研修事業・情報収集・情報提供・啓発事業・相談事業等を行うことが必要だという考えに至り、今後の課題としてそれらの内容が行うことの出来る若年認知症サポートセンターの開設に向けて計画がなされています。朱雀の会と若年認知症サポートセンターの活動を合わせて、若年認知症の方の住みよい町づくりを目指していきたいと思っております。

活動名称	認知症支援ネットワーク構築事業
活動要旨	認知症高齢者を地域のネットワークと見守りにより支援できる体制を構築するべく、行政・企業・民間団体などが協力し事業を展開。
応募者	社会福祉法人 上士幌町社会福祉協議会 事務局次長 河瀬 貴
連絡先	〒080-1408 北海道河東郡上士幌町字上士幌東 3 線 237 番地

(概要)

上士幌町は高齢化率が30%を超え、軽度の認知症の在宅高齢者も多く、「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」を目指し、地域で暮らす認知症高齢者を地域のネットワークと見守りにより支援できる体制の構築を目的として事業を展開しました。主な事業は下記の4つです。

1. 認知症サポーター養成講座

開催日時：平成19年8月24日(金) 18:00~19:30 参加人数：87名

平成19年8月25日(土) 10:00~11:30 参加人数：52名

開催場所：上士幌町生涯学習センター 視聴覚ホール

講師：瀬戸正嗣さん(認知症サポーターキャラバンメイト・特別養護老人ホーム厚別栄和荘施設長)

内容：「認知症を学び地域で支えよう」

- ・開催案内チラシを2,300部配布
- ・行政や教育委員会・金融機関・商工会・老人クラブ等の関係機関、団体と事前打合せ

2. 認知症介護体験講演・介護劇公演(認知症研修会)

開催日時：平成19年9月29日(土) 10:00~12:00 参加人数：151名

開催場所：上士幌町生涯学習センター 視聴覚ホール

内容：体験談講演会「認知症の夫を介護して」

講師：認知症と家族の会 堀川静香さん

認知症介護劇公演「絆」 NPO法人 劇団ほうき座

- ・開催案内チラシを2,300部配布
- ・行政や教育委員会・金融機関・商工会・老人クラブ等の関係機関、団体と事前打合せ

3. ひとり暮らし高齢者親睦会

開催日時：平成20年1月25日(金) 11:00~13:00 参加人数：91名

開催場所：上士幌町山村開発センター 大ホール

内容：・ひとり暮らし高齢者相互の交流を目的に実施

- ・対象者350名に案内はがき送付
- ・教育委員会・中学校と事前協議により、中学生との世代間交流を実施

4. 悪徳商法や訪問販売業者の被害抑止

内容：ひとり暮らし高齢者や認知症高齢者を悪徳商法や訪問販売業者から守るため、消費者協会と連携をはかり、他地域でも効果を上げている車両貼付用マグネットステッカーを作成し、社協公用車両をはじめ関係機関車両に貼り、被害抑止をはかった。

(今後の展望)

- ・今回関係づくりができた関係機関、団体と更に密接な協力関係による事業展開
- ・養成したサポーターが継続して認知症の方を支援・援助する組織化や、ボランティアとしての登録の働きかけ、活動場面の提供や自主的な活動展開
- ・本町ではまだ結成されていない、認知症の人と家族の会の結成に向けた働きかけや、相談や愚痴、苦勞を話せるピュアカウンセリングの必要性
- ・災害時の支援体制
- ・悪徳商法や訪問販売業者の被害抑止として、今回の取組みよりも一歩踏み込んだ展開

活動名称	山形市介護相談員派遣事業
活動要旨	介護保険サービスのよりよい提供体制を築くため、「介護相談員派遣事業」を実施。グループホームへも訪問し、快適な共同生活ができる仕組みを市民（相談員）利用者、事業者が共に模索している。
応募者	山形市介護相談員（山形県山形市健康福祉部介護福祉課） 小松 均（介護福祉課 高齢福祉係 小野寺）
連絡先	〒990-8540 山形県山形市旅籠町2-3-25

（概要）

山形市では、2000年の介護保険制度開始時から、施設や在宅で介護保険サービス利用者に対し、要望や不満、苦情などについて生の声を聞き、よりよいサービス提供体制を築くために、「介護相談員派遣事業」を実施してきました。2003年頃までの活動は、特別養護老人ホームなどの施設や居宅サービス利用者を問わず対象としてきましたが、施設における活動が75%を占めていました。しかし、2004年9月現在では、2000年4月に比べると介護保険サービス利用者はほぼ倍増し、居宅サービス利用者は全サービス利用者の75%を占めるようになっていました。

居宅サービス利用者は、サービス利用などの面で施設入所よりも閉鎖的になる可能性があります。また、介護支援専門員による苦情処理や相談機能等についても、制度が想定しているほど十分に機能しているとは言えない状況であっても、介護相談員が直接訪問し地域で活動する意義は大きいと考え、在宅活動を拡大する方向を模索してきました。さらに2004年からは、特定施設入居者生活介護（介護付き有料老人ホーム）短期入所生活介護（ショートステイ）も、地域や在宅におけるサービス利用者と位置付け、訪問活動の対象としています。

2006年からは、介護相談員派遣事業が地域支援事業の中に位置付けられたことにより、地域特性に基づく活動が重視されるようになりました。

また、認知症への関心も高まり、認知症の人も地域で尊厳ある暮らしが出来る仕組みをつくる取り組みが始まりました。山形市介護相談員は、「認知症サポーター100万人キャラバン」に積極的に関わることとして、認知症キャラバンメイトの研修を受け、11人の相談員が登録をし、認知症サポーター養成研修の講師として活動に参加しています。

その中で、グループホームにおける虐待が社会的に取り上げられることがありました。特異的な事例であっても利用者や家族には不安が募ります。そこで、グループホームの実態を市民の目線で知り、伝え、安心して利用できる環境づくりとして、事業所と共に創るための活動を検討しました。特別養護老人ホームなどの利用者の80%以上の方は、何らかの認知症の症状があります。認知症を持つ人との相談活動について、月例の事例検討会の中で意見交換をしてきましたが、個別検討課題として残されたままです。また、他の自治体で活動している相談員との意見交換を通して、グループホームの訪問活動を何らかの理由により休止している例もあることを知りました。

しかし、2007年に派遣をする予定のグループホーム管理者と話し合う中で、「ぜひ訪問して実態を知って欲しい」とか、「一緒に利用者が安心して生活できる環境づくりに協力して欲しい」などの意見を聞くことができました。その経過などを経て、2007年10月から、試行的に2カ所のグループホームを対象として相談活動を実施することとなりました。

この間、訪問時の管理者や介護職員との話し合いを重視しながら、活動の仕方を模索し、また利用者と一緒に買い物や調理なども行いました。利用者から「また来てください。」との声も聞けるようになり、2008年10月から10カ所のグループホームを対象に本格実施することになりました。グループホームは、各事業所で運営方針や相談員受け入れの考え方も異なる為、相談活動は一概にはいきません。しかし、認知症の人たちが、安心して快適な共同生活ができる仕組みを市民（相談員）利用者、事業者の三者で共に創っていく試みとして模索していきたいと思えます。

活動名称	ふれあい・いきいき・サロンと認知症をもつ人を支える仕組みづくり
活動要旨	社会福祉協議会が住民を対象に、喫茶やレクリエーション、介護予防、学習会などを行うサロン事業を展開。認知症になっても社会参加できる体制づくりに取り組む。
応募者	近畿大学豊岡短期大学通信教育部 社会福祉士養成課程 舟引 道之
連絡先	〒679-5142 兵庫県佐用郡佐用町下本郷 647-1

(概要)

「向こう三軒両隣」。人と人のつながりがどのくらい希薄になっているだろうか。充足されてきた社会的介護の弊害として家族意識はどのように変容しているだろうか。認知症になると地域行事には参加できないのだろうか。また、少子高齢社会の進展や社会保障制度の変容が見込まれるが、在宅で認知症をもつ人の生活の質を高めていくことが求められるのではないか。

認知症をもっても住みなれた地域で「いきいきと尊厳ある暮らし」を営む為には、医療、福祉、行政などの連携による「社会保障制度に基づいて実施される支援」はもちろんであるが、その社会保障制度に含まれない「生活支援」が重要であり、その為には、家族をはじめすべての地域住民の「意識変化」による「相互扶助」が必要である。私が、認知症をもつ人をはじめとした地域の支えあいの仕組みが必要であると強く考え出したきっかけは、このようなものであった。

そこで、私が属している社会福祉協議会（以下、社協）が実施している「ふれあい・いきいき・サロン（以下、サロン）」に注目したい。身近な各集落のクラブ（集会所）で、月1、2回程度、住民が主体となり、喫茶やレクリエーション、趣味活動、介護予防、学習会を実施し、子どもの見守りや高齢者のひきこもり防止、コミュニティの形成を目的とした事業である。現在、町内では社協が全集落に委嘱している福祉委員や地域のボランティアが中心となって約7割の集落が実施しており、その多くは100円喫茶を中心に活動している。サロンを中心に下記の事柄が機能すると、予防からケアまで実施できる場として広く住民の「健康」を保つ事に繋がり、「相互扶助」をシステム化することにより、地域での認知症をもつ人を支える「平成の向こう三軒両隣」に資すると考える。

実施目標（サロンを中心に）

【 地域での助け合いがしやすい支援体制づくり、 介護予防や機能回復訓練メニュー実施、 季節行事や趣味活動を役割分担して実施、 学習会や啓発活動など住民意識へのアプローチ 】
これは、 相互扶助に一定のメリットを付加することにより、生活支援などを行うシステムを安定させ、これにより認知症をもつ人も「社会参加」でき、 健康体操や機能回復訓練、介護予防などを一人で続けるににくい人が、みんなで一緒に行うことで「継続」でき、「役割形成」することによって精神的充実・安定が得られ、認知症の予防やケアにつながり、 学習会や啓発活動を行うことで「意識啓発」に繋がり、サロンへ参加しない人についても友人などから学習内容を聞くなど、広く予防意識が高まると考えられる。しかし、このようなサロンを支える為には行政・医療・福祉等の職員、民生委員、地域の専門・非専門ボランティアなどの多くの社会資源が連携し、情報を共有してサロンを支援する体制が必要であり、中長期的なビジョンをもって、科学的・専門的な「手法」による指導や支援を計画的に実施する事が重要である。

認知症になってもサロンなど社会参加できる体制を確立するための活動

【 認知症の意識啓発、 関係機関への呼びかけ、 認知症サポーター養成講座の実施、 地域住民との協働による展開 】

こうした活動に取り組んだ成果から、サロンを中心とした助け合いの仕組みを構築することによって、認知症をもつ人をはじめとした地域住民が「その人らしい人生を、住み慣れた地域で、さまざまな機関や人が繋がって助け合い、いきいきと生活を営める」と考えられる。今後の社会情勢の変容にも弾力的に乗り越えられる地域の実現に向けて、まだまだこれからであるが、住民合意を基本に確実に一歩ずつ取り組んでいきたいと思う。

活動名称	いくつになっても「イキイキ」と - 「安心・快適・満足」の美容サロンが地域のセーフティネットに -
活動要旨	施術しながら話を伺う美容師は、お客様の身体や心の特徴を踏まえた対応が必要と考え、福祉美容活動を推進。高齢や障害のあるお客様に、安心・快適・満足美容サービスを提供する「ハートフル美容師」を養成。ホームヘルパー3級講座にも着手。
応募者	東京都美容生活衛生同業組合 事務局長 野口 喜久雄
連絡先	〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-56-4 美容会館1F

(概要)

日本は、全人口に占める65歳以上の割合は19.9%(5人に1人)、10年後には26.0%(4人に1人)という、これまでに経験したことのない超高齢社会を迎えます。高齢者が急増する中、寝たきりや認知症の方や障害を持つ方も増加し、要介護高齢者は2000年で280万人、2025年には520万人に達するといわれています。こうした中、これからの時代は、優れた美容技術だけでなく、お客様の身体や心の特徴を踏まえ、高齢者や障害者に「安心・快適・満足」を与えられる美容師が求められていると私たちは考えます。

東京都美容生活衛生同業組合(BA東京)では「福祉美容」の活動を2つの柱を中心に推進しています。

1つは、「東京都福祉美容サービスセンター」の設置です。平成12年に設置をし、各支部の地域福祉増進事業への取り組みを支援し、おもに出張美容等の福祉美容サービスなどを行っています。ご自宅や高齢者施設へ出張美容に伺っていますが、初めは遠慮されていた高齢者の方も、髪をカットして、しっかりとしたケアをしてさしあげると、みるみると目に輝きが戻ってきた、という現場からも声がありました。こうした美容ニーズにお応えすることは、美容業界として安定したビジネスの確立につながるものと考えています。

もう1つは、「ハートフル美容師養成」です。BA東京の上部団体である、全日本美容業生活衛生同業組合連合会と社団法人シルバーサービス振興会により、平成17年度からスタートしています。ハートフル美容師とは、高齢のお客様や障害のあるお客様に、安心・快適・満足美容サービスを提供するための知識・技術を身につけた美容師です。美容師からの興味・関心も高く、平成20年6月末で、東京都では350名、全国でも5466名のハートフル美容師が誕生、活躍しています。

こうした福祉美容の活動も着実に身を結んできていますが、さらにホームヘルパーといった資格もあればお客様の信頼度も増すし、適切な対応ができるのではという声現場よりあがってきました。そこで、美容師を対象としたホームヘルパー3級養成講座にも着手しています。

地域でお店をひらきながら、美容師もお客様とともに年を重ねています。美容師は施術をしながらお客様と会話し、その方が得意とされていること、楽しかったこと、時には愚痴など、その方が思わず話したくなるようなさまざまなお話をうかがいます。こうした中、常連のお客様の中に認知症の兆候がみられることもできています。「福祉美容」活動の理念として、地域密着・社会貢献を掲げていますが、お店でなにかちょっと起きた場合にお客様が安心できるよう話をきいてさしあげるなど、ちょっとした手を差しのべること。こうしたことが、地域の一員としての、心のこもったサービス、「安心・快適・満足」の美容サービスにつながるのではないのでしょうか。

ホームヘルパー3級養成講座を受けた受講生からは、「人に対するサービス業として、福祉も美容も同じではないか」という声がかれました。資格の勉強をすることで、単なる知識だけでなく、知識や研修での体験をもとにお客様の心を動かせるような、心のこもったサービスのできる美容師が増えてくるように組織としてもバックアップしていきたいと考えています。

活動名称	認知症地域支援体制構築等推進事業「地域資源マップ」の作成
活動要旨	認知症地域支援体制構築等推進事業の「地域資源マップ」の作成を通じて本人や家族の思いを再認識して援助方法を考え直す。
応募者	東郷町地域包括支援センター 鴨井 千恵子
連絡先	〒470-0162 愛知県愛知郡東郷町大字春木字西羽根穴 2225-4

(概要)

「介護保険サービス事業者交流会を通して、認知症を考える」

認知症の人とその家族が住み慣れた地域で安心して生活するためには、認知症への対応(早期予防・早期発見・早期治療)が必要であり、認知症の人と家族を支えるための「地域資源」のネットワーク化が必要である。今年度、東郷町では、「地域資源活用モデル事業」を受け、認知症のネットワークの構築を推進することとなり、それに先駆けて、介護保険事業者交流会において、認知症の人と家族を支えるために必要な「地域資源」とは何か、を考えたい。

(地域の紹介)

東郷町は、自然や子育て環境に恵まれ、名古屋市都市圏の郊外住宅地として高く評価されている。主要幹線のバイパス建設などの交通基盤の整備、さまざまな公共施設やサービスの充実など生活環境を整える一方で、愛知池や境川などの水源、穏やかに広がる緑や丘陵といった豊かな自然にも恵まれており、多くの魅力にあふれた町である。また、愛知池で盛んに行われるレガッタ競技を通じ、「水と緑とボートのまち」として全国に交流の輪を広げている。

【人口】40,180人(平成20年8月現在)

【65歳以上の人口】6,434人(高齢化率 16.01%)

(活動の内容)

東郷町では、現在13の介護サービス事業所と8つの居宅介護支援事業所があり、ほぼ2ヶ月に一度、介護保険事業者交流会を開催している。東郷町で「地域資源活用モデル事業」を委託されたのをきっかけに、この事業者交流会において、認知症とは?を考えなおすきっかけとした。

事業者交流会を2回開催。下記のテーマに沿って、意見をまとめ、地域資源マップを作成。

【第1回】

テーマ 認知症の人・家族・関係者の思いとは?

テーマ 在宅で生活していくには何が必要か?

テーマ 認知症の人が安心して暮らせるには?

【第2回】

テーマ 認知症の人・家族が安心して暮らすには、どんな情報があったら役に立つか?

テーマ テーマ で出された、役に立つ情報を地図に落とし果たしたら?

まとめとして、今回の交流会での作業を通して感じたこと、認知症についてどう思ったかななどの意見交換を行った。

(活動の成果と今後の展望)

認知症の人とその家族が地域で、その人らしく生きること、それには、認知症の人と家族を支える地域ケア体制の構築が不可欠となる。介護保険サービス事業者にとって、ともしれば業務に流されがちであるが、今回の事業者交流会を通して、認知症の人や家族の思いを再認識し、どういった援助を求めているか、どういった援助を行えばよいかを考える機会となった。

交流会で作成した「地域資源マップ」は、地域資源活用モデル事業で作成されるモデル地区の「地域資源マップ」の参考となった。今回の地域資源活用モデル事業の「地域資源マップの作成」「徘徊SOSネットワークの構築」「模擬検索訓練」を通じ、地域住民、介護保険サービス事業者、医療機関、関係団体等との「地域包括支援ネットワーク」が構築できるよう(認知症に限らず)地域包括支援センターがその役割を担っていかなければならない。

活動名称	「共生ステーションめいまい」の活動
活動要旨	地域再生計画事業の一環として、NPOが県営住宅の空き住戸に住民の「居場所」として「共生ステーション」を設置。団地のお年寄りたちの交流を支援。
応募者	共生ステーションめいまい 入鹿山 松子
連絡先	〒 652-0802 兵庫県神戸市兵庫区水木通4丁目1-17 シャンテ美和1F ひょうごWAC内

(概要)

明石舞子団地（以下「明舞団地」）は、神戸市の都心から西へ約15kmの、神戸市垂水区と明石市にまたがる広さ約197haのニュータウンです。高度成長期の逼迫した住宅需要に対応するため、昭和39年に兵庫県及び県営住宅供給公社が開発した地域です。

しかし、住民の高齢化や住宅・施設の老朽化、人口減少等も相まって、地域活力の低下やコミュニティ機能の衰退など、いわゆるオールドニュータウン化が課題となっています。

(1) 再生計画の策定

兵庫県では、オールドニュータウン再生のモデルとして、明舞団地を対象にソフト・ハードにわたる再生への取り組みを進めてきました。まず初めに、地元協議会やNPOとの共催により「明舞まちづくりワークショップ」を開催しました。参加した住民による意見・提案を参考に、平成15年度に「明舞団地再生計画」を策定しました。

再生計画では、ハード面の再生事業に関する内容と、住民の団地再生に向けた意識醸成とNPO等との協働によるコミュニティ機能の活性化など、主にソフト面での再生事業に取り組んでいます。

(2) 空き店舗へのNPO、住民活動の誘致

明舞センター等の空き店舗を活用して、平成15年には高齢者等の生活サービスの提供などを実施するNPOを募集しました。高齢者向け健康食堂と配食サービス実施する、「ふれあいお食事どころひまわり」は2年間の助成期間（平成15・16年）が終わったあとも地域ボランティアを巻き込んで事業を継続し、地域にとってなくてはならない存在になっています。

また、同じく空き店舗を利用して、団地再生に関する情報の周知や住民相互の交流・情報交換のためのオープンスペースとして、平成16年度に「明舞まちづくり広場」を開設しています。広場の企画運営は住民の主体的なまちづくり活動団体である「明舞まちづくりサポーター会議」が実施しており、講習会や交流イベントなどが継続的に開催されています。

(3) 地域再生計画の認定

「公営住宅における目的外使用承認の柔軟化」の支援が得られる「地域再生計画」の認定を兵庫県が平成16年6月に取得し、平成18年度からは団地内の県営住宅をコミュニティ拠点として活用できるようになりました。

ひょうごWACも、この事業を通して明舞団地の再生に参加するようになりました。ひょうごWACは、県営住宅の住戸を「共生ステーションめいまい」と名付け、全員がヘルパー資格を持っている、ひょうごWAC職員を常駐させ、多世代の住民が誰でも気軽に立ち寄れるオープンスペースとするとともに、団地内に数多く居住されている高齢者の介護予防を進めています。また、定期的に映画会やカラオケ大会等を実施するとともに、介護と福祉を通したまちの再生に取り組んでいます。

(4) 活動団体のネットワーク化

平成19年には、明舞団地でまちづく活動の支援を続けるNPO法人、神戸まちづくり研究所が主体となって、国・兵庫県の支援を得て「多世代共生ネットワーク構築事業」を実施しました。

ひょうごWACを始め団地内で活動を進める団体同士のネットワーク化を「まちづくり広場」を拠点として進めるとともに、地域活動を始めたい地域住民の発掘などを実施しました。

活動名称	若年認知症の方を支える講演会活動 ～一人の方の思いを形にすることで広がった地域作りの事例～
活動要旨	パソコンを使って若年認知症の方のやりたい事をサポートする「パソコン倶楽部」を実施。若年認知症の方の社会的支援を明らかにし、全国で適切な支援が広がることを目指し、専門職の研修、一般向け啓発活動、ご本人やご家族の集える場づくりを実践。
応募者	認知症の方の暮らしを考える会 中西 誠司
連絡先	〒651-1512 兵庫県神戸市北区長尾町上津 4663-3

(概要)

若年認知症の方一人の思いを支えることから始まった活動が、地域の人々を巻き込み、認知症への理解に広がり、また、「認知症の方の暮らしを考える会」という市民活動へと発展した事例について報告する。

本報告は、若年認知症の方のケアおよび社会的支援を明らかにすること、そして、全国で適切な支援が広がることを目的に実施された「若年認知症の社会的支援に関する研究事業」が基になっており、これらを検討する試みの1つとして「パソコン倶楽部」として実施されたことから始まった。「パソコン倶楽部」はパソコンを使って若年認知症の方ご本人のしたい事をサポートするという目的があった。今回のケースでは、ご本人が、1.何らかの表現をしていくこと。2.社会につながっていくこと。3.パソコンを介した「場」ができることがプログラムの目的であった。つまり、一言で言うと、自己実現をはたして社会的な広がりを持つきっかけになることが目的といえる。

この事業を基に、若年認知症の方が、ご本人のご希望で講演会を開催するためにパソコンで講演の原稿を作成し、講演会を開いたのだが、このプロセスで、ご本人が社会に参加でき、また自己実現の場を得ながら支援者が支援の輪を広げることにつながった。

最初はご本人と1人の支援者の個人的なつながりであったものが、ひとつのイベントの開催を通して、支援者が集まり、講演会があった兵庫県三田市で「認知症の方の暮らしを考える会」(本報告をしている団体)が設立され認知症に関する啓発活動などに取り組む市民団体として同市に登録された。2008年3月に講演会開催された以降も、「専門職の研修」、「一般の方への啓発活動」、「ご本人やご家族の集える場作り」の企画・運営を行う活動を実践している。そして、今後も、他の市民活動団体との交流を持ちながら進めていく予定になっている。

この事業は厚生労働省からの国庫補助事業を認知症介護研究研修大府センターが受け、その事業の一部としてNPO法人「認知症とみんなのサポートセンター」が実施したものをもっている。

2008 - 66

活動名称	めざせ 徘徊フリーゾーン 人間関係が希薄な都会で認知症を支える
活動要旨	医療機関としての特性を生かし、住民向けの公開講座開催や介護家族への指導相談窓口を設置。町ぐるみで認知症を支える活動を行っている。
応募者	医療法人社団つくしんぼ会（東京都）

応募者の希望により掲載を控えさせていただきます

活動名称	地域と共に歩む老人ホームを目指して
活動要旨	スローガンは「地域と共に、ボランティアと共に歩む老人ホーム」。月1回「ホーム喫茶」を開催し、家族、地域住民が、ゲストの余興やカラオケ大会などを楽しむ。開催は300回を超え、時に笑い、議論を重ねて、施設と地域の連携が強くなっている。
応募者	社会福祉法人ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名
連絡先	〒903-0802 沖縄県那覇市首里大名町 1-43-2

(概要)

沖縄県那覇市にある特別養護老人ホーム大名では、施設を拠点として地域住民との相互交流が盛んにおこなわれている。施設のパンフレットにも「地域と共に、ボランティアと共に歩む老人ホーム」と謳っており、地域と支え合い、助けあう施設運営を旨としている。

地域がホームの応援を必要としている部分に関してはホームが応援を行い、ホームが地域の応援を必要としている部分に関しては地域の支援をお願いする。そのような地域とホームがお互いに助け合うような相互協力が行なわれているが、その相互協力の雰囲気を醸成させている行事の一つとして毎月第4金曜日に施設で開催されるホーム喫茶がある。

またこのホーム喫茶には、地域の自治会役員や大名地域福祉推進会（大名地区社会福祉協議会）のメンバー、民生委員・児童委員、ボランティア、福祉関係者その他多くの地域住民がいることから、施設と地域組織との連携強化にも繋がっている。

ホーム喫茶の紹介

毎月第4金曜日の19:00～22:00、特別養護老人ホーム大名では月1回の“ホーム喫茶”に多くの参加者が集う、パーティー形式の行事である。参加者はホーム入居者や家族、施設職員だけでなく、近隣の地域住民にも多数参加いただいている。施設の調理スタッフが腕によりを掛けて作った料理やお酒を楽しみながら、毎月訪れるゲストの余興や参加者同士のカラオケ十八番大会等を楽しんでいる。

ホーム喫茶とは、もともと特別養護老人ホームに入居したとしてもお酒や食事を楽しみたいねという趣旨でスタートした行事であり、平成20年8月現在、309回もの会を重ねている。この行事が毎月定期的に行われることによって参加者同士の親睦が深まり、参加者同士のネットワークの強化に繋がっている。

(活動の成果と今後の展望)

地域住民が誰でも気軽に参加できるようなホーム喫茶のスタイルを300回余りも継続することによって、この特別養護老人ホーム大名に対する地域の理解者は増えていった。

また、特別養護老人ホームの職員も大名町という地域や大名地域福祉推進会等の地域組織に対する理解も深めていった。

ホーム喫茶の参加者同士がお互いに意気投合して親睦を深めていくなど、参加者同士のネットワークは次第に強化されている。そのネットワークが強化されるに伴って、地域住民から新たな協力の申し出があり、それが新たなボランティア活動へと繋がった成果は見逃せない。

今後は特別養護老人ホームが有する介護に関する知識や技術（介護方法や認知症に関する知識等）を地域で広く共有し、大名地域に住む高齢者が安心して自宅生活が送れるように支援していきたい。

また特別養護老人ホームで活動するボランティアは多数おられるものの、入居者の趣味・生きがいづくりに繋がるような活動はまだ十分に提供できていないことから、今後は地域住民の力を借りて、入居者の趣味・生きがい活動を支援できるようなボランティア活動の開発を目指していきたい。

活動名称	小地域の公共施設を利用した「高齢者の出前居場所作り」事業
活動要旨	ボランティア活動では担いきれないところ、又は公的支援が届かないところをサポートすべく、『生涯自立・人権尊重・相互協働』を活動理念に地域での支援体制を展開。高齢者が歩いてこれる地域公民館などでふれあいサロンを実施。
応募者	特定非営利活動法人 ふれあい坂下 代表理事 川崎 真理子
連絡先	〒319-1233 茨城県日立市神田町 1810

(概要)

- (1) 介護保険制度が制度利用者を制限せざるを得ない状況への対策
 - 軽度の生活支援を要する高齢者に対して、地域での地域住民による介護予防や見守り支援体制を整える。
 - 介護保険との併用利用による地域での生活自立支援。
- (2) 権利擁護を必要とする独居高齢者の増加への対応
 - 地域で住民の権利を擁護する仕組みづくり。
- (3) 軽度認知症高齢者を抱える家族の負担軽減
- (4) 小地域間の交流を図ることによる、小地域の公的施設利用の活性化

事業の実施状況

- (1) 地域福祉ワーキンググループ(WG)の開催

開催日時：平成19年4月11・24日、5月14日、6月28日

開催場所：久慈川日立南交流センター会議室

参加者：当団体会員(募集12名)

内容：・実行委員募集・試行スタッフ募集
・実行計画原案作成・地域への広報
- (2) 「高齢者の居場所作り」実行委員会の開催

開催日時：平成19年9月5・6日、12月13日、平成20年3月11日

開催場所：JAみなみ支店2階・久慈川日立南交流センター会議室

参加者：当団体会員・地域団体のメンバー有志・地域のボランティア有志

内容：研修の実施計画・研修結果アンケート分析・試行に向けての準備
試行後のアンケート分析・今年度事業のとりまとめ
- (3) 研修会の開催

先進地での体験研修
講座開催
先進地視察
- (4) 「高齢者の居場所作り」試行

開催日時：平成20年1月23日、2月6日・19日、3月7日

開催場所：上神田地域公民館・南高野集会場

参加者：当団体会員・地域団体のメンバー有志・地域のボランティア有志

内容：全員がシニアシッター(スタッフ)として参加した。
9時集合、昼食をはさんで4時まで。その後毎回反省会を行い、実践を積み重ねた。

活動名称	思い出ミュージアムで“なじみ”の場づくり～総泉病院 思い出療法
活動要旨	病院内に昭和30年代の街並みを再現した「思い出ミュージアム」を設置。スタッフと患者の間に信頼関係を築いた上で「思い出療法」に取り組み、患者のQOLや身体機能の向上につなげている。
応募者	総泉病院 ウェルエイジングセンター 高野 喜久雄
連絡先	〒265-0073 千葉県千葉市若葉区更科町 2592

(概要)

「思い出を話してください」といっても話をしない患者さんがいる。なかには話したくないという人もいるだろうが、思い出せないから話せないという人も多い。思い出せないのは、記憶を引き出す「手がかり」がないためである。音、匂い、味、懐かしいモノの手触りや写真、映画、歌…。そんな五感を刺激する手がかりによって記憶を手繰り、活性化させる試みを、平成12年から実施。

当院のロビーには、昭和30年代の街並みを再現した、『思い出ミュージアム』と呼ばれる一角がある。駄菓子屋や貸本屋には、手にとることができる昔の漫画や玩具が並ぶ。日の当たる縁側に座って、足踏みミシンやちゃぶ台の傍らでお手玉遊びをすることもできる。実際に使われていた赤い円筒形の郵便ポストや冠婚葬祭の記念写真が収められた写真館は、昔のよき時代を感じる事ができる空間として、開設以来、患者やその家族に愛されてきた。当院では、この昭和の時代を、テーマとして、あるいはツールとして、“思い出療法”に活用している。

【思い出療法とは】

昔の話をする事によって脳の活性化を促し認知症の予防や進行を遅らせるのを目的としたセラピーとして、回想療法がある。回想は、過去から現在までを思い出し、断片化した記憶を統合して、自己を再生する試みといえる。

一方、当院での試みは、敢えて「思い出療法」と名づけている。現在までを思い出すことで完結させるのではなく、さらに一歩進めて、未来へ向かう視点をもつことまでを目的とするからである。思い出ミュージアムには、たくさんの懐かしい空間やなじみのモノが並んでいる。しかし、単に存在するだけでは、記憶の想起に十分とはいえない。リラックスできる環境が整い、語りかける相手がいるとき、記憶はしだいに豊かな彩りを帯びてくる。「空間」と「モノ」に「人とのかわり」「くつろげる演出」という要素を加えることで、初めて、その空間は親しみの感じられる「場(トポス)」となる。思い出ミュージアムは、単なる空間を「場」に変える試みでもある。

(活動内容)

信頼関係の構築(インテーク)

まず、スタッフ(医師や心理士)と患者さんの間に信頼関係を築くために、事前に患者さんと個別に話し合い、グループ構成を決める。

実施規模

毎回、約1時間、5～8名の参加者から成るグループで、原則週に1回のペースで実施する。

「なじみ」のパターンの構築

セッションは毎回、簡単な自己紹介から始まる。そして日時の確認。全員で当日の正しい日時を復唱するのは、その「場」を共有する大事な儀式だ。たとえ病棟で共に生活をしている顔なじみの患者さん同士であっても、このようにフォーマルな形式をとることが必要なのである。

つづいて、年中行事、旬の果物など、その時々季節に関わりのある話題を選ぶ。ときには、その日の話題にちなんだモノを用意して、実際に手をとってもらいながら、思い出や感想を話してもらう。テーマに関連した歌と一緒に歌うこともある。

思い出療法のキーワードは「なじみ」である。心身になじんでよく分かっている分野、得意な分野のことを足掛かりにしながら、「今度は」「次は」という楽しみを重ねていけるような思い出づくりを心がけている。